

R—TYPE M—Alternative

DAY

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは人類が佐渡島ハイヴを攻略した直後に現れた。

突如として地球の衛星軌道に出現した全長30キロの巨大な宇宙要塞は、攻撃衛星による核攻撃による迎撃どころか、極秘裏に衛星に搭載されていたG弾による攻撃をも回避して、オリジナルハイヴへと到着。

要塞の中から現れたモノは落下地点に存在したハイヴを瞬く間に制圧し、汚染した。

そしてその要塞に巣食う怪物達を追って現れた正体不明の戦闘機群。

それはこの世界とは違う歴史を辿った22世紀の未来が作り上げた最凶の兵器、R。

それはこの世界とは違う時間軸の26世紀地球文明圏が創り出した最悪の兵器、バイド。

21世紀と22世紀と26世紀が生み出した3つの戦力が21世紀の地球にて交錯する。

目次

Opening	1
一話 要塞	5
二話 流星	25
三話 落着	39
四話 判断	50
五話 汚染	60
六話 消毒	69
七話 接触	80
八話 交渉	92
九話 殲滅	109
十話 会議	124
十一話 武装	143
十二話 異常	156
十三話 防衛	170
十四話 母艦	184
一五話 歩兵	197

Opening

20世紀末——人類は滅びの瀬戸際に立たされていた。
外宇宙からやって来た異星を起源とする侵略者BETAによって。
だが人類は多大な犠牲を払いながらも、佐渡島のハイヴを攻略。
敗戦を繰り返すだけの人類にようやく反抗作戦という希望の光が
灯ったその時だった。

『彼ら』が空を突き破って現れたのは。

◆ ◆
——国連軍横浜基地 香月夕呼のラボ——

「白銀、いい加減覚悟は決まった？いい加減ウジウジされていると、いざという時頼れないのよね」

「夕呼先生……。因果導体なんてもんになって、世界を救うなんて使命を背負わされた教え子を慰めてやろうって気はないんですか？」

横浜の魔女、香月夕呼と向かい合うのは1人の青年だった。彼の顔には深い疲労がにじみ出ている。

それも当然、元は平和な世界からやって来た彼は、つい先日恩師を目の前でBETAに食い殺され、精神的に追い詰められて元の世界に逃げこむも、自分の存在が原因で平和だった世界に更なる不幸をまき散らしてしまったのだ。

そしてそれらの出来事は、全て眼前の横浜の魔女の掌の上だったというのだからたまらない。

獅子は我が子を鍛えるために千尋の谷へと突き落とすというが、この魔女の場合は崖下に放り込んだだけでは飽きたらず、更に崖下に爆薬を放り込んで止めを刺すような所業をする。

だがそれでも尚、白銀武という男は這い上がってきた。

そしてようやく立ち上がってきた彼の前に立ちふさがるのは、崖下にいたほうがマシだったと思わせるほどの困難と激戦。破綻した作

戦をその場しのぎで繋ぎ直し、仲間を次々と失いながらも、ようやく日本の喉元に突きつけられたBETAの剣である佐渡島のハイヴを破壊することができた。

更に精神が不安定になりつつある鑑純夏の状態をいち早く見抜き、メンタルケアをした時は、あの朴念仁がよくも、と彼女をして驚いたぐらいだ。

その件が片付くまでに最低でも数日は必要だと思っていたので、予定を前倒しできそうなのは嬉しい誤算ではある。

これら一連の件に対しては本人の前では言わないだろうが——
香月夕呼は純粹に褒めてやってもいいと思っていた。

表立って本人に伝えることは早々ないだろうが。

その感情を押し隠しながら、彼女はいつも通り憎まれ口を飛ばす。
「はん、面白い冗談言うわね。この後に及んでまだ文句言うようなら作戦から外してやろうと思ってたけど」

「冗談じゃないですよ。ここまできて今更蚊帳の外なんて絶対にごめんです。……これ以上純夏をほつたらかすのも……逃げるのも……」
「へえ、ようやくいっぱしの男の顔になってきたじゃない。これなら鑑のほうも任せられそうね。それでこれからの私達のやることなんだけど、鑑はやはり先日の佐渡島ハイヴの戦闘のせいで異常な負担が掛かってたことが原因なのは間違いないみたい。あんたとの恋愛関係のもつれもその原因の一つね。あんたが本格的に鑑一本で絞ることを決意したせいで、この辺の負担もなんとかなりそうよ。意外と覚悟決めるの早かったわね？」

「覚悟ってわけじゃないですけど……俺はもう純夏から目を離さないうって決めただけです。だからこそあいつの真意が早く掴めたんだと思います」

「惚れた相手だからこそ自分のことを知られたくない——危険から遠ざけたい。ま、当然の女心よね。鈍いあんたのことだから、どうせその辺のことを理解するだけで数日ぐらいかかると思ってたけど」

「実際そうなるどころだったのは否定できませんよ。ただ見かねた小隊の仲間達の助言からその辺にいち早く気づけただけで……」

「……訂正するわ。あんたってやっぱり朴念仁のままね。大して変わってないじゃない」

「褒めるんだか、怒るんだかどっちかにしてくださいよ!」

次の瞬間、その言葉を遮るかのように基地全体に独特なアラームが鳴り響く。

「なんだこれ——! 敵襲!」

「いえ、違うわ! このタイプの警報は——大気圏外で何か起きてきている!」

それが地球にとって、BETAに続く2つ目の外宇宙からの来訪者を告げる合図だった。

ただし彼らは厳密な意味ではBETAと違い、異星起源種というわけではなかったのだが、それを今の時点の人類が知る由はない。

続いてラボへ通信が入る。

それは香月夕呼の副官であるイリーナ・ピアティフからのものだった。

素早く主である香月夕呼が出るが、常に冷静な彼女にしては珍しく焦ったようなやり取りをしていた。

「一体何が起きたの!? ……え? 衛星軌道上に人工物と思われる大質量の物体が出現したですって? 大きさは……30km!! し

かもここの基地からでも視認できるって……ちよつと白銀!」

その言葉を聞いた白銀武は反射的に走りだしていた。

「先生! 俺ちよつとこの目で確かめてきます! すぐに戻るんで!」

思わず止めようとする香月だが、既に彼はドアの外へと飛び出していた。まさか部下からの連絡を無視してまで止めに行く訳にもいかず、彼女は頭を抱えた。

全く、こんな風に反射的に動くようでは何も成長していないではないか。

「白銀、あんたね……! ああもう、なんでもないわよ、こつちのこと! とにかく今から司令部に行くわ! 情報をそれまでにまとめおいて!」

咄嗟に部下に八つ当たりしそうになるのをなんとか堪え、彼女は矢
継ぎ早に指示を出す。

それがBETAに続く、第二、そして第三のこの地球への客人を来
訪を告げる事件の開幕だった。

もつとも彼らはBETA以上に危険であり、そしてより地球人に近
い存在だったのだが。

一話 要塞

バイド——それは人類が生み出した惑星級生態系破壊兵器の成れの果てであった。

物理学、遺伝子工学、空間制御技術、更には魔導力学まで投入されて作り上げた人類の最終兵器。

月と同じサイズのフレームに充填されたバイド粒子によって構成されたその兵器は目的の座標で発動し、あらゆるものを汚染し、破壊し尽くす。

26世紀の地球に置いて開発されたそれは、地球文明圏に敵対的な文明圏の母星に空間跳躍で送り込み、発動させる——はずだった。しかしそれは原因不明のミスにより太陽系内部で発動した。

150時間もの間、荒れ狂い地球文明圏に甚大な被害をもたらしたそれは、地球軍が使用した次元消去兵器によって異次元の彼方へと放逐。それにより事件は決着をみた。

だがバイドは滅びてはいなかった。物理法則すら刻々と変動する異次元に在っても尚、存在を保ちつづけ、遭遇したものを片端から食らいながら、成長し、進化し、遂には時間と空間を打ち破る力を手に入れた。

バイドが次元の壁を打ち破ったその先にあったのは、22世紀の地球。

突如現れた自分達の子孫が創りだした未来からの怪物を相手に、地球はバイドの力をも取り込み、3度に渡ってこれを撃退した。

だが、それでも——未だに人とバイドの戦いは続いている。



A・D・2169 太陽系冥王星軌道上 軍事基地『グリトニル』周辺宙域

知れば知るほど状況は最悪だった。ここに至るまでの経緯を確認しながら、彼は自らの愛機たる『R-9C』WAR-HEAD^{ウォーヘッド}』のコクピットでため息をついた。

地球軍の監視網を掻い潜り突如として現れた、A級バイドが率いる師団規模のバイド。

それは冥王星の軌道上にある軍事要塞グリトニルへと襲いかかり、防衛を担当していた冥王星軌道上防衛艦隊と3時間に渡る熾烈な戦いを繰り広げ、これを殲滅。

結果バイドも戦力の7割も失う被害を受けるものの、最終的にグリトニルはバイドの群れに占拠された。

問題なのはこのグリトニル内部には、深宇宙航行用次元カタパルトがあることだ。

この次元カタパルトはグリトニルの動力炉を利用した高出力の異層次元航行システムで、艦船やR戦闘機を遠く離れた座標へと次元跳躍によって射出させる為のもの。

無論、艦船やR戦闘機にも自前の異層次元航行システムは装備されているが、この次元カタパルトの出力は文字通り桁が違う。艦船の異層次元航行システムでも数ヶ月はかかる銀河系中心域にまで、僅か数日で到着させる代物である。

実際第三次バイドミッションにおいては『R-9/0』^{ラグナロク} RAGNAROK』をこの次元カタパルトで、マザーバイドが確認された銀河中心部にある異層次元へと突入させている。

結果、途中で複数回に渡るバイドの迎撃があったもの、射出から僅か一週間という短期間でR-9/0は目的地に到着し、マザーバイドセントラルボディの無力化に成功。第三次バイドミッションを終結させた。

もつともあくまでマザーバイドの無力化であり、撃破には至らなかったが。

その結果がこのグリトニル、ひいては次元カタパルトを制圧される

という結果だ。

バイドは地球軍が未探索領域の異層次元に身を潜め力を蓄え、再び逆襲に出たらしい。

そして次元カタパルトを制圧されたということは、最早太陽系全てがバイドの射程に入ったと言つてもいい。

事実それを裏付けるかのように、占拠されたグリトニルはその向きを変え、カタパルトの射出口を地球へと向けたのだ。

地球軍にも次元跳躍を妨害するための亜空間探知システムと、それに連動し次元衝撃波を発生させる亜空間バスターと呼ばれる兵器があるが、銀河を横断し高位異層次元にも突入可能なこのカタパルトを持ってすれば、それらの妨害も容易く突破できるだろう。

それはかつてR-9/0自身がバイドの数々の妨害を突き破つて、マザーバイドの存在する高位異層次元へと突入したことで実証されている。

すなわち一刻も早く、この次元カタパルトに取り付いたバイドを始末し、カタパルトを除染しなければ地球文明圏の危機ということだ。

A・D・2163年に発生したバイドの地球降下事件『デモンシード・クライシス』による被害は地球環境に大きな被害をもたらした。

試作型R戦闘機まで投入した迅速な対応により、事態そのものは短時間で解決したが、汚染能力を持つ大型バイドが地球で暴れたことにより、地球の環境は大きく汚染されることになった。

事態終結後、作戦区域の徹底した『消毒』によりある程度は除染に成功したものの、それでも尚、思い出したかのように小規模なバイド汚染体が地球上で定期的に発生している。

次に同じ規模の攻撃があれば、地球は完全にバイド生態系に汚染されることになるというのが、専門家の一致した見解だった。

それを防ぐためにも、このグリトニルを取り戻すのが彼が所属する艦隊——グリトニル奪還作戦に派遣された地球連合軍、太陽系第2防衛艦隊に与えられた任務だった。

幸いにもこの艦隊には、この手のバイド汚染施設奪還作戦を成功させたことのあるエースパイロットが複数存在する。

そして今作戦の為に艦隊司令部から『ミーティア』のコールサインを与えられた彼もまた、バイド汚染施設の攻略経験のあるエースパイロットだった。

その彼が搭乗する機体も、第二次バイドミツシオンにおいては僅か3機でミツシオンを完遂し、その圧倒的な性能から『突き抜ける最強』の異名を取った『R-9C”WAR-HEAD”』の後期生産型である。

初期生産型のR-9Cは徹底した性能の追求と、サイバーインターフェースの技術的な問題からパイロットは四肢を切断し、生体CPUとしての加工を受けなければ搭乗すらできない機体だったが、現在は技術の向上によってそれらの問題も解決し、生身のパイロットでも運用可能だ。

時代の流れと共にいささか型遅れになりつつある機体だが、元々の完成度の高さに加えて幾度ものアップデートを施されたこの機体は、最新鋭のRにも勝るとも劣らない性能を持っている。

ミーティアの技量とこのR-9Cの性能が組み合わせれば、A級バイド相手でも遅れを取ることはないだろう。

現在バイドはグリトニルを汚染することに成功はしたものの、完全な掌握には至っていない。

冥王星軌道上防衛艦隊が最後に自分の仕事を果たしたのだろう。

彼らの決死の行動により、グリトニルのメインフレームと次元カタパルトの制御システムは緊急ロックがかかり、バイドはまず施設を使用するためにはそれらの解除から始めなければならなくなったのだ。

その解除が終わる前に、太陽系第2防衛艦隊はこの作戦に決着を付けないければならない。

カタパルトに固定された愛機の中で、状況と外の敵味方の戦力の把握に務めていたミーティアに母艦のオペレーターが通信を繋げてきた。

『先行した部隊が敵の戦力を引きずり出す事に成功した。作戦はこれより第二段階へと移行する。ミーティア。貴機の出番だ。準備はできているな?』

『ああ、外の戦況はこちらでも確認している。いつでも準備OKだ』
『わかっているとは思いますが、最後に作戦の流れを確認する。まず先行部隊が敵の戦力をグリトニルの外に誘き出す。これが第一段階。』

そしてグリトニル内部の防衛戦力が手薄となった隙について、貴機を始めとするR戦闘機による突入部隊をグリトニル内部へと送り込み、内部からこの戦域のバイドの指揮を取っているであろう、A級バイド生命体を撃破。

その後、施設制圧部隊を搭載したヒルデイスヴィー二級強襲揚陸艦『トール』の護衛を務めることが、諸君ら突入部隊の任務である。任務を復唱せよ』

「太陽系第2防衛艦隊旗艦所属、第1混成遊撃部隊3番機、『ミーティア』はこれよりグリトニル内部へと侵攻し、内部に存在するA級バイドの探索・撃破を行う。」

A級バイド撃破後は、強襲揚陸艦『トール』とその指揮下の制圧部隊の護衛に移行する」

『確認した。諸君ら突入部隊はフリーハンドで動く権限が与えられているが、施設への被害はなるべく最小限にしるとのオーダーだ。しかし非常事態と判断した場合は、現場の判断でカタパルトを始めとした重要設備の破壊も許可されている。では、出撃シークエンスに入る。カウント10』

その言葉とともに機体のモニターに次々と情報が映しだされて、警告音が鳴り響く。

彼の機体が固定されているリニアカタパルトが機体の射出準備に入ったのだ。

『……5, 4, 3, 2, 1, ミーティア射出。グッドラック』

オペレーターという言葉と共に機体がリニアカタパルトによつて一気に加速する。

慣性制御システムのお陰でGはないが、機体を加速させているわけでも無いのにもかかわらず、高速で流れる視界が逆に彼の脳に微かな違和感をもたらした。

サイバーインターフェイスにより情報処理能力を高め知覚を高速

化している為、一瞬で流れていく景色に映るカタパルトの誘導灯の一つ一つまでがはつきりと見える。

1 km 程の長さの艦内カタパルトを1秒足らずで飛び出し、母艦の外に出ると彼は愛機を更に加速させた。

ふと意識を後ろに向ける。

サイバーインターフェイスによって繋がった機体のシステムが、自機後方のカメラの映像を、彼の脳に送り込んできた。

そこには全長は4 km を越える、純白に輝く巨大な戦艦があった。

地球軍の最新鋭超弩級異層次元戦艦、ニブルヘイム級。これが彼の母艦であり、この艦隊の旗艦でもある。

全体としては自動小銃を思わせる形状のフォルムだが、艦体下部には無数の槍の様な構造物が、そして艦体側面にはまるで翼の様な形状の構造物が生えている。

更には装甲の一部も歪な形状をしており、まるで樹木の表皮のようだ。

そして極めつけが、艦体の先端に取り付けられた艦首砲だ。これに至っては装甲板が艦首砲の回りを取り囲むような形で長く伸びている。

この装甲板は歪で不揃いな長さということもあり、見る者に牙のような印象を与える。さしずめ艦首砲は巨獣の口腔だった。

なぜ最新鋭の戦艦がこんな奇妙な形をしているかというのと、それは単純な話。

この戦艦はバイド技術を応用して開発されたものだからだ。

特に装甲板や槍状構造物、翼状構造物に至っては、バイドの自己再生能力と自己成長能力を模倣した技術を使っており、あのような歪な形状にならざるを得ないということらしい。

その為、このタイプの戦艦は艦ごとに個性があり、形状が微妙に異なることになった、と技術者は言っていた。

バイド技術をあからさまに使用しているため、軍の中にはこの異層次元戦艦のフォルムに嫌悪感を示す者も多いが、彼は気に入っていた。

白く輝く白亜の塗装。全身に生やした無数の翼と槍と牙状の構造物。

それは神話に伝えられる神獣が如き神々しさと美しさを、ニブルヘイム級に与えていた。

逆説的に言えばその美しさが、人類の兵器であると強く訴えかけてくるのだ。

それはバイドには到底真似できない物だ。バイドが自前で作るのは大抵醜い肉塊か、ガラクタを寄せ集めた機械生命体ぐらいなものだからだ。

——俺が戻ってくるまでに落ちるなよ——

ここは戦場の後方とは言え、安全な場所に居たはずの母艦が帰還した所、奇襲を受けて撃沈されていたことは一度や二度ではない。

そんなことを思いながら、彼はニブルヘイム級から目をそらし、愛機の異層次元航行システムを起動させて低位異層次元へと滑り込ませ、戦場へと疾走らせた。

この低位異層次元は亜空間とも呼ばれ、それに伴いこの航法は亜空間航法とも呼ばれている。そしてこの亜空間航法は自機が存在する次元の位相をずらすことにより、通常空間からの攻撃と観測を一切受付なくなるという利点があるが、それ以外にも一種の短距離ワープとも言えるべき使い方がある。

流星のR戦闘機も通常空間では出せる速度に限度があるが、亜空間に潜り込むことにより、通常の三次元空間の物理法則から開放され、光速をも越える速度を限定的にだが出すことができるのだ。推進剤を大量に消耗する為、多様はできないが。

遙か100万km先に佇む台形型の大型軍事要塞グリトニル。この距離からでは砂粒のようなサイズだが、多数の艦船の整備ドックとしての役割も持ったため、その大きさは全長30kmにも及ぶ。ニブルヘイム級ですらグリトニルに比べれば救命ボートのようなものだ。

その砂粒大の大きさのそれが、亜空間特有の歪んだ視界の中でぐんぐんと大きくなり豆粒ほどの大きさへと変わる。

頃合いと感じたミーティアはグリトニルの1万km手前で亜空間

から通常空間に復帰した。

亜空間に潜行したまま接近し過ぎると、存在を探知され亜空間バスターと呼ばれる次元振動波発生装置による、亜空間潜行兵器に対するカウンターを受けることになるからだ。

所詮この亜空間潜行技術は、敵にも味方にも普及した今や枯れた技術にすぎない。

開発された当初こそ、このR-9Cを始めとした一部の機体しか使用できなかったが、異層次元航行システムの高性能化とそれに伴う既存機種のアップデートにより、全てのR戦闘機群は勿論、B級以上のバイド体にとっても当然のように使用可能な技術になっている。

そのため対抗手段も探知方法も数多く存在するのだ。

グリトニルの周囲では無数のR戦闘機と小型の艦船がグリトニル内部から出撃してきたバイド汚染体と熾烈な戦いを繰り広げていた。

グリトニルの占領など考えなければ、異層次元戦艦や異層次元巡洋艦の艦首砲、そしてR戦闘機群の波動砲の釣瓶撃ちという方法もあるのだが、占領が第一目的である以上それもできない。

それとは別にグリトニルの装甲は、下手な波動砲では撃ちぬけないほど頑丈だということもあるが。

その為、R戦闘機は本来の火力を活かしきることができず、苦戦に陥っているようだ。

もし彼らが——そして自分を含めた突入部隊も全滅するようなことになったら、その時こそ、今ミーティアが発艦したニブルヘイム級を始めとした太陽系第2防衛艦隊の主力がグリトニルを完全に破壊して宇宙の藻屑にするべく、全力攻撃を行うだろう。

生き延びるためには、尚更勝たなければならぬわけだ。

ミーティアは迅速に戦域へと突入すると、乱戦状態の戦場を駆け抜ける。

レーザーを紙一重で交わし、こちらに向けて放たれた核弾頭のミサイルを電磁投射砲で迎撃し、輻射熱と破片をフォースで防ぎつつ、反撃のショットガンレーザーを叩き込み、進路上のバイドの一群を消し飛ばす。

戦域に突入し暫くすると、突入部隊である彼のエスコートするべく数機のR戦闘機が集まってきた。あのオペレーターが気を利かせたようだ。

即席の部隊となった彼らを援護すべく、後方の艦隊が主砲を撃ちこみバイドの防衛網に穴を開ける。

更にその穴を広げるべく、エスコート役のR戦闘機が次々と波動砲を発射する。

ある機体は砲撃を直接目的座標に転送させ炸裂させる衝撃波動砲でバイドを空域ごとなぎ払い、またある機体は数を武器に迫る群体型バイドを、それ以上の数で圧殺する光子バルカンの弾幕で殲滅し、またある機体は進路を塞ぐ中型バイドとその護衛の小型バイドを、フルチャージしたスタンダード波動砲でまとめて消し飛ばす。

元は地球軍の無人機だったそれら機械型汚染体が、波動砲の一斉射撃で纏めて消し飛んでいき、グリトニルへの更なるルートが開拓される。

開いたルートを埋めようとバイドの増援がグリトニルの外壁の開口部から出撃しようとするが、長距離射撃型のR戦闘機の支援射撃によって、外に出ると同時に素粒子の塵へと変換された。

欲を言えばあの一斉射撃でそのままグリトニルの外壁に穴が空いていれば、そのまま内部へ突入できたわけだが、艦載用陽電子砲すら跳ね返すとも言われるその外壁には少々焦げ跡が付いただけだった。

近道を諦めるとミーティアは僚機を追い越して、グリトニル外壁に取り付き、波動砲をチャージしながら艦船入港用ドックへと向かう。

道中グリトニルの外壁から汚染された自動砲台が次々と出てくるも、エスコート役のR戦闘機が先手をうって撃破してくれる。

お陰でミーティアは波動砲のエネルギーゲージをマキシмумまで貯めることができた。

そのままフォースの先端に波動粒子を充填したまま、入港用ドックの前へと到達する。

迎撃のためかミーティアの目の前で、ドックの扉が開いてゆく。そして中から現れたのは、腐肉をこね回してソーセージに仕立てて、眼

球をトツピングしてきたような巨大な肉塊だ。

その大きさ、凡そ全長300m。

ノーザリーと称されるバイドの生体輸送艦。恐らく、増援でもその内部に溜め込んでいたのだろうが、生憎と間が悪かった。

ドックから出撃して早々、波動砲をチャージしたR戦闘機と出くわしたのだから。

ミーティアはスラスターの出力を上げ、僅か数十mという超至近距離まで、ノーザリーに接近。

そして超至近でフルチャージした拡散波動砲を撃ち込んだ。

R-9Cの機首で青い光が爆発し、横殴りの光の奔流となってノーザリーを飲み込んだ。

拡散波動砲は波動粒子の砲撃が発射と同時に拡散と増幅を繰り返して、広域をなぎ払う強力な面制圧戦術兵器だ。

それをこのような至近距離で発射した場合、拡散するはずの無数の波動粒子が全て一点に収束し、従来の波動砲を上回る破壊力を叩き出す。

その結果、ノーザリーはその胎内に詰め込んでいた汚染体諸共、塵一つ残さず波動粒子によってこの世から消えた。

ミーティアはセンサーを走らせ入港ドックの奥を走査する。

大型バイド反応無し、中型バイド反応2、小型バイド反応50、

大物は今ので打ち止めか。

『突入口を確保。これより本機はグリトニル内部へと突入する』

『了解。幸運を』

エスコート役のRに別れを告げ、R-9Cはペットネームの如く、1発の弾頭となってグリトニル内部に突入した。

内部での戦闘はいささか歯ごたえがないものだった。

当然といえば当然だがこちらはグリトニルの内部の詳細な地図を持っている。

トラップや迎撃システムについての情報もだ。

バイドも流星にこの短期間で施設を作り変えることはできなかったようで、オーバーライドして機能を奪った迎撃システム以外にめぼしい防御システムがない。精々が生体トラップとして施設中に肉片状のバイド汚染体をばら撒くにとどめている程度だ。下手に近づけば攻撃されて汚染されるが、大した敵ではない。

ともあれ全くの未知の施設ならともかく、ある程度情報を揃えられた状態での突入作戦はさほど困難なものではない。

天井部から出てきた地球製の無人砲台を電磁投射砲で叩き落とし、汚染されたと思わしき大型人型兵器ゲインズは出合い頭に波動砲を叩き込んで消し飛ばした。

場所が悪ければ苦戦していたであろうが、閉鎖空間ではこんなものだ。

『こちらフレームタン。第3格納庫を制圧した。これより第4格納庫に移る』

『こちらマルトー。第一司令室を制圧した。ハズレだ。ここにはA級バイド体はいない』

『こちらラウンドテールブルだ。現在動力炉で取りついているB級バイド体の群れと交戦中。A級バイド体の反応はなし』

別のルートで突入した友軍機から次々と報告が入る。概ね順調だが、肝心のこの施設を掌握していると思わしき、A級バイド体の姿がない。

するとこの突入部隊の指揮官機である電子戦型R戦闘機、R-9E R2” UNCHAINED SILENCE”、コールサイン『エニグマ』からミーティアに連絡が入ってきた。

『エニグマよりミーティアへ。恐らくはそちらのルートが当たりだ。これまで収集した情報を総合するとA級バイド体は貴機の侵攻ルート先の次元カタパルトに潜んでいると思われる』

『ミーティアよりエニグマへ。了解した』

『現在他の区画を制圧した友軍機がそちらに向かっている。無理はするな——』

その言葉を遮るようにグリトニルが振動した。

『ラウンドテーブルより全機へ！ 動力炉が全開で動き始めた！ グリトニルの異層次元航行システムが起動している！ 奴ら次元カタパルトを起動させる気だ！』

『エニグマよりラウンドテーブルへ。動力炉の無力化は可能か？』

『ラウンドテーブルよりエニグマへ。破壊は可能だが、今攻撃すると暴走してグリトニル諸共吹き飛ぶことになるぞ』

『ミーティアよりエニグマへ。無理をする必要が出てきたようだな。これより次元カタパルトへ突入する』

『……エニグマよりミーティアへ。幸運を祈る』

その通信を終えるとミーティアは狭い通路を潜り抜け、次元カタパルトへ続く大型の搬入路へと潜り込む。

波動砲をチャージしながら進み、迎撃に出てきた砲台と小型無人兵器はフォースシユートで押しつぶす。

そして彼の機体は次元カタパルトと搬入路を遮断する大型の扉の前へとたどり着いた。

搬入路と次元カタパルトは艦船の運用も念頭に設計されている為、その扉も恐ろしく巨大であり、全高3キロはある代物だった。

そしてその巨大な扉越しにも確認できるほどのバイド係数が扉の向こうから検出された。

扉の向こうからは何のアプローチもない。籠城の構えなのだろうか。

だがいずれにせよこの程度の扉では、R戦闘機の行く手を阻むには力不足だ。

ミーティアはフルチャージの拡散波動砲を発射。遮蔽扉に直径500m程の大穴を開けると一気にカタパルト内部へと突入した。

扉を突き破って尚、減衰しなかった波動粒子の砲撃は青い暴風雨と なってカタパルト内部を蹂躪していた。

その波動粒子の嵐の中で微動だにせず、悠然と佇む影がカタパルトの奥にあった。

R-9Cのセンサーが素早くその影をスキャンし、データベースか

らその正体を探り当て、パイロットの視界に表示した。

『B—D2. Type—Zab^{ザブ}tom^{トム}』

同時に荒れ狂っていた拡散波動砲の余波が収まり、その影の全貌が光学的に確認できるようになった。

カタパルトのレールの上に佇む、全高200mを越える銀色に輝く人型の巨像。未完成なのか手と脚がなく、その部分からは無数のケールブルが繋がり、天井や壁面、床へと潜り込んでいる。

巨大な全身鎧を思わせるそれは、手足が無い故に未完の芸術品にすら見える。バイドに似つかわしくない美しさがあつた。

だが彼は知っている。

この銀色に輝く甲冑の下には禍々しい素顔が隠れていることに。

バイドという存在の代名詞、A級バイド体、生命要塞ドブケラドプスこそがこの怪物の正体だ。

そしてこのザブトムというバイドは、ただの大型バイドというだけではなく、ドブケラドプスをベースにした惑星破壊兵器としての側面も持っている。

つまりこいつを次元カタパルトで地球に向かって射出されたら、地球は終わりということだ。

その思考を裏付けるかのようにカタパルト内部に警告用アナウンスが響き渡りはじめる。

『これより5分後に次元カタパルトの射出シークエンスを開始します。カタパルト内部の作業員はただちに退避し、次元振動の影響を防ぐため、向精神薬を服用してください。繰り返します。これより5分後に次元カタパルトの射出シークエンスを開始します。カタパルト内部の作業員は……』

どうやら5分以内にこの怪物を始末しなければ、地球は壊滅的な打撃を受けることになるようだ。

つまりは——いつものことだ。

彼は口の端に笑みを浮かべた。例え自分が敗北してもラウンドテーブルが動力炉を抑えている。最悪の事態は避けられるであろう。ならば今は自分の役割を果たすだけ。

ミーティアはそのコールサインが示す通り、流星となってザブドムへと躍りかかった。



コールサイン『ラウンドテーブル』は困惑していた。

彼の任務はグリトニルの動力炉に突入し、後続の機体のルートを確保すること。そして動力炉に巣食っているであろうバイド体を殲滅することだ。

動力炉は群体型のバイドに汚染されていると推測された為、それを排除するため彼と彼の愛機 R-9AD3 ”
KING'S MIND” は送り込まれた。

攻性デコイ運用機の最上位機種である R-9AD3 は数ある R 戦闘機の中でも数少ない、数の暴力で敵を殲滅することができる機体である。

波動粒子による攻性デコイ形成装置によつて、R-9AD3 は収束させた波動粒子を R 戦闘機と寸分違わぬ形状の攻性デコイに生成し、コントロールすることができる。その数は最大 6 機まで生成可能。

時には波動粒子で構成されたデコイによる体当たりで、またある時にはデコイを解体し、それを形成する波動粒子に指向性を与え、使い捨ての波動砲台として運用する。

その気になればデコイ達と編隊を組んで、単機でありながら小隊規模の火力を叩きつけることもできるのだ。

そしてこれらの攻性デコイの最大の利点は、あくまで波動粒子で形成されているため、例えば撃破されようが、消耗しようが波動粒子をチャージする時間があれば、いくらでも作りだせるということ。

この R-9AD3 に高性能な偵察機や早期警戒機を組み合わせれば、遠距離から一方的にそして正確に、無限に尽きることのない攻性デコイの軍団を送り込み、一切の被害を出さずに敵集団を殲滅することもできる。

今回の作戦はグリトニルを中心に強力な亜空間通信に対するジャ

ミングが張られていた為、攻性デコイの母機である自機が直々に乗り込む羽目になったが問題はない。

この機体もまた最上位のR。例えばデコイが使用不能になったとしても、戦闘には全く支障をきたさない程の高レベルの基本スペックと高性能のフォースを有している。

ラウンドテーブルはエニグマの情報を中心に、生成した攻性デコイを要塞内部に送り込み、偵察機の代わりとした。

そして大凡の敵戦力図を掴んだ後はデコイと共に編隊を組み、火力を集中させながら通路を突破、動力炉まで辿り着いた。

敵の肉片型バイド体は動力炉に取り付き、融合せんとしようとしたが、ラウンドテーブルはデコイの体当たりとフォースレーザーの掃射でこれを阻止。動力炉の被害を最小限に抑えつつ、バイドの殲滅に成功した。

だというのに。

「まだ動力炉が動いているぞ！ システムが電子的にもオーバーライドされている！完全に制御システムのロックが解除されている！ エニグマ！ そちらの電子システムで再度オーバーライドして止めることはできないか？ いや待て……クソッ。汚染された施設とバイドの死体で隠されてて今気がついた。第二動力炉が『無くなっている！』」

『エニグマよりラウンドテーブルへ。現在システムを再度掌握中。600秒後に強制停止させられる。それよりも動力炉が『無い』とはどういう意味だ？』

「第二動力炉が外されて持ち去られている。あの動力炉は小型だからな。恐らくは次元カタパルトのザブトムの腹の中だ」

『つまりこの動力炉を潰しても……』

「奴は自前でカタパルトに電力を供給できる。ザブトムを始末しない限り、次元カタパルトは止まらないということだ」

『了解した。エニグマより全機へ。今の話を聞いていたな？ 全ての作戦行動を中断し、直ちに次元カタパルトにいるA級バイド体『ザブトム』を殲滅せよ。これは最優先事項である——繰り返す——』



繰り返し放たれるエニグマからの最優先メッセージをミーティアは思考から締め出した。

状況は更に悪化したが、眼前のバイドを倒さねば不味いことになるなど、とうの昔にわかりきっていたことだ。

援軍もこちらに向かつてきているようだが、恐らく手遅れだ。彼らが着く前に決着が付く。

目の前のバイドもまた、援軍のR戦闘機が到着する前にこちらを撃墜して、次元カタパルトから射出される腹積もりだろう。

どちらも既に満身創痍に近かった。

R | 9 C " W A R | H E A D " は右のエンジンユニットに被弾して、スラスタの出力が4割低下している。

2門装備された電磁投射砲も片方は脱落して使用不能だ。

装甲キャノピーにも大きな亀裂が入っている。

一方ザブトムもまた全身を包む鎧に無数の傷跡をつけている。

芸術品のようなだった胸像の面影は既になく、手足の部分に接続されたエネルギーチューブは、ミーティアがザブトムのエネルギー補給に使っていると予測したため、真っ先に破壊されていた。

もともとこれはザブトムが体内にも動力炉を取り込んでいた為、余り意味のない行為に過ぎなかったが。

そして何よりもザブトムの頭部を覆う巨大な仮面。

それはR | 9 C による至近距離の波動砲撃によって叩き割られ、ザブトムはその醜悪な素顔をさらけ出していた。

腐敗したかのような腫瘍まみれの褐色の肌。後ろに異常に大きく伸びた頭部からは、無数の電子部品の欠片が見え隠れしている。だが何よりも目を引くのは、この世の全てを憎んでいるかのような、禍々しいその表情。

釣り上がった目は真っ赤に染まり、口は文字通り耳まで裂け、今にも呪詛の声を撒き散らしそうだ。

小綺麗な甲冑に身を固めていても隠し切れない、全てを憎み破壊するバイドというモノの在り方がそこにあつた。

波動砲のチャージを開始したミーティアの聴覚に再び次元カタパルトのアナウンスが飛び込んでくる。

『これより30秒後に次元カタパルトの射出シークエンスの最終段階に入ります。最寄りの作業員は全ての作業を中断して、避難所へ退避してください。繰り返します。これより30秒後に――』

どうやら友軍は間に合いそうにない。

ここは刺し違えてでも仕留めるべきだ。

そう判断して彼は波動砲のチャージを始めた。

残り後30秒で、このA級バイドを消し飛ばせるだけの波動粒子をチャージできるかどうかは賭けになる。

眼前のRが波動粒子をチャージを開始した事に対して危機感を覚えたのか、ザブトムの攻撃が激しくなった。

甲冑の肩部装甲が展開し、誘導式プラズマ弾が乱射される。

それは比較的弾速が遅いため、R戦闘機の反応速度なら対処は容易だったが、幾分数が多すぎた。

低出力の波動砲で迎撃するのは容易いが、それではチャージした波動粒子を失うことになる。むしろザブトムの狙いはそこか。

それでもミーティアはフォースを盾にプラズマ弾を防ぎ、カタパルト内部を縦横無尽に飛び回り、弾幕を回避する。

ザブトム射出まで残り20秒。

業を煮やしたのか、ザブトムは更なる攻勢にでる。

胸部装甲が展開し、光り輝くコアユニットが露出する。

自ら弱点を曝け出すその行為は、同時にザブトムにとっての最大の攻撃でもあつた。

ザブトムの胸部に光が収束し、超振動を伴う黄金色の粒子砲撃が放たれる。如何にA級バイドといえどこれは尋常な威力ではない。要塞の動力炉を取り込んでいるからこそその出力だ。

その必殺をミーティアはカタパルトの隅に隠れるようにして回避した。

その結果、機体側面がカタパルト内部の壁に激突して表面が削られたが、この回避行動を取らなければカタパルトの中央を突き抜けていった艦首砲並みの砲撃によって、R-9Cは跡形もなく消し飛んでいただろう。

射出まで残り後10秒。

最大の攻撃の後は最大の好機でもある。

R-9Cは身を潜めていたカタパルトの隅から飛び出すと、ザブトムの展開したままの胸部装甲内部にフォースシュートを撃ち込んだ。フォースとザブトムコアが激突し、付近に雨の様な火花を散らす。そのフィードバックによる苦痛を受けたのか、ザブトムは歪んだ顔を更に歪め、怒りと苦痛の混じった絶叫を上げた。

その絶叫は、音という振動を伝播させる物など無い真空にあっても尚、なんらかのショックウェーブとしてR戦闘機に叩きつけられ、R-9Cのパイロットの精神を蝕み始める。

——雄叫びを利用した精神支配か！

強制的に恐怖を呼び起こされたミーティアは反射的にR戦闘機 of 精神防護システムを最大レベルへと引き上げ、対処。

その対処によって出来たほんの数瞬にも満たない隙に、ザブトムは胸部装甲を強制的に閉じて、コアに喰らいつくフォースを弾き飛ばしていた。

残り後5秒。

カタパルト内部だけでなく、グリトニルそのものが振動をし始めた。

ミーティアは過去幾度か次元カタパルトによる射出を経験しているが、この振動は正規の射出シークエンスのそれではない。

明らかに何らかの不具合が発生している。

ザブトムはその不具合を力づくでねじ伏せて、射出シークエンスを強行するつもりようだ。

そのトルソーの如き胴体の手足の付け根から、無数のエネルギーケーブルが飛び出してカタパルト施設に侵食するように強制接続。ケーブルが発光し、更なるエネルギーをカタパルト内部に送り込んで

いく。

残り2秒。

ミーティアは波動粒子の収束率を確認した。120%オーバー。拡散波動砲、発射可能。

波動砲の発射体制を整えた彼がレティクルにザブトムの巨体を納めると同時に、ザブトムもまた胸部装甲を展開する。ザブトムコア、砲撃準備。

コアの輝きは先程よりは鈍い。ザブトムもチャージの為の時間が足りないだろう。更に加えてリソースを次元カタパルトのエネルギー供給に取られて、出力が落ちているのだ。

だがそれでもR戦闘機を消し飛ばすには釣りが来る。

残り1秒。

R-9Cの機首で青い光が、ザブトムのコアで黄金の光が同時に炸裂し——その場にある全てを飲み込んだ。



地球連合軍 太陽系第2防衛艦隊による第2次グリトニル奪還作戦レポートの一部より抜粋

A. D 2173 7/7 18:35

——以上をもってグリトニルでの戦闘行動は終結した。

その直後、冥王星軌道上軍事要塞グリトニル内部より強力な次元振動波を確認。

戦闘を観察していた太陽系第2防衛艦隊はこの次元振動波により一時的にセンサーとレーダーがダウンした。

観測機器が再起動した後、グリトニル周辺を走査するも、全ての痕跡が失われていた。

バイドも友軍も、そして『グリトニル』自体も。

情報部の分析結果によると、次元カタパルトへの過大出力がグリトニルの異層次元航行システムを暴走させ、グリトニル周辺一帯の空間

を次元跳躍させたのではないかと――

二話 流星

閃光が全てを飲み込み、ミーティアの光学的な視界を奪っていた。咄嗟に五感を愛機の全センサーとレーダーに繋ぎ直すも、やはり周囲の状況は掴めない。

微かなデータから唯一分かったことは、現在自機は次元跳躍用の異層次元空間に居るということだ。

それも同じ異層次元に留まってる訳ではなく、まるで次元の壁を次々と突き破っているかのように計測値が変動していく。もしやザブトム諸共、次元カタパルトから射出されたのだろうか？

いずれにせよ今の彼ができる事は、R-9Cの異層次元航行システムをフル稼働させて、変動する異層次元の物理法則から身を守ることだけだった。

数秒か、或いは数分か。

異層次元航行によつて起こる時間感覚のズレにより、どれ位の時間が経ったかは不明だが彼はようやく自機とその周囲の状況を確認することができた。

自機の状態。

装甲キャノピーにレベル3の亀裂を確認。現在マイクロマシンによる自動修復中。

電磁投射砲、一門脱落。残り一門も出力低下、3秒以上の継続射撃不能。

フォース及びフォースコンダクター、異常無し。

右エンジンの出力6割低下。エンジンは自動修復中だが、5割以上の出力にするにはオーバーホールが必要。

異層次元航行システム、先ほどフルパワーで稼働させたことにより、オーバーヒート。一時的に機能停止中。

波動砲ユニット、波動粒子のオーバーロードにより異常発生。最大出力が30%低下。

結論としては全体としては結構なダメージを受けているが、まだまだ戦闘行為は可能だということだ。

この程度の損害で音を上げていてはR戦闘機のパイロットは務まらない。

続いて周囲の状況の確認をする。

現在自機は異層次元ではなく、宇宙空間に放り出されたようだ。

回復してきた視界を占めるのは星が瞬く漆黒の宇宙と、グリトニルの巨大な外壁だ。

衝撃でグリトニルの次元カタパルトの射出口から宇宙空間へ放り出されたらしい。

とりあえず目の前に漂っていた自機のフォースをリモートコントロールで回収する。

あの後一体どうなったのか。まだザブトムは生きているのだろうか？

そう思い自機の周辺を見回して、ミーティアは凍りついた。

自機の直下の視界を青い星が占めていた。

見間違う筈もない。これは地球だ。自分はグリトニル諸共地球の衛星軌道上に跳躍したのだ。同時に機体のセンサーが自機とグリトニルが地球の重力に捕まり、ゆっくりと落下を開始しはじめたことを警告してきた。

不味い。

R戦闘機の出力なら右エンジンが不調のこの状態でも、地球の重力圏から脱出することなど容易い事だ。

だが。

グリトニルはどうだ？

全長30kmを越える宇宙要塞が地上に落下したら、巨大隕石が落下したのと大差ない被害を地球環境に与える事になるだろう。

ましてや、グリトニルはバイドに汚染されている。

落下の際の衝撃に加えて、汚染体が大規模に撒き散らされることになれば地球は壊滅だ。

ミーティアは自機をグリトニルの次元カタパルトの射出口前に移動させる。

外部からカタパルト内部をセンサーで走査するが、既にカタパルト

内部は破壊しつくされて、ザブトムの姿は無く、僅かな残留バイド係数を感じただけだった。

あの時、ザブトムを撃破できた——とは思わない。自機が無事ならば当然相手も無事である可能性も考えるべきだ。

というよりも地球に到達したため、次元カタパルトからグリトニルの深部に移動して、地球を攻撃する準備に移行している可能性が高い。

ミーティアは一縷の望みをかけて、グリトニルのメインフレームにアクセスを試みたが、バイド汚染警告と共にあっさり弾かれた。

グリトニルのシステムは未だにバイドに汚染されている。

やはりザブトムはまだ健在ということだ。

今すぐ再度突入してザブトムを仕留めに行くべきかどうか、彼が判断を下すより先に機体の通信システムに友軍からの連絡が入る。

『エニグマよりミーティアへ。無事か？状況はどうなっている』

それは突入部隊の指揮官機 R — 9 E R 2”
UNCHAINED SILENCE”からのものだった。

『ミーティアよりエニグマへ。現在次元カタパルトの射手口付近にいる。交戦していたA級バイド体ザブトムは行方不明。それよりも緊急事態だ。グリトニルは地球の軌道上へ転移した。現在地球に向かって落下中だ』

『エニグマよりミーティアへ。状況はこちらでも把握している。グリトニルの航行用のザイオング慣性制御システムを遠隔操作して、グリトニルを重力圏から離脱させようとしたが失敗した。転移の衝撃でメインフレームへのハッキングがキャンセルされたのが原因だ。おまけにその隙をつかれて、グリトニルの姿勢制御システムを始めとする幾つかのシステムがバイドに奪われてしまったようだ。』

『やはりザブトムは生きているようだな。再突入して始末するか？』
『いや……時間がない。計算したが、この状況下では例えザブトムを仕留めてもグリトニルの落下を止めることは不可能だ。軌道上の防衛艦隊に連絡して陽電子砲と波動砲の一斉射撃で落下する前にグリトニルを破壊する。こんなものがいきなり現れたんだ。恐らくは向

こうも攻撃準備をしているはず。巻き添えを食らわないように、一度全機グリトニルから離れる』

『了解した。全機と言ったな？我々の他にもグリトニルの次元跳躍に巻き込まれた機体があるのか？』

『今回の次元跳躍の効果範囲はグリトニルだけじゃない。グリトニルを含めた半径1000kmの周辺区域全てだ。突入部隊全機に加えて、グリトニル制圧部隊を載せたヒルデイスヴィーニ級強襲揚陸艦『トール』とその支援をしていたナーストレンジ級ミサイル駆逐艦『フライバー』とその護衛部隊のIFFを確認している。それとグリトニル周辺に展開していたバイド体の生き残りが少々。それは『フライバー』とその部隊が殲滅中だ』

『随分と大所帯で来てしまったな。突入部隊は全機無事か？』

『ロストした機体は無い。お前の機体が一番の重傷なぐらいだ』

惑星破壊兵器クラスのA級バイドと単独で渡り合ったのだ。この程度の被弾ならむしろ安いほうだろう。

だがそれはともかく状況は把握できた。

今この場で自分にできる事は何もないということが。

無理に再突入しても友軍の攻撃の邪魔になるだけだ。ミーティアは傷ついた自機を加速させる。

スラスター出力は落ちていたが、それでも数秒足らずでグリトニルから500kmほど離れた空間へと退避した。

そして彼に続くように、グリトニルの艦船用ドッグの出入口や物資搬入路から次々と青い光が飛び出してくる。

ミーティアと同じ突入部隊のR戦闘機のスラスター光だ。だが突入部隊のRの総数に比べて光の数が1つ足りない。

まさか脱出ができない機体があるのか？と思ったその瞬間、グリトニルの外壁の一部が内側から弾け飛んだ。

反射的に臨戦態勢を取るが、すぐに解除する。

吹き飛んだ外壁の内部から飛び出してきたのは突入部隊の最後の1機、R-9DP3”KENROKUE”^{ケンロクエ} だった。

特徴的な真紅の塗装を施されているそのR戦闘機は、他のR戦闘機

より二回りは巨大だ。だがその大きさに反してキャノピーは通常のR戦闘機と同じサイズの為、奇妙なチグハグさがある。

装備されたディフェンシブフォースも母機であるRが巨大すぎて、機体を完全に隠しきれていない。

そして何よりも目を引くのは機体の左右に取り付けられた大型の盾と、機体下部の鉄杭型波動砲だ。

パイルバンカー帯電式H型と名付けられたそれは、通常の波動砲と違って射程距離は極端に短いが、その破壊力は数ある波動砲の中でも群を抜く程の威力だった。

今作戦に置いて『マルトー』のコールサインを与えられたこの機体は、グリトニル内部で遭遇するであろうA級バイド体に対する切り札の一つだった。……残念なことにそれをザブトムに使う機会はなかったが。

先ほどグリトニルの外壁を打ち破ったのも、この”パイルバンカー帯電式H型”による一撃だろう。

戦艦をも撃沈可能な威力とは聞いていたが、陽電子砲にも1発なら耐えられるというグリトニルの外壁をいとも容易く打ち破れるとは恐れ入る。

これで突入部隊は全てグリトニルから脱出した。後は軌道上の防衛艦隊からの攻撃を待つばかりだが、そこでミーティアは異常に気がついた。

防衛艦隊がいない。いや、それどころか地球の軌道上にくまなく配置されているはずのバリア衛星も、攻撃衛星アイギスも確認できない。

咄嗟に『エニグマ』に通信を繋ぐが、彼もまたこの事態に混乱しているようだ。

『エニグマより全機へ。付近一体に地球軍のIFFか友軍を確認できるものはいるか？目視でもいい。ツール、フライバー。そちらはどうだ』

戦闘機のセンサーだけでは捕らえられないと判断したのか、彼は同じ宙域にいる駆逐艦と強襲揚陸艦にも判断を求めた。

『こちらミーティア。確認できるIFFは我々突入部隊とツール、フライバー、及びその護衛部隊のみだ』

『こちらゴリアテ。ミーティアと同じく』

『こちらアハトアハト。同じくネガティブ』

次々と僚機達から否定の報告が上がってくる中、駆逐艦フライバーが気になることを報告してきた。

『こちら駆逐艦フライバー。艦のセンサーでも我々以外の友軍の存在は確認できないが、奇妙なものを地球周回軌道に複数見つけた。全機にデータを送る』

その言葉と共に送られてきた画像に写っていたのは旧式の攻撃衛星だった。それも1つや2つではない。数と軌道からして地球全てをカバーするように配備されているようだ。

だがこの攻撃衛星は最低でも一世紀は昔のタイプだ。数も本来の防衛衛星のそれに比べると圧倒的に少ない。対バイド戦では全く役に立たないだろう。

それ以外にも駆逐艦フライバーのセンサーは、やはり旧世紀で採用されていたような宇宙ステーションや、ラグランジュポイントに建造中と思わしき大型宇宙船を複数確認していたが、こちらも既存の地球連合軍が採用している艦船とは全く異なるタイプだ。

そもそも最新鋭の防衛衛星は何処に行ったのだ？防衛艦隊は？軍事ステーションは？

『我々の知らない間に防衛衛星がアップデートされたか？』

『馬鹿を言うな。わざわざこんな前世紀の骨董品にアップデートする意味がどこにある。』

『だが視認できるもので人工物はこれと建造中の宇宙船団ぐらいしかないぞ。あの宇宙船団も初めて見るが、なぜ造船所ではなくあんなところで建造しているんだ？ エニグマ、あれらの通信システムを解析して割り込むことはできるか？』

『それなら現在解析中——、いやもう終わった。信じられん。量子通信でも亜空間通信でもない、単純な電波型の通信方式だ。これではまるで本当に前世紀——』

余りにも想定外の状況に僚機達は通信で意見の交換をはじめた。

本来作戦行動中——それも非常時に行うようなことではないのだが、状況が状況だ。

元々サイバーインターフェイスを利用した圧縮された情報通信でのやり取りの為、(音声での通信は高速戦闘を伴うR戦闘機の通信手段としては情報伝達に時間がかかりすぎるため、戦闘時では余り使用されていない)グリトニルの外に脱出した後に行ったこれらの一連のやり取りは、実時間としては数秒も経っていない。

しかしグリトニルが現在進行形で落下をしている以上、いつまでも議論をしているわけにも行かないのも事実だった。

そんな中グリトニルを監視していたミーティアが異変を感じ取った。

『ミーティアより全機。グリトニルの落下速度が上がり始めた。自然落下にしては異常な速度だ。バイド係数も上昇中。やはり内部のバイドが生きている』

その言葉と共に強襲揚陸艦トール、ミサイル駆逐艦フライバーとも議論していた友軍達の通信が一時的にピタリと止まる。

そしてその場に居る全員を代表するように、エニグマが全てのユニットに指示を出し始めた。階級で言うのならエニグマよりフライバーやトールの艦長の方が上ではあるが、今作戦の指揮権に限っては、突入部隊の指揮官である彼が一番上位の権限を有しているのだ。これがこの部隊のやり方であり、誰も反論はしなかった。

『エニグマより全ユニットへ。状況は不明だが、どのみちグリトニルを地球へと落下させるわけには行かない。地球軌道上艦隊と連絡が取れない以上、我々のみでグリトニルの破壊を試みる』

『トールよりエニグマへ。内部の制圧を目的とした我々の火力ではグリトニルを完全に破壊するのは不可能だ。それが可能な火力は後方の艦隊が有していたからな』

『エニグマよりトールへ。何も木っ端微塵にする必要はない。グリトニルはブロック式の構造体だ。構造体の継ぎ目を狙って解体してやれば、落下時の被害を抑えることが——』

『フライバーより全ユニットへ。例の攻撃衛星が動き出した！』

その言葉と共にミーティアが攻撃衛星に意識を向けると、機体がパイロットの思考を読み取り、攻撃衛星の拡大されたリアルタイム画像をキャンノピーに大きく表示させた。

画像を見る限り攻撃衛星は向きを変更しつつ、装備したミサイル発射口をグリトニルへと向けつつある。

——攻撃するつもりか？

ミーティアのその考えを裏付けるかのように、攻撃衛星からミサイルが発射された。

その衛星はグリトニルに対して幾分近い距離にあった為か、然程時間をおかずにミサイルはグリトニルに着弾。核による炎の花を咲かせた。

だが。

核の光が収まった後には当然のように無傷のグリトニルの姿があった。

当然の結果だった。波動砲はおろか、出力によっては陽電子砲にも耐えうるグリトニルがたかだか核兵器一つで破壊されるわけがない。

ましては先の核ミサイルは威力の方も地球軍が運用する核ミサイルに比べて破壊力、弾速共に大幅に劣っていた。

あれでは何十発と撃ちこんでも無駄なだけだ。

だというのに。

『フライバーより全機へ。周回軌道上の衛星群から更なる核ミサイルの発射を確認』

攻撃衛星達は無数の核ミサイルを放ち続ける。まるでそれしか攻撃方法がないかのように。……いや、実際それしかないのだろう。

次々と咲き乱れる核の花を浴びながら、何事もなかったかのようにグリトニルは落下を続けていく。その上生き残っていた自動迎撃システムが起動したのか、ミサイルの大半がグリトニルに到達する前にレーザーと電磁投射砲で落とされ始めた。

その状況をみかねたのか、エニグマが攻撃衛星に呼びかけた。

『こちら地球連合軍太陽系第2防衛艦隊所属、グリトニル突入部隊指

揮官『エニグマ』。応答を願う。我々はグリトニル攻略作戦中に、次元カタパルトの暴走によつて、グリトニルと共に転移した。現在グリトニルはバイドに汚染されている！ 繰り返す、現在グリトニルはバイドに汚染されている！ そんな旧式の核兵器じゃグリトニルは傷ひとつ付かないぞ！ 防衛艦隊は何処に行つた!? R戦闘機もかき集めてありつたけの艦首砲と波動砲を叩き込むんだ!』

エニグマの必死の訴えに対して、衛星からの反応はない。

衛星の通信方式は解析したので、通じているはずなのだが。

エニグマは埒が明かないと判断したのか、衛星に対して無線通信による呼びかけを暗号なしで全周波数で行つた。

しかしそれでも返事はない。ただ動揺したかのように核ミサイルの発射が中断しただけだ。それも一時的なもので再び核ミサイルが発射されはじめる。

こうなつてしまつては衛星からの返事をいつまでも待つてはいられない。こちらはこちらで独自の阻止行動を起こすべきだろう。

突入部隊の一機であるコールサイン『ハウンド・ドッグ』もそうした考えにたどり着いた者の一人だつた。

『ハウンド・ドッグよりエニグマへ。これよりグリトニル内部に再突入してデルタウエポンを起動させる。それ以外のものは外側から砲撃をしてグリトニルに少しでもダメージを与えてくれ』

デルタウエポン。

それはフォースと連動したR戦闘機の最終兵器だ。あらゆる攻撃を食らうR戦闘機の次元兵装フォースは、攻撃を吸収する度にドースと呼ばれるエネルギーゲージが蓄積されていく。そしてドースゲージが100%を超えた時、オーバードースと呼ばれる状態になり、フォースから放たれるレーザーの出力が格段に上がり、圧倒的な攻撃力をR戦闘機は手に入れることができる。

そして同時に任意でフォースに蓄積させたエネルギーを解放することで、物理法則をも捻じ曲げる超絶的な破壊を引き起こす事ができるのだ。

発生する現象は機体やフォースの種類によつて様々だが、そのどれ

もが波動砲をも凌駕する破壊力で、発動させるだけで戦局を一変させることができる戦術級殲滅兵器だった。

しかし大抵のR戦闘機パイロットは、このデルタウエポンを軽々しく使うことはない。

なぜならばこのシステムはフォースを意図的に暴走させ、炸裂させるようなもので非常に不安定なシステムだからだ。

かつてフォース開発初期において、フォースの耐久テストの際、度を越えたエネルギーの蓄積により実験対象のフォースが暴走。自身を中心に半径30kmの空間歪曲を発生させて、実験施設の木星のラボを空間ごと吹き飛ばした事件があった。

第一次バイドミツションが迫っていたこともあって、一旦はこの事件は棚上げにされたものの、悪名高いTeam R-TYPEは後日このデータを元に、意図的にフォースを暴走させ兵器へと転用させるシステムを完成させた。それこそがデルタウエポンなのだ。

その為一步間違えれば自爆にも繋がりがねないデルタウエポンは、R戦闘機乗りにとってまさしく最後の切り札として扱われていた。

ハウンド・ドッグが装備するアンカーフォースに搭載されたデルタウエポン『ヒステリックドーン』は、次元の壁を破壊し、効果範囲内の存在を強制的に複数の異層次元へと連続転送を行い、転送の際の次元の位相差を利用して、目標を空間レベルで引き裂き消滅させるタイプの物だ。

如何にグリトニルが強固と言えど内部からこれを発動されては一溜りもあるまい。

よしんばヒステリックドーンによる破壊に耐え切る事が出来たとしても、グリトニルの大半は異層次元に強制転送され地球への激突を回避することができる。

ただし内部のバイドの妨害がなければという条件が付くが。

『エニグマよりハウンド・ドッグへ。単機でか？僚機は不要と？』

『ハウンド・ドッグよりエニグマへ。突入部隊の中で無傷で、尚且つフォースのドース・ゲージが100%になっているのは自分だけだ。それにこの機体の波動砲は大質量の破壊には向いていない。デルタ

ウエポンを起動させた後は、亜空間潜行にて脱出する』

『エニグマよりハウンド・ドッグへ。了解した。だがせめてエスコート役として、マルトーを連れて行け。幸いグリトニル周辺の通信へのジャミングは消えている。衛星群の核ミサイルのルートとこちらの砲撃の目標とタイミングを常時そちらに送る。マルトーもそれでいいな?』

『こちらマルトー。了解した。この機体の波動砲では、グリトニルへの遠距離砲撃ができないからな。それでは本機はハウンド・ドッグと共にグリトニルに再突入する』

そのやり取りと共に、軌道上に退避していたR戦闘機郡の中から2機のRが青いスラスタ光の残映を虚空に刻みつけて、グリトニルへと向かっていった。

先行した機体は、R-9DP3 ”KENROKUEIN” コールサイン 『マルトー』。

そして後にくる1機がR-13A ”CERBERUS” コールサイン 『ハウンド・ドッグ』だ。目標を自動追尾する雷撃型の波動砲システムを装備した漆黒のR戦闘機。

装備したアンカーフォースは攻撃力を優先しすぎたが故に、母機からのエネルギーケーブルによる有線制御を余儀なくされた、数あるRの中でも一際攻撃的かつ歪な機体。

ハウンド・ドッグとマルトーはグリトニルに迫る無数の核弾頭を回避し、グリトニルを包む核爆発による放射熱をフォースで防ぎながら、核の炎と大気圏の摩擦熱で燃え上がるような状態になっているグリトニルへ接近。

そして2機は開放されたままの次元カタパルト射出口から突入し姿を消した。

ミーティアはそれを忸怩たる思いで彼らの軌跡を目で追っていた。せめて自分がある時、サブトムを完全に始末していれば——そんな益体もない思いが脳裏を遮るが、今言っても詮無きことだ。

思考を切り替え、波動砲のチャージを開始する。

マイクロマシンによる自動修復システムのお陰で波動砲の出力は

80%程度にまでは回復していた。

これなら多少威力は落ちるが、拡散波動砲も使用可能だ。

それと同時にほかのR戦闘機もまたグリトニルとグリトニルそのものへの攻撃に移る。

既に全機、波動砲のチャージは完了している。

エニグマよりグリトニルの構造上の弱点は既に全機に伝えられている。

複数のブロックを重ねあわせて作り上げられたこの軍事要塞は、ブロック同士の接合部の強度が存外弱い。

この部分を破壊すれば落下途中のグリトニルを解体して、被害の度合いを抑えることが可能になるだろう。それでも被害は出るだろうが、このまま落下させるよりは遥かにマシだ。

R戦闘機群は命中精度を少しでも上げるため、グリトニルと同じ速度で大気圏へと降下しながら照準を定める。

大気圏へと突入しながらの砲撃など一見無謀に見えるが、フォースを盾にすれば大気圏突入時に発生する断熱圧縮など問題なく凌げるのだ。

だがフォースという便利な盾がないグリトニルは、断熱圧縮効果で火の玉のように燃え上がり、今や巨大な隕石さながらだった。

そしてそれを取り巻くは、蒼く輝く尾を空に刻む無数の流星。

これから起きる被害を無視すれば幻想的とも言える光景だった。



「なんなんだあいつらは……」

空で起きる現実離れた光景を見て白銀武は呆然と呟いた。

突如として現れた巨大隕石とそれを迎撃する地球側の核攻撃は、地上からでも見る事ができた。

そしてこちらの核攻撃が全くの意味をなさないことも。

余りの出来事に呆然としてみると、更に理解を超える事が起きる。

火の玉の様になった巨大隕石の周りに無数の流星群が取り付き、青

い光を次々と打ち込み始めたのだ。

「撃ち落とそうとしているのか? ……あの隕石を」

思わず地上に出てしまったが、ここで見ていても状況は分からない。

あれが敵なのか味方なのか。BETAなのか人類なのか。

白銀の知識の中には大気圏に突入しながら、戦闘を繰り広げられる兵器など人類どころかBETAすら持っていないはずだ。

「タケル!」

その言葉に白銀武は振り向いた。その視線の先には、彼と同じ部隊の仲間である御剣 冥夜がいた。

いや、彼女だけではなく、かつて所属していた第207衛士訓練部隊の仲間たちが全員揃っていた。

既に彼女達は実戦部隊であるA-01に配属されていたが、非番の時などはよくこうして元第207衛士訓練部隊の人間同士で動いたりしていることが多い。

「これは……いったい何が起こっている!? そなたは副司令から何か聞かされてはおらぬか!」

「いや、俺もたった今知ったばかりで何がなんだか……」

ひと目で状況を理解していないと分かる白銀の返答に、冥夜の頭も冷えたのだろう。

「すまぬ……。例え知っていても我々に軽々しく教えられるはずもないな。そなたにも事情が分からないとなると一刻も早く副司令の所に向かったほうがいいのでは? ここで見れることなら司令部からでも確認できるだろう」

その冷静な言葉に白銀は今更になって、自分が地上に出てきたことの無意味さを理解した。

「ああ、言われてみればその通りだ。全く俺つてやつは……これじゃまた夕呼先生に怒られちゃう。じゃあ俺は一旦戻るから皆も、念の為出撃できるように待機しといたほうがいい! またな!」

そう仲間達に言うのと、白銀はより多くの情報を手に入れるべく、司令部へと走った。

だが、司令部では白銀が想像もつかないような混乱に陥っていることには、この時の彼が知る由もなかったのだ。

三話 到着

落下するグリトニルを解体する作業は予想以上に難航していた。

無数の波動砲が巨大な要塞側面に突き刺さるものの、一部の外壁が剥がれ落ちていくだけで、解体するには程遠い。

これは単純にグリトニルが頑丈というのもあるが、それ以外にも別の要因があった。

地球の衛星軌道上に張り巡らされた複数の攻撃衛星による核攻撃だ。

当初は落下するグリトニルのみを照準にしていたその核ミサイルによる攻撃は、いつしかR戦闘機も巻き込むことも厭わない形で行われるようになっていた。

無論、R戦闘機群の能力を持ってすればこの程度の攻撃など迎撃も回避も容易い。攻撃衛星の撃墜もだ。

だがこの攻撃が何を意図しているか不明なこの状況で、そのような真似をするわけにもいかない。この攻撃衛星群からバイド係数が検出されれば有無を言わず殲滅できたのだが、バイドに汚染されてない以上、交戦規約がそれを許さなかった。

結果としてR戦闘機は飛来する核ミサイルを回避しつつ、グリトニルの構造的弱点に波動砲を撃ちこむという難易度が高い行動を要求される羽目になった。

だがそれでもこのペースで行けば、地上に着弾するよりも前にある程度解体することはできるだろう。R戦闘機のパイロットたちがそう思った時だった。

電子戦機でもあり、部隊の指揮官でもあるR-9ER2”
UNCHAINED SILENCE” コールサイン『エニグマ』から緊急の警告が走る。

『全軍に通達！ 衛星軌道上の攻撃衛星から戦術級次元兵器の発射を確認した！ 目標はグリトニル！ 繰り返す！ グリトニルに向けて衛星軌道上の攻撃衛星から戦術級次元兵器の発射を確認した！ タイプは異常重力場発生型！ 攻撃中のRは全て退避しろ！』

その情報にR戦闘機パイロット達はまず情報を疑い、ついで自前のセンサーでその事実を確認した。確かに光学的にも視認できるほど、巨大な重力の歪みがこちらに向かつて接近してくる。

先ほどまでは前世紀の遺物のような旧式の核ミサイルを乱射していたというのに、今度は戦術級次元兵器だと？ それもあんな旧式の攻撃衛星が発射したというのか？

歪だ。

何かがおかしい。

そう思いながらも現実問題として、このままここに留まればあの次元兵器の炸裂に巻き込まれることになる。 そうなればR戦闘機といえど無事ではすまない。

各機は波動砲の砲撃を中断し、全機がこちらに向かつて迫ってくる次元兵器の効果範囲外へと素早く離脱する。

内部に突入した『マルトー』と『ハウンド・ドッグ』にも『エニグマ』から警告が伝わっているはずだ。後は時間との勝負になる。

だが迫り来る異常重力場を危険と判断したのは、R戦闘機群だけではなかった。

グリトニル——正確にはグリトニルに寄生したバイドもまたこの攻撃に危険を感じ取ったらしい。

『不味い……。グリトニルが落下速度を早めた！ 回避するつもりだ！』

その『エニグマ』の言葉を裏付けるように、グリトニルが生き残った姿勢制御スラスタから火を吹いて更に加速する。

凄まじい速度による断熱圧縮効果によって更にグリトニルが燃え上がる。

並みのコロニーならこれだけで空中分解して燃え尽きているところだが、流星は軍事要塞というだけあって、それでも尚グリトニルは原型を保っていた。

だが完全に無傷というわけにも行かず、R戦闘機の波動砲の集中攻撃を受けていた一部のブロックが破損し、ブロックごと脱落していく。が、全体としては微々たる損害だ。

そして最悪なことに、あの衛星が放った戦術級次元兵器は誘導機能がないようで、目標が高速移動を開始したにも関わらず、進路を変えすることもなくそのまま虚空を突き進んでいく。

そして——グリトニルは間一髪で、自らに迫り来る可視化できるほど強力な異常重力場をくぐり抜けることに成功した。



「目標、再加速！ ダメです！ この速度ではG弾の効果範囲外に抜けられます！」

「くそっっ！」

オペレーターという言葉に司令官は歯噛みした。

ここは国連軍の管理下にある地球規模でのBETAの到着ユニット迎撃システム、対宇宙全周防衛拠点兵器群『シャドウ』を統括する施設の一つだ。

その中でもここは地球に対する最終防衛ラインとでも言うべき核投射攻撃衛星群『アーテミス』において、米軍に割り当てられた攻撃衛星を制御するためのコントロールセンターだ。

定期的にやってくる月からの到着ユニットを、核兵器で効率よく迎撃するこのシステムがなければ、今頃地球はオリジナルハイヴが無数に乱立する死の星となっていたかもしれない。

当然そこに勤務する人間は軍の中でもトップエリートであり、日々地球を守るといふ高い使命感を持って任務に当たっていた。

だがそんな彼らを持ってしても今回の自体は予測の範疇の外にあった。

もつともそのことで彼らを責めるのは余りにも酷だ。突如として空間転移してくるであろう軍事要塞に対して警戒しろなどと命令があれば、誰もがまずそんな命令を下した人間の正気を疑う。

しかしそれでもその正気を疑うような事が、現在進行形で起きつつあるのもまた事実だった。

あらゆる監視の目をくぐり抜け、突然衛星軌道上に現れた30 km

にも及ぶ明らかな巨大人工物は出現と同時に、地球に向かって落下を始めた。

その際、同時に現れた小型の飛行物体から意味不明の警告が流れたが、その言葉の意味を解析している時間などないため、一旦脇に捨て置き、彼らは自分達の職務を果たすことにした。

この異常とも言える非常事態に司令官は、自分の体面や進退などかなくなり捨てて、使用可能な全ての核ミサイルによる飽和攻撃を指示。そしてそれすら通じないとなると——米軍によつて密かに攻撃衛星に搭載されていたG弾の使用に踏み切った。

無論、上の伺いも立てず、各国との調整も行わず現場が勝手にこの様なことをすれば、どう考えても軍法会議ものだ。更迭どころか銃殺刑も充分ありえる。

だがそれでもこの司令官に躊躇いはなかった。

彼はあの巨大な火の玉となって落下する巨大なコロニーを見て、あらゆる理性的な判断を塗りつぶす本能的な恐怖を覚えたのだ。

彼の本能が叫んでいる。

絶対にあれを地球に降ろしてはならないと。

あれはBETA以上に禍々しい何かだと。

あれを滅ぼすために必要なものが自分の首一つで済むなら安いものだ。

そう思つて虎の子のG弾を発射したにも関わらず、目標は加速による軌道変更という荒業でそれを回避してしまった。

元々G弾はハイヴを始めとした固定目標に対して発射する兵器だ。今回宇宙で運用する場合にしても、主目標のBETAの到着ユニットは、基本軌道変更を行わない為、軌道さえ計算し予測すれば命中するはずだったため、本来誘導機能がないことなど問題ではなかったのだが、それが裏目に出た。

今回の目標はそこを逆手に取り、軌道を変更し、絶対に抗えぬ破壊をもたらすG弾の一撃を回避するという形で凌いでみせたのだ。

あれがもし——BETAの新型の到着ユニットだとした場合、もはや既存のSHADOWでは対抗できなくなることを意味する。

いずれにしても最早G弾まで回避された以上、ここからできることは何もない。

コントロールセンターを重い沈黙が包む中、司令官はアメリカの上層部につなぐホットラインに手を伸ばした。

自分達の敗北を告げるために。



一方でR戦闘機群も混乱の極みにあった。あの突如として放たれた戦術級次元兵器によって、彼らの建てた算段は破綻し、一から作戦を作り直す羽目になったのだ。それも状況に対処しながらだ。

『グリトニル！ 更に加速！ 各機、進路上に回りこんで砲撃を続けろ！』

『ハウンド・ドックとマルトーはどうなっている!? 予定ではそろそろグリトニル内部でデルタウェポンを起動してるはずだぞ！』

『マルトーは内部で被弾し無力化された！ さつき剥がれて落下したブロックの中に閉じ込められている！ ハウンド・ドックは30秒前から応答がない、というかIFFそのものが検知できん！ 撃墜されたと思え！』

『我々だけでやるしかないか……。だが、火力が足りん。駆逐艦フライバー！ そちらに搭載したバルムンク核ミサイルは使えるか！』

『使用可能だがこの高度で使用した場合、地球への被害が出るぞ。バルムンクの核はクリーンな核だが衝撃波で地球環境に甚大なダメージを与えることになる。なによりも外壁に打ち込んでも波動砲の二の舞いだ。大したダメージは与えられんぞ』

『エニグマ』にナーズストレンジ級駆逐艦フライバーの艦長が冷静な返答を寄越してくる。確かにこの駆逐艦に搭載された核ミサイル『バルムンク』は、波動砲ユニットを起爆システムとして採用し既存の核兵器とは一線を画する威力をもつ。そのため長距離宇宙間弾として運用される兵器で、その主な目標は大型の戦艦や宇宙要塞、小惑星と言った代物だ。

有人惑星上で使用すれば尋常ではない被害が出ることになるだろう。

しかもそれだけの兵器でも面積あたりの破壊力は波動砲に劣るのだ。

『誘導して次元カタパルト内部に打ち込んで炸裂させれば、内部からの爆圧でグリトニルを解体できるかもしれない。バイドに地球が本格的に汚染されたら、最終的には核兵器と波動兵器で消毒する羽目になるから同じことだ。責任は全てこちらがとる』

『了解した。ではバルムンクの発射準備に入る。こちらのカウントに合わせてR戦闘機を回避させる。バルムンクの誘導は——』

『本機がやる。幸いなことに次元カタパルトは開きっぱなしだ。あそこからグリトニルの最深部に誘導できれば、内部の消毒もできるかもしれない』

『エニグマ』のその言葉に強い決意を感じ取ったのか、フレイバーの艦長はもう何も言わなかった。

『では、エニグマに最終誘導を任せる。カウントを開始するぞ——』
そして数秒後、衛星軌道上に待機する三角定規のような形状をした軍艦、ナーストレンジ級ミサイル駆逐艦フレイバーより、1発の核ミサイルが発射された。

ちよつとした戦闘機程もあるそれは、ミサイル自体に施された欺瞞システムと防御システムにより、容易く迎撃されないようにできている。

更にそれに加え、『エニグマ』が駆るR—9ER2”
UNCHAINED SILENCE”がミサイルの護衛に付く。
ミサイルと並走した”UNCHAINED SILENCE”は
電子及び光学的にも効果を発するジャミングシステムを起動した。
グリトニルからの迎撃を防ぐためだ。

同時にグリトニル付近の友軍に避難勧告を出し、自機は核ミサイル『バルムンク』を従えて落下するグリトニルの次元カタパルトを目指した。

もう既にグリトニルは熱圏を抜けて、中間圏に到達しつつある。

この高度では作戦が成功しても、地上に被害が出るのは間違いないが、やるしかない。

そしてついにミサイルと共に次元カタパルトに開いた入り口に到達し、そこで『エニグマ』は驚愕に顔を歪めた。

もはや思考を経由してではなく、脊髄による反射で機体を全速力で左にスライドさせる。

次の瞬間、次元カタパルトの内部から戦艦の主砲にも匹敵する規模の黄金色の超振動波が撃ちだされ、次元カタパルト内部に撃ち込まれるはずだった核ミサイルを、誘爆すら許さず、素粒子のレベルにまで消し飛ばした。もし回避がコンマ一秒でも遅れていれば『エニグマ』も同じ末路を辿っていただろう。

こちらのジャミングをも無効化して核ミサイルを探知し、迎撃する。

そんなことを成し得るバイドなど、あのグリトニル内部には一体しかない。

ザブトム。

やはり生きていたのだ。

内部に突入して音沙汰無くなった R-13A ”
KERBERUS” 『ハウンド・ドッグ』と R-9DP3 ”
KENROKEN” 『マルトー』はこいつにやられたのだろう。

作戦の失敗を悟った『エニグマ』は全機に大気圏外への避難を命じた。

まだ僅かばかりの猶予はあるが、ザブトムが生きている以上、積極的な妨害をしてくるのは目に見えている。最早落下を止める方法は手元にはない。

ならば指揮官としてこの後、グリトニルが地球に着弾した時の衝撃から部下を守るのが彼の役目だった。

最後に彼はグリトニルの落下地点を予測する。また軌道変更でもされたらその限りではないが、このままではあの巨大人工物がかつて中国と呼ばれていた地域、その中でもカシユガルと呼ばれる地点に墜落することになる。

住民達の避難は間に合うまい。どんなシエルターに隠れても巨大隕石衝突に匹敵する衝撃に耐えられるものではない。

それでも——最後にグリトニルの落下予測地点をひと目見ようとして『エニグマ』は違和感を覚えた。

落下予測地点にあったのは——大自然でもなければ街でもない。草木一本生えない荒野に建っている全長数キロはある奇妙な構造物だった。

そして同時にその構造物から光学兵器と思わしき無数の光が放たれ、グリトニルへと直撃する。

ではあれは地上に配置された対空システムだろうか？だが、なぜいまさらになって起動したのだろうか？

推測にしかならないが、あの威力と射程なら大気圏外にグリトニルが現れた時も充分射程距離に入っていたはずだ。

まるでグリトニルが軌道変更して、自分達の真上に落ちてくるとわかったので、慌てて攻撃しているようにも見える。

もつともそれでもグリトニルの外壁には焼け石に水だ。あの光学兵器は収束させればフォースレーザーにも匹敵する威力を持っているようだが、その程度ではグリトニルの外壁を破るには足りないのだ。

だが、いつまでも観察してるわけにもいかない。違和感を一旦脇に置き、着の衝撃波から逃れるため、『エニグマ』は先に行った友軍の後を追いつ、一瞬で大気圏外へと離脱していく。

落下する隕石と対照的に、蒼いスラスタの尾を引いて空へと駆け登って行く流れ星の群れ。

それは当然地上の人間たちも様々な方法で彼らを観測していた。



その戦いを観察していた横浜基地の司令部もまた混乱の極致にあった。

「巨大な落下物に攻撃を仕掛けていた正体不明の飛行物体群が離脱し

ていきます！ 嘘……なにこれ……!？」

正体不明の飛行物体を監視していたオペレーターが、飛行物体の余りにも常軌を逸脱した速度に混乱した声を上げる。

それに対して素早く副司令である香月夕呼が叱責を飛ばした。

「報告は明確にしなさい！ あんたの感想を聞きたい訳じゃないのよ！」

「し、失礼しました。飛行物体群、全て大気圏外へと離脱を完了。その速度は……全機、秒速100kmを超えています」

「秒速100kmだと!？」

この言葉に反応したのはこの横浜基地の司令官であるパウル・ラダビノツドである。

宇宙空間にある低軌道艦隊ならば燃料や加速時にかかるGを度外視すれば可能かもしれないが、そこまでの速度を出すには加速に膨大な時間がかかるはずだ。

そんな速度を一息で出せるならば最早、光線級の狙撃すら正面から回避しかねない。

「どういうことだ……。やはりあれは地球の兵器ではないのか？」

その独り言に彼の隣に控えていた副司令である香月夕呼が応じた。

「その飛行物体に関してはわかりません。……ですが、今なお落下中の巨大人工物。あれは間違いなく地球のものかと思われれます」

「なんだと！ そう言い切れる証拠はあるのかね?!」

あれを地球製と断言する香月夕呼にラダビノツドは目を見開いて問い詰めた。それに対して彼女はなんでもないうようにこう答えたのだった。

「根拠はいくつかありますが、その内の一つは落下地点にあるオリジナルハイヴが、あの落下物に対してレーザー攻撃を仕掛けていること。彼らは同士討ちをしませんので、そうなると消去法で地球のものになります。」

でももつとわかりやすい確証があるんですよ」

訳がわからないと言った表情の司令官——そしていつの間にか司令室の人間が全員自分を注目していることに気を良くして、彼女は教え

子に答えを教える教師のような気持ちで答えを口にした。

「あれを私のコンピュータで画像処理して周りを覆ってる炎を消してみたんですけど、あの人工物の側面にデカデカと英語で『G l i t n i r』って書いてあるのが確認できました」

まあ宇宙の公用語が英語だった場合はその限りではないですけどね。と付け加える。

その言葉の意味を理解したラダビノツドは今度は別の意味で顔を真っ青にした。

「では……まさか……あれは第五計画の移民船か!？」

「それも違うかと。例の船は常に国連とアメリカが徹底的に監視管理しています。先ほどこちらの伝手で確認した所、船団はすべて無事。何よりもあの移民船とは大きさも形状も全く違います。ついでに言えば核兵器の飽和攻撃に耐えられるほど頑丈じゃないでしょうし」

「ならば……あれは、何だというのだ?」

「現状の所すべて不明。とりあえずあれが地上に落ちた後、改めて調べるしかありませんわ。もつともあれほどの質量が地上に激突して、その後発生するだろう衝撃波やら地殻津波やらから人類が生き延びることができれば、の話になります」

そこでラダビノツドは気がついた。この横浜の魔女と恐れられる香月夕呼から諦観の空気が漂っていることに。

つまるところ、これは本当にどうしようもない状況なのだ。

「……そうか。座して待つしかないというわけか」

「そういうことになりますね」

沈痛な空気が司令部を包む。

そこに司令室のドアが開いて慌てた様子の青年——白銀武が飛び込んできた。

「夕呼先生! 上の隕石一体どーなってるんです!? あれ、あのまま地上に落ちたらマジヤバイことになるんじゃないですか!? ねえ先生!？」

突如現れて今までの空気をぶち壊しにしたその青年に対して、香月夕呼も含めた司令部の全員のじっとりした視線が突き刺さる。

これには無神経と言われる白銀もさすがにたじろぐことになった。その場にいる全員を代表して香月夕呼が大きく溜息をつく。

「白銀……あんたってほんと空気読まないわね……」

「ええつと、俺なんか不味いことしましたか？」

「いいえ、別に何も。ただこれが人類最後の光景になるかもしれないから、しっかり目に焼き付けときなさいってことよ」

「……え？ ちよつと待ってくださいよ!?! これが人類最後ってどういうことですか？」

更に混乱した自らの自称教え子に彼女は目の前の大型ディスプレイに指を向けてやる。

それを見た白銀は流石に言葉を失った。

そこに映しだされているのは今まさに、全長30kmの炎に包まれた巨大人工物が僅か数kmのオリジナルハイヴのモニュメントを押しつぶそうとしている瞬間だった。

四話 判断

結論から言えば地球は滅びなかった。人類もだ。

流星にグリトニルがあのまま加速を付けた落下を行った場合、グリトニルの内部のバイドもただではすまないと判断したのだろう。

地表に激突寸前で、グリトニルは搭載した全ての慣性制御システムをフル稼働させて、落下の衝撃を相殺した。

その結果、グリトニルはあの奇妙な塔を押しつぶし、その巨体を地上に横たえることになった。懸念されていた衝撃波や地殻津波の類は一切発生せず、落下地点を中心にマグニチュード7の地震が発生した程度で収まったのは不幸中の幸いか。

だがそれはグリトニル内部のバイドが健在であるということ在意味する。

できうることなら、今すぐグリトニルに再突入を行い、内部のバイドを殲滅したい所だが、現在『エニグマ』の指揮下にある機体は大なり小なりダメージを受け、パイロットの疲労も無視できない。

何よりもこの地球は自分達の知る地球と違いすぎる。

存在しない防衛艦隊、旧世代の防衛衛星、通じない通信。そして戦闘中は気がつかなかったが、『何か』に食い荒らされて荒野となった大陸。

そして大陸中に繁殖しているバイド係数が検出されない、未知の生物。

鉄壁の防衛網を築き上げていたはずの月や火星も、それらの生物に占拠されている事実。

極めつけは天体の観測をした所、星の座標の位置が22世紀のそれと微妙に異なったことだ。

その為、一旦衛星軌道上に退避したグリトニル突入部隊は、そこで現地の情報収集と情報交換を兼ねた通信によるブリーフィングを行うことになった。地上の無線を拾い上げ、衛星軌道上から地上の都市を偵察し、電子戦機によって地上のネットワークシステムに介入し、最終的にはR戦闘機や艦船の次元移動用の空間座標を記録するレ

コーダーまでひっくり返して調べあげた結果、ここは彼らの知る地球ではないことが判明した。

この時代は西暦にして2000年初頭の地球。

そしてなによりも大事なことだが——この地球は彼らの知る22世紀とは全くの別の時間軸の地球だということだ。

それはこの地でバイドに代わって、猛威を振るうBETAと呼ばれる異星の敵性生命体が証明している。彼らの20世紀の歴史にはBETAという地球外生命体に侵略を受けた事実はない。

これらの事を突入部隊の指揮官である『エニグマ』や駆逐艦フライバー、強襲揚陸艦トールの艦長を始めとする佐官や士官達に加え各艦の技術者も交えて話し合った結果、グリトニルの次元カタパルトが暴走したことにより、時間と次元の壁を突き破り平行世界の地球へとたどり着いたのではないか、という結論に達した。

その一見荒唐無稽とも言うべき結論に異論を唱えるものは誰もいなかった。

何しろ22世紀の人間はまさにその荒唐無稽としか言い様がない経緯で現れた怪物と、何十年に渡って戦い続けていたのだから。

バイド。

26世紀の人類の手によって生み出され、暴走し、次元の彼方へと廃棄された絶対生物。

次元の狭間で自己進化を繰り返したその肉塊は、とうとう次元と時間の壁を突き破り、22世紀の地球に襲いかかってきたというのは、新兵ですら知っている公然の事実である。

今回の転移事故も元はと言えば、バイドが発端となっている。バイドが関わった事象ならば別の時間軸の地球に飛ばされても不思議ではない。

何より地球連合軍もまた異層次元航行システムの研究の副産物として、実験室レベルではあるが、平行世界観測や時間移動の実証に成功しているのだ。

一部のR戦闘機など、平行世界からの技術を持って作り上げられたという噂話もあるほどだ。

ともあれ、それらの前知識があつたお陰で、この異なる時間軸の21世紀の地球に飛ばされたという仮説もグリトニル制圧部隊の部隊員達はすんなりと受け入れ、すぐに建設的な話に移行することができた。

すなわち、彼ら本来の時間軸——22世紀の地球への復帰ができるかどうかという議論だ。

これは艦に同乗していた技術者から、比較的簡単に答えを引き出すことができた。

もつともそれは22世紀への帰還はグリトニル制圧部隊単体では間違いなく不可能という無情な答えだったが。

技術者の話によれば、時間軸の壁を超え、更に別の平行世界に移動するには艦船の異層次元航行システムだけでなく、莫大なエネルギーが必要となるとのことだ。

駆逐艦も強襲揚陸艦も、そしてR戦闘機も異層次元航行システムは搭載しているが、それはあくまで、惑星間移動や星系間移動を目的としたもので、時間軸の違う世界線を突破するにはとてもではないが出力が足りないとのことだ。

もしかしたら最新鋭の異層次元航行戦艦ニブルヘイム級の動力炉ならば、自前でそのエネルギーを用意できるかもしれないが、ここにはないものを言っても仕方がない。

そして地表に落下したグリトニルは未だ原型を保っている。

外からスキャンした所、動力炉なども機能を保ち、次元カタパルトも使用可能だということが判明した。

となれば、残る方法は一つだけ。

残る戦力で再びグリトニルを強襲し、内部のバイドを排除して次元カタパルトを奪還する。

幸いなことに元の地球の絶対次元座標自体はこちらのデータに残っているため、次元カタパルトさえ奪還すれば、高出力のカタパルトによって力づくで世界線を飛び越えて、元の22世紀に帰還できるはずだ。

だが、その前にやることも山積みだった。

まずは被弾し、無力化されたR—9DP3 ”KENROKEN
”『マルト』の回収。『マルト』は戦闘中に被弾して行動不能になつた後、とあるブロックに閉じ込められた。しかもそのブロックは
大気圏突入時の衝撃に耐えられずグリトニルから剥離し別の地域に
落下、地上——この世界での日本に到着していた。そのブロックも地
上に激突寸前で慣性制御システムを起動させて、落下の衝撃を抑えて
いたことが確認されている。

その為かパイロットのバイタルも無事で、バイドに汚染された形跡
もない。

問題があるとしたら、その到着したブロックが現地住民に一足先に
確保されそうなことだ。

落下したブロックは一つだけではない、それ以外にももう一つ大型
のブロックが、アラスカに落下し、やはり現地住民に確保されつつあ
る。

他にもBETAの前線基地とも言うべきハイヴ付近にも落下した
ブロックが複数あるため、迅速に回収か、破壊しなければならない。

だが彼らを一番悩ませるのはBETAよりも、この現地住民——す
なわち21世紀の地球人達への対処だ。

地球軍にはバイド以外の異星起源の知的生命体と接触した場合の
マニュアルがいくつか用意されているが、さすがにタイムスリップし
て過去の地球人と接触した時のマニュアルまでは用意されていない。

この地球上の情報を収集した所、この21世紀の地球は、異星から
の侵略者BETAによってある意味22世紀の地球以上に追い詰め
られている。

時代が悪かったというのものもあるだろう。まだこの時代の人類は統
一国家も成し得ておらず、民族紛争も絶えない時代であり、技術力も
宇宙に進出を始めたばかりでまだまだ発展途上。

もしBETAが来るのがあと百年遅ければ科学技術と社会の発展
もあり、容易くこの世界の地球はBETAを撃退していたはずだ。

もつとも逆にあと百年早めにBETAが来ていたら、抵抗の余地も
なく滅ぼされていただろうが。

いずれにしても、これらの国家や民族の統一もなされてない時代に BETA が襲撃してきたため、各国は表面上は手を結んでいるがその実腹の探り合いをし、如何に相手より優位に立つかという考えも強く持っている。

そういつた政治劇は 22 世紀の地球にもないわけではなかったが、この世界の地球人は政治に熱を入れた結果、BETA の脅威度を見誤り、初手をしくじってしまった。

そういつた意味では 22 世紀の地球は幸運だった。何十年も前からバイドの存在と襲撃を察知し、時間をかけてバイドへの対抗策である R 戦闘機の開発に成功したのだから。

しかしそこまで最善手をつくしても尚、人類を敗北寸前まで追い詰めてきたのがバイドなのだ。

時代と世界線は違えど、同じような状況にあるこの世界の地球を、同じ地球人として手助けしてやりたい気持ちはないわけではないが、複雑怪奇な政治劇を繰り広げるこの地球に表立って関わり、政治的に雁字搦めになるといのは御免だというのが部隊の指揮官や隊員たちの一致した意見だった。

何よりも自分達の役割は 22 世紀の地球を守ることであって、時間軸の違うこの地球を守ることはない。優先順位を間違えてはならない。

ただ、完全に関わりあいにならないというのも不可能ではある。

恐らく『マルト』はこのままでは現地住民に確保されてしまうだろうし、彼を取り戻すためには現地住民と何らかの交渉をしなければならぬ。最悪力づくになっても回収だけはすることに出来る。他にも技術の流出を極力避けるために、何らかの行動を起こさなければならぬだろう。

アラスカに落下したグリトニルのブロックからは微小だがバイド係数が検出されているため、汚染が広がる前にこちらで回収か、消毒を行わなければならない。

ほかにも自分達のこととは伏せておくにしても、この時代の地球にバイドの情報だけは最低限渡さなければならぬだろう。

BETAはあくまで増殖能力の高い有機生命体に過ぎないが、バイドは無機有機を問わないどころか空間に至るまで、あらゆるものを侵食し、汚染したものをベースに無限に増殖していく生物兵器だ。

この時代の人間が正しい知識もなくちよっかいをかければ、悲惨なことになるのが目に見えている。

実際、バイドは偶然か、それとも狙ってやったのかは不明だが、グリトニルをこの地球のBETAの総本山とも言うべき、オリジナルハイヴの真上に落下させた。

現在ハイヴの象徴たるモニュメントは完全に押しつぶされてしまっている。地下の構造体はある程度無事かもしれないが。

これによりハイヴのBETAは壊滅状態になっていると思われるが、衛星軌道上からバイド係数をスキャンした所、更に厄介なことになっていることが判明した。

低レベルのバイド係数が異常に増えているのだ。

恐らくはバイドが生き残ったBETAを汚染して手駒に加えているに違いない。

次元カタパルトを奪取するためには、これらバイドに汚染されたBETAの排除も必須となった。

だが部隊の参謀達の頭を抱えさせることになったのが、BETAの数とその動きだ。

BETAは押しつぶされたオリジナルハイヴを修復したいのか、それともバイドを排除するためなのか、大陸中のBETAの3割が現在オリジナルハイヴに集結中とのことだ。

しかしいくらBETAが集まった所で、まとめて汚染されてバイド化するだけ。

何よりも地上のBETAの総数は数百万にも及ぶと言われている。

もしこれら全てのBETAがバイド化すれば、施設内部の制圧を目的にし、大火力を有する機体が少ないこのグリトニル突入部隊では手に負えなくなるのだ。

そういった意味でもやはりこの時代の地球人と何らかのコンタクトを取る必要がある。

そう部隊の参謀が説明を終えた所、強襲揚陸艦トールの艦長がウィンドウ越し（各艦の艦長は、それぞれ自分の船に居ながら通信システム経由で意見を交換している）に発言をした。

「つまり我々に必要なのは各国に伝手があり、こちらの言うことを信じ、高い知性を持ち、無駄な欲や政治的野心を抱かない交渉窓口というわけか？ ……実にハードルが高いような気がするが」

その言葉に参謀は苦笑しつつも、答えた。

「確かにこれらの条件全てを満たす相手は、この地球文明圏のシステムを調べた調査の結果、該当するものはいませんでした。しかしこの条件に限りなく近い相手なら該当者が1人います。それなりの伝手と権力を持ち、何よりも我々が平行世界の未来からやって来たことを理解できる頭脳の持ち主。……信じがたいことにこの人物は20世紀に、量子因果論という平行世界に関する極めて高度な論文を発表しています。TEAM R—TYPE辺りが見たらよだれを垂らしてスカウトするでしょうね。彼女なら我々の交渉相手には相応しいかと」

「……彼女だと？ 女性なのか」

「国連軍横浜基地副司令、香月夕呼博士。対BETA用特殊計画オルトネイティブ4の中心人物。現地では横浜の魔女と呼ばれています」



グリトニル突入部隊が香月夕呼の話をしているその頃、当の横浜の魔女は、自分の研究室でくしゅん！といささか可愛らしくしゃみをした。鼻をすすった後、改めて目の前にいる白銀に視線を向ける。

「幸いにも人類は滅びなかったわけだけど」

そう言つてコンソールを操作して、大型のディスプレイに現在のオリジナルハイヴがあった場所を映し出す。

かつて天にも突かんとそびえ立っていた、手裏剣をいくつも組み合わせたような形状のモニュメントはもはや、天から降ってきた巨大構造物——コードネーム『ファイヤーボール』によって完全に押しつぶ

されていた。

「よりいつそう訳の分からない事態になったわね。白銀、アンタ心当たりない?」

「あるわけないじゃないですか……。先生、訳の分からない事が起きたら俺を疑うのやめてくれませんか?」

そう抗議する白銀だったが、彼女は知ったことではないと言わんばかりに背を伸ばして凝った筋肉をほぐした。

「と言ってもねえ……。これ間違いなくこの世界のものじゃないわよ。かと言って英語で名前をペイントしてるようなのが異星人のものな訳がない。となればアンタと同じ別の世界からの厄介者としてかと思えないのよね……」

「でも、明らかにあれは俺みたいに偶然で因果導体になったようなのは、根本的に違う感じがしますよ。まるでSF世界の未来からやってきたような……」

「白銀……今なんて言った?」

突然目を鋭くした香月夕呼に、思わず白銀はたじろぎながら答える。

「え……? いや俺みたいに偶然で因果導体に……」

「違うわ! その後!」

「えーと、SF世界の未来からやってきた?」

「それよ!」

バンと机を叩いて香月夕呼は興奮しながら机から立ち上がった。

「なんでこんな簡単なことに気が付かなかったのかしら! そうよ、あいつらは未来の地球から来たんだわ! これならあんな人工物を作る異常な技術力を持ちながらも、英語なんて言語を使っていることに説明がつくわ!」

一方白銀はなんだか胡散臭さそうな表情で彼女の推論を聞いていた。

「本気ですか夕呼先生。未来から来たなんてそんなSF小説じゃあるまいし……」

「あんたね。自分の状態わかった上でそんなこと言ってるの? はっ

きり言って胡散臭さでいえば別の世界の因果の集合体で、平行世界も移動できるあんたのほうがよっぽどよ。それに比べれば、タイムスリップなんてむしろわかりやすく可愛いもんよ」

「そ、そうでした」
まったくこの教え子は成長して一歩進んだと思っただけの間にかまた一歩下がっている。

更にもう一つ説教でもしてやろうとした時、司令部からの通信が来た。

素早く、受話器を取ると彼女は報告に対してしばし耳を傾けた。一分程して彼女は受話器を置き、白銀に向き直る。

その顔からは先ほどまでの気さくさは消え去り、横浜の魔女と呼ばれる冷徹な天才科学者のそれになっていた。

「ちようどいいタイミングだわ。ここで推論を重ねるよりも確実な方法が見つかった」

「確実な方法……ですか」

「ええ、オリジナルハイヴに落下した巨大構造物——コードネーム『ファイアーボール』と付いたあれだけ落下寸前まで、正体不明の戦闘機群、コードネーム『シューティングスター』に攻撃されてたのは知ってるわね？ その『シューティングスター』の攻撃によって『ファイアーボール』の一部の構造物が剥離して落下していたのよ。」

正直あの時は、そんなことよりも『ファイアーボール』本体の落下に気を取られてそれどころじゃなかったけど、たった今その剥離した『ファイアーボール』の一部が落下した場所が判明したわ。

落下した構造物は複数あるけど、衛星からの報告によるとどれも原型を留めているらしいわ。これを直接調べれば『ファイアーボール』がどこ製かわかるとは思わない？」

「確かにそれが一番確実ですね。それでそいつは一体何処に落ちたんですか？」

「大半はユーラシアのハイヴ付近やBETA勢力圏内。これは回収は不可能ね。でも人類の勢力圏に落ちたのが二つあって、ひとつはアラスカのソ連租借領。これはちよつと手が出せないわ。多分今頃ソ連

とアメリカがこれを巡って睨み合ってる頃でしょうね。そして最後が——幸運なことにこの横浜基地のすぐ近く、旧厚木市の辺りよ。幸いなことにあそこも疎開が進んでる地域だったせいで人的被害はないみたいね。

ちようどいいわ。白銀、A—01にも正式な命令を出すから、今すぐ現地に行つてこの構造物を確保してきなさい。日本政府や国連の方には私から手回しをするわ。——さあ、さっさと行きなさい。万が一にでも帝国軍やらに先に確保されたら面倒なことになるわよ！」
「——っ。了解しました！」

白銀としては様々な疑問があつたが、その香月夕呼の剣幕に押されてその勢いで彼女のラボから飛び出していった。

だが、すぐに彼は頭を切り替えた。疑問はある。だが確かに現地に行つて『ファイアーボール』が落とした構造物を調べることができれば、それが一番確実なのは間違いないのだ。

果たして彼らは本当に未来の地球人なのか。

もし未来の地球人だとしたらこの世界に未来はあるのか。
そういつた疑問を胸の中にしまいながら白銀は走った。

五話 汚染

アラスカソ連租借領、『ファイアーボール』落下構造物『 α 』落下地点

吹雪が視界を埋め尽くしていた。

文字通り一寸先も見えない視界の悪さに、ソ連軍の戦術機衛士であるソフイーヤは苛立ちながら自らの愛機であるMiG-23 チボラシユカのセンサーを次々と切り替える。

試行錯誤の結果、ようやく視界がそれなりに確保できて彼女は安堵の溜息をついた。今この場には何が起こるかわからない。同じくこの目標を確保したがるであろうアメリカ軍だけでなく、BETA以上に正体不明な何かが出てくる恐れがあるからだ。

ソ連軍人の彼女の役目は、この地点に落下した正体不明の人工構造物コードネーム『 α 』をアメリカよりも先んじて確保すること。

『ファイアーボール』の落下直後の混乱から立ち直ったソ連は、アラスカとアメリカの境界線付近に『ファイアーボール』の一部が落下していたことにいち早く気が付き、すぐさま戦術機を中心にした調査部隊を送り込んだ。

調査部隊にフル武装した戦術機中隊が随伴しているのは、同じ獲物を狙ってアメリカ軍とかち合った場合に備えてというのもあるが、それ以上にこの落下した構造物『 α 』から何か出てくるかわからないからだ。

この落下した『 α 』の全長は約400メートル。空母並のサイズを持ち、長方形の箱状の形状のそれが垂直にアラスカの凍土に突き刺さっていた。

これほどのサイズの物体が大気圏外から自由落下したのなら、落下の衝撃で巨大なクレーターができていてもおかしくないが、不思議なことにそういったものは見当たらない。

まるで最初からあったと言わんばかりに、或いは前衛芸術のオブジェのように凍土にそれは突き刺さっていた。

この構造物の外壁には調査部隊が持ち込んだあらゆる工具——戦術機の武装も含めて——がまったく歯が立たなかったが、巨大な穴が側面に空いていた。元は本体である『ファイアボール』へと続く通路だったと思わしきそれは、幸運なことに車両どころか戦術機も通れるサイズだった。

現在調査部隊の大半が、その穴から『α』の中に入り内部を調べている。彼らもそれなりの武装をしている上に、戦術機も2機ばかり護衛として中に入っている。

万が一、この『α』の内部にBETAが満載されていたとしても、ソフィヤが所属する戦術機中隊は充分それを殲滅できるだけの戦力を有している。何の心配もないはずだった。

だというのに。

なぜさつきから掌に汗が滲んでいるのだろう。

自分はBETAとの戦闘経験もあるし、非公式だが対人戦闘の経験もある。

愛機の様子もおかしなところはないし、友軍との通信システムにも何の問題もない。

なにも心配することはない。はずなのに。

なぜ自分はこの『α』の側面に空いた闇に言いようのない恐怖を抱いているのだ？

あれはただの闇だ。実際内部では先に入った調査部隊が放つライトの光が時折瞬いているのだから、彼らも無事だ。未知の敵に恐れる必要もない。

調査部隊が『α』内部に入ってもう30分が過ぎた。もしこれがBETAの新型の落着ユニットだとしたら、とつくにBETAの迎撃が始まっているはずだ。ならばこれに脅威はない。

こんな闇に子供のように怯える暇があったら、むしろ自分達を排除してでも『α』を横取りしようとするだろう米軍の特殊部隊に対して注意を向けるべきだ。

そう彼女が自分に言い聞かせたその時だった。

砲声が『α』の中から響き渡った。

『α』の側面の穴から戦術機用の突撃銃のマズルフラッシュの光が連続するストロボのように次々と吐き出される。

——やはり内部に何かがいたか!?

だがこれも予想の範囲内でもある。すかさずソフイーヤは愛機を臨戦態勢にすると同時に内部の調査部隊に通信を繋げた。通信自体はすぐに繋がった。が。

「どうした! 襲撃を受けたの!? 応答して!」

『こちら——攻撃——受け——こいつら——BETAじゃ——』

しかし返ってきた無線の答えは途切れ途切れで、よく聞き取れない。

先ほどまでの定時連絡では特に問題はなかったというのに。

なんらかの通信妨害でも受けているのか?

だがとにかく内部の部隊が攻撃を受けた事自体はわかった。別の場所を警戒していた僚機達もこの通信と異常を察知していたようで、ソフイーヤの機体のすぐ側に、すなわち『α』の入り口の前へと集結しつつある。

だがその時にはもはや内部からの銃声は途絶えつつあった。

内部の調査部隊の全滅という最悪の自体も想定しつつ、陣形を整えたソ連の戦術機中隊が、今まさに側面の穴から『α』内部に突入しようとしたその時だった。

穴から一機の戦術機が姿を覗かせた。

穴の中の闇が深く、おまけに吹雪が激しいせいで、シルエットしか見えないがその形状からして、内部の調査部隊の護衛の戦術機であるMiG-23なのは間違いない。

なんとか回復したデータリンクによれば、パイロットのバイタルも問題ないようだ。

どうやら内部の戦術機が独力で敵を片付けてしまったらしい。

微かな安堵と共にソフイーヤはその機体へ通信を送る。

「今から突入する所だったけど、そっちで片がついてしまったようね。一体何に襲われたの？」

返答はない。やはり通信システムの調子が悪いのだろうか？

訝しげにしながらもソフイーヤは更に言葉を重ねた。

「ねえ、どうしたの？ 通信が届いてないの？ 聞こえてたら返事を

——」

『お、おい……あいつを見ろ！』

だが彼女の言葉に反応を返してきたのは、話しかけた相手ではなく、隣にいた僚機だった。

通信システムを調整することに集中していたソフイーヤは気づいていなかったが、穴からシルエットを見せていた戦術機はいつの間にか穴の外に出ていた。

そしてそれに伴って、その姿を外界に晒している。

それを見たソフイーヤは絶句した。

その戦術機にはあるべき筈の機械仕掛の頭部がなかった。そしてその代わりと言わんばかりにまるで光線級を思わせる巨大な眼球が寄生するように植え付けられている。

血走った眼球の瞳孔は忙しなく動き、『α』を——引いては自分を包围するかつての僚機達を観察するかのように次々と捉えている。

その右腕は肘からもげて、切断面からは鞭を思わせる触手が生えており、全身の装甲にはまるでフジツボのような無数の肉腫が発生して脈動している。左腕は無事だがその手に握られた突撃銃は仲間であるはずのソフイーヤ達に向けられていた。

そして極めつけが管制ユニットだ。

その戦術機のハッチはまるで引きちぎられたかのように破壊されており、その内部の様子を外界にさらけ出していた。

だが管制ユニットに座るのは人間ではない。

管制ユニットの座席に鎮座するのは胎動する巨大な肉の塊だった。

「マルク……い！」

それを見たソフイーヤは思わずその戦術機の衛士の名前を呟いた。彼女は見てしまったのだ。

管制ユニットを埋め尽くす肉塊から飛び出た人間の手足を。

『畜生！ 寄生されてやがるぞ！』

変わり果てた友軍機の姿を見て状況を理解した僚機達が、突撃銃を構えて攻撃体制に移る。

本来ならばソフィーヤもそれに続く筈だった。しかし怯えか、混乱からの判断ミスか、或いは生存本能からの警告か、反射的に彼女だけは跳躍ユニットをふかして後方へと跳躍して距離を取った。

それが彼女の命を救った。

次の瞬間、寄生され変質した戦術機の背後、それが出てきた『α』の大穴から無数の触手が、まさしく目にも止まらぬ速度で飛び出して、包囲していた戦術機中隊へと襲いかかったのだ。

突撃銃を構えていた戦術機達は反射的に迫り来る触手に向かって射撃をするも、目標の余りの速度と数の前には無意味だった。

人の胴体ほどの太さを持つ無数の触手は、あるものは銃弾に匹敵する速度で戦術機の管制ユニットを撃ちぬいて串刺しにし、またあるものは戦術機の胴体に絡みつき、雑巾のように絞り上げた。

襲われた衛士達がまともな悲鳴すら上げる暇すらない、余りにも一方的で迅速な虐殺だった。

「……は？」

後方に飛び退いた故に触手の射程から逃れ、唯一生き残ったソフィーヤは眼前で起きた余りの非現実的な光景に呆けたような言葉を出した。

全滅。

一個中隊の戦術機部隊が。

為す術もなく。

穴から飛び出した無数の触手は、新たな獲物を手に入れたことを喜ぶかのように、うねうねと蠢きながら串刺しにされた、或いはバラバラにされた戦術機達を空高く掲げている。

20メートル近い機械じかけの巨人が、まるで子供の人形遊びのようには扱われている悪夢のような光景にソフィーヤは自分の正気を疑った。

やがて触手の群れは捕獲した戦術機共々、『α』の側面に開いた穴の中に再び戻っていった。

『何か』に寄生された異形の戦術機をその場に残して。

最後に残ったソフィーヤの機体にはこいつで充分ということだろう。

「ふ……ふぎけるな……！ 化け物が……！」

ようやく判断力を取り戻したソフィーヤは毒づきながらも状況を判断する。

敵は恐らくは通常のBETAとも米軍とも違う、新種の敵性体。

内部の調査部隊は恐らく全滅。

自分が所属する戦術機部隊も全滅。

おまけにジャミングが働いているのか、通信システムも再び沈黙してしまった。

この状況で自分がやるべきことは——逃げること。

逃げてこの異形の存在を上層部に伝えること。

この『α』の中に潜む存在が、BETAの落着ユニットかそれ以上の脅威だと一刻も早く伝えなければならぬ。

そう結論づけるとソフィーヤは即座にその場の離脱を試みる。

だが相手もソフィーヤを生かして返すつもりはないらしい。寄生戦術機がその右手に生えた触手を伸ばして、ソフィーヤ機に向かって鞭のように叩きつけてくる。

先の虐殺の経緯からその攻撃を予測していたソフィーヤは、機体を鋭く跳躍させて回避。

そして反撃として空中から寄生戦術機に向けて突撃銃を撃ちこむ。

ソフィーヤからすれば、あくまでこの攻撃は牽制であり、これによって生じた隙について敵機を撃破するか逃走するための機会を作るつもりだった。

だからこそ彼女は再び自分の目を疑った。

事もあるうに敵機は、迫り来る無数の36mmの砲弾を回避もせず、棒立ちで受け入れたのだ。

そして通常の戦術機なら間違いなく行動不能になるダメージを受

けながらも、寄生戦術機は微動だにせず今度は左手の突撃銃を単発で発砲した。

まるで機械仕掛けのような正確無比な射撃は、ソフィーヤの機体の跳躍ユニットの片方を正確に撃ちぬいていた。

ダメージを受けたことを感知したシステムが被弾した跳躍ユニットを強制的にパージ。

切り離された跳躍ユニットは空中で爆発し派手な火花を咲かせた。
(不味い……！)

ソフィーヤは未だ空中にある機体を、残った跳躍ユニットだけで何とか制御して着地させる。

なんとか不時着は免れたが、これで機動力を大幅に削がれてしまった。

こうなってしまうては逃げ切るのとは不可能だ。

あとは敵機を撃破するしか生き延びる道はない。

そう決意を固め、改めて突撃銃を構えたその時、さらなる絶望が上乘せされる。

『α』の大穴から跳躍ユニットの推進炎を吹かせながら、次々と戦術機が飛び出してきたのだ。

「……嘘でしょ?」

その戦術機の一団は見事なライディングを決めて、ソフィーヤ機を半円形に包囲する陣形を取る。

それらの戦術機は先ほど『α』から飛び出した触手によって、撃破された筈のソフィーヤの僚機達だった。

彼らもまた最初の寄生戦術機と同じく、管制ユニットを始めとして機体の各所に巨大な肉腫を植え付けられ、操り人形と化していた。

あの触手はこの短時間で捕獲した戦術機を全て汚染してしまったのだ。

——ああ、駄目だ。終わった。

唯でさえ跳躍ユニットを片方失ったこの状態では、これだけの数の寄生戦術機に勝つことも逃げることも不可能である。

最早自分の敗北を悟ったソフィーヤは自機の自爆装置を意識した。

こんな化け物達に生きたまま取り込まれるぐらいなら、いつその事自分で――

そう彼女が悲壮な決意を固めようとした時、突然、視界を真っ赤な炎が埋め尽くした。

辺り一帯に吹雪いていた吹雪が、直撃を受けていないのにも関わらず瞬く間に気化して消し飛んでいく。

突然直上から撃ち込まれた直径数十メートルはあろうかという炎の柱は、大蛇の如く蠢いてソファイヤー機を包囲していた寄生戦術機部隊を一機残らず飲み込み、飴のように溶かし尽くしてしまった。

次々と急転する事態についていけず、ソファイヤーは呆然と上空を見上げる。

そこに一機の戦闘機の姿があった。

いや、それを本当に戦闘機と呼称していいのかどうか彼女にはわからなかった。

それはソファイヤーの知るどんな航空機とも違う形状をしていた。

まず目を引くのは太陽の様に明るいオレンジイエローの塗装と、機首の大半を占める黄土色のキャノピーだ。

更に良く観察するとその機体は航空力学など知ったことではないと言わんばかりの無骨なエンジンブロック、複数の円筒形状のタンクとアンテナを思わせる突起物、そしてそれを支えるフレームで構成されていた。

そしてエンジンブロックとタンクからは剥き出しのパイプが伸びて、機首の下の砲口へと繋がっている。砲口からは蛇の舌のように小さな火が踊っていた。先の業火はこの機体による『砲撃』だったのだと彼女は今更ながらに理解した。

そして極めつけに意味がわからないのが、この黄色の戦闘機の前面に取り付けられている正体不明の球体だ。

まるで小さな恒星を思わせるその光球は、黄色い戦闘機とほぼ同じサイズの大きさで進行方向を軸にゆっくりと回転している。

光球の前面には鳥の鉤爪を思わせる棘状の金属のパーツが三つ取り付けられており、そのパーツからは更に翼を思わせる複数のエネルギー

ギーフィールドが形成され、見る者に攻撃的な威圧感を与えていた。

火炎武装型R戦闘機R-9Sk2”DOMINIONS”^{ドミニオンズ}が投入されたアラスカにおけるバイド掃討戦。

22世紀からやってきた地球連合軍による初の地球上のバイド掃討作戦で、21世紀の地球は初めてバイドとその天敵たるR戦闘機の戦闘を目撃することになった。

六話 消毒

この世界にやってきた22世紀の地球軍——即ち第2太陽系防衛艦隊に所属するグリトニル突入部隊はこれからの方針を固めた後、まず最初に稼働可能なR戦闘機の全てを使って地球上を衛星軌道上から偵察させた。

この世界の人類とBETAとの戦闘にはなるべく関わらない——というかそんな余力がないので干渉は最小限にする予定だが、万が一にもオリジナルハイヴに落下したグリトニル以外にもバイドが存在するとすれば、それは彼らにとっても他人事ではない。

グリトニルは落下の際に複数のブロックが脱落して地球のいくつかの場所に落下しており、そのブロック内部にバイドが潜んでいる可能性も大いにあり得るのだ。

その為、グリトニル制圧部隊はまずグリトニルの再突入の前にこれらの落下したブロックの調査を行うことを決定した。

そしてバイドが残存していれば最優先で殲滅し、そうでなくても自分達の痕跡と技術の流出を防ぐため内部に残された機材や情報を徹底的に消去する。何しろ時間軸も歴史も違うこの地球は彼らの地球ではない。同じ地球人のよしみとして手助けする程度の義理はあっても義務はない。

だがなによりも22世紀の地球軍が、この21世紀の地球を同じ地球人だから無条件で助けるといふ無邪気な思考になれない最大の理由は、更に別の時間軸である26世紀の地球が異次元に廃棄したバイドによってもたらされた被害が余りにも大きすぎ、別の時間軸の地球という存在そのものに潜在的な猜疑心を植え付けられた事も大きな一因だろう。

極東に落下し現地勢力に一足先に確保されてしまったブロックもあるが、そのブロックからはバイド係数は検出されてなかったこともあり、そちらの対処は指揮官機でもあるエニグマが向かうことになった。

R-9Sk2”DOMINIONS”^{ドミニオンズ} コールサイン『フレイムタン』はそういった経緯もあってアラスカに落下したグリトニルのブロックの調査に回された機体だった。

そしてフレイムタンが現地に到着した時、機体のセンサーが捉えたのは異常増大したバイド係数と、落下したブロック内部で増殖したと思わしき有機型バイドに襲撃される現地勢力の部隊だった。

この種の有機型のバイドは戦闘力は低いが、侵食能力が極めて高い場合が多く、一刻も早く殲滅する必要がある。都合のいいことに彼の機体はそう言った『消毒』にうってつけの機体だった。

現地住民との接触や自機を目撃させることは極力避けろというオーダーがあつたが、この際無視するしかあるまい。どのみち最終的にはある程度は彼らとも歩調を合わせる必要があるし、R戦闘機の戦いを秘匿し続けることなど不可能なのだから。

故にフレイムタンは即座に装備された波動砲による低出力による波動砲撃を、現地部隊の最後の生き残りに襲いかからんとしていたバイドに汚染された人型機動兵器の群れへと浴びせかけた。

R-9Sk2に装備された波動砲——灼熱波動砲Ⅱは機体に搭載されたトカマク型核融合炉から超高熱のプラズマを引き出し、それを波動粒子集束技術の応用で集束させた上で波動粒子を付与して敵に向かって叩きつけるという、いわばR戦闘機用の超大型火炎放射器だ。

その性質上、純粋な弾速や射程は他の波動砲に一步譲ることになるが、射程範囲内の火力と殲滅力は他の波動砲の追隨を許さない。この波動砲を最大出力で放てば戦艦クラスのバイド汚染体ですら一撃で灰も残さず消滅させるほどであり、この機体がグリトニル内部への突入部隊へと抜擢されたのも、この機体の汚染体に対する殲滅力を評価されていることだ。

勿論、戦場が地球上ということと、現地の部隊の生き残りがいることも考えて、波動砲の出力は可能な限り落としていたが、それでもこの現地部隊の人型機動兵器をベースにしたバイド汚染体群には過剰と言つてもいい威力だった。

瞬く間に彼のコールサインを思わせる巨大な炎の舌に絡め取られた汚染人型機動兵器の群れは一瞬で熔解して、跡形も残さず消え去った。

ブロックの外に出ていた汚染体の群れを殲滅したフレイムタンは、改めてブロックを機体の各種センサーで走査する。

バイド係数、21.65。

予想以上に高い数値だ。このブロックには確か生体プラントがあったはず。それに加えて取り込んだ現地部隊を使って増殖したのか。

いずれにしてもやることは変わらない。

フレイムタンは波動砲をチャージしつつ、箱型の大型ブロックの周りを旋回して汚染体の生き残りがいないかどうかを探る。

その際、現地部隊の生き残りである人型機動兵器——確か戦術機——という呼称だったか——の存在に今更ながら意識を向けた。

警告の一つでもしておくべきか、とも思ったが許可のない現地勢力との接触は可能な限り避けろとも言われている。戦闘を目撃された今となつては今更だが、必要もないのに無駄にこちらの情報を与えるのもうまくない。念のためバイド係数を計測した所、幸運にも汚染は免れたようだ。ならば無理に始末する必要もない。

リーダーによると更に戦域の外側にも別の部隊が待機しているようだ、これも無視しても問題ないだろう。

結局彼はこれらの現地勢力の存在を無視して、バイドの殲滅を続行することに決めた。まともな判断力があるなら、彼らの戦力でR戦闘機とバイドの戦闘に関わりあおうとは思うまい。

それにあの機体のパイロットが仮に錯乱でもして攻撃を仕掛けてきても、穏便に無力化出来る自信がフレイムタンにはあった。

そこまで考えた所で灼熱波動砲Ⅱのチャージが完了した。他に敵影もバイド係数も検出されない。外部に出た敵は殲滅したと判断した彼は乗機を操り、ブロックに空いた大穴の前へと移動させる。

フレイムタンはこの一撃を大穴に撃ちこんでブロックを内側から焼き払うつもりだった。

頑丈なグリトニルのブロックの外殻は、低出力に抑えてあるとはいえ灼熱波動砲Ⅱの直撃にも耐えるだろう。しかし内部は別だ。

内側に数百万度のプラズマの塊を叩き込めばブロック内部に潜むバイドは勿論、ありとあらゆるグリトニルの機材や情報も焼き払えることができ、一石二鳥である。

フレイムタンが波動砲の照準を大穴に向けたその瞬間——機体のセンサーが捉えたバイド係数が劇的に膨れ上がった。



突如現れ、怪物にされた僚機達を辺り一帯ごと一瞬で焼き払ったその正体不明の戦闘機は、まるでこちらには興味がないと言わんばかりに悠然と『α』の周りを旋回していた。

あの機体は敵の生き残りを探しているのだ、とソフィーヤは直感で理解した。

徹底した容赦のなさ狩人のような慎重さ。あれに乗っているのは間違いなく人間であり、訓練された軍人だ。

同じ人間であるなら、こちらから呼びかけるといふ方法もあったが、彼女はどうしてもそれをする気にはならなかった。

もし、あの正体不明機がこちらに対して敵対的な存在だったら？という疑念が頭から離れなかったのだ。

とは言えあの機体がこちらに対して敵意を持っていたとしたら、最初の砲撃で自分は寄生された戦術機達共々『消毒』されていた筈だ。そういった意味でもこちらからコンタクトを取ろうとするのは無駄ではない。

だというのに。彼女はそれをする気には一切なれなかった。

今の彼女の心を占めるのは無力な小動物の様に息を潜め、あの怪物達の注意を引かない様にするべきだという思いだけだった。

音を立てないように脚部を使った歩行でその場を離れ、付近の森の中に機体を潜める。

先ほどまで雪化粧を施されていた白い森は今や、突然発生した火炎

地獄による余熱で雪が溶けて土砂降りの雨を被ったような有り様になっっている。

あの怪物達や正体不明機からすれば何の偽装にもならないだろうが、それでも彼女はそうした。するべきだと思った。

彼女がそうしたささやかな偽装を終えて、改めて視線を『α』に向けて例の正体不明機が大穴の前で動きを止めた所だった。

その正体不明機の機首に青い光が集束し、機首の下の砲口からは赤い炎が零れ出る。

間違いない。あの寄生戦術機の部隊を、一瞬で蒸発させたあの砲撃を放つつもりだ。

あれを『α』の内部に撃ちこめばあの触手の群れも一瞬で蒸し焼きだ。

少なくともそれで『α』の内部の正体不明の怪物達は無力化できる。

——その後は？

全く気が乗らないがやはりあの機体にこちらから呼びかけてみるべきか、そんな事を考えたその時だった。

正体不明の戦闘機から紅蓮の炎が吐き出されるよりも早く。

無数の触手が穴の中から飛び出して、その戦闘機へと躍りかかった。

「危ないっ！」

警告は間に合わないとわかっていながらも反射的にそう叫ぶ。

自分の部隊を一瞬で全滅に追いやった超高速の触手の雨。

彼女の位置は彼らが対峙する場からは1kmは離れていたが、それだけの距離が離れていてもその速度は人間の動体視力では残像しか捉えることができない。

数十の触手が一息で正体不明機を全周から包囲し、押しつぶさんとして——そしてその全てが焼きつくされた。

正体不明機の前方に位置する光球兵装。それが上部から凄まじい勢いで炎を吹いたかと思うと、その炎は球状にぐるりと正体不明機を包み込み、炎のバリアを形成したのだ。

無数の触手はただの一本たりとて、正体不明機を囲う炎の壁を抜け

ることができず、汽笛じみた音——恐らくは触手の体液が煮沸して蒸気になる音だ——を上げながら炭化していく。

だが敵もさるもの。触手による直接攻撃が通用しないとわかると、触手を使って『α』の装甲板の一部を引き剥がしそれを不明機に投擲した。

その装甲板は余りにも大質量故に、如何に高温の炎の壁と言えど一瞬で溶解させるのは難しい。

流石の正体不明機もこれが当たればダメージを受けることになるだろう。その為、不明機はその攻撃に対して回避を選択したようだ。ようだ。という言い方になったのはソフィーヤ自体確信が持てなかったためでもある。

なぜなら標的にされた戦闘機はまるでその場からコマ落としの様に消失したからだ。

「……………」

思わずその光景を見ていたソフィーヤが呆然とつぶやく。触手の群れも獲物を見失ったのか混乱したかのように蠢いている。

あの戦闘機は一体どこに行ったのか。

そう考えたソフィーヤの戦術機の音響センサーが僅かな空気の振動音を拾った。

その音の出処は——機体の直上だ。

思わず上空を見上げたソフィーヤの視界。おおよそ自機の上空200m程の上空に、光球を従えた正体不明の戦闘機は何事もなかったように、エンジンから僅かな重低音を出しながら浮遊していた。

恐らくは残像すら捉えることもできない速度で投擲された装甲板を回避して、あの場所に離脱したということか。

先ほどまで居た『α』の前からここまで1kmは離れている。

この距離を正体不明機は、視認すら不可能な速度で一瞬で移動したのだ。

続いて正体不明機が反撃を開始する。

その機首の下の砲口に付いた火が膨れ上がり、凄まじい瀑布と化して無数の触手を発生させている『α』に向かって行く。

巨大な炎の龍と化したその砲撃は『α』の側面部へと直撃。炎で出来たその身を四散させて弾け飛び、空母に匹敵するサイズの『α』そのものを飲み込んだ。

吹雪の中に墓標のように直立していた『α』は、地獄の業火に包まれた棺桶と化す。

『α』が生理的な嫌悪感を感じずにはいられないほどの、甲高い悲鳴を上げる。いや正確には『α』の内部に潜む何か悲鳴を上げているのだ。それは生物の悲鳴というには余りにも禍々しい声だった。

信じがたいことに『α』そのものはあの業火の一撃を受けて尚、原型を留めているが、『α』の内部に潜む何かにとっては耐え難い一撃だったようで、灼熱に包まれた『α』から一刻も早く脱出しようとする、無数の触手を大穴から吐き出して『本体』を引きずり出そうとする。

だが火炎砲撃を撃ち込んだ正体不明機がそれを見逃すはずもない。

正体不明機の前面に装備された光球が太陽の様に一際大きく輝くと、小規模な火炎弾の掃射を開始する。

二重の螺旋状の軌道を描きながら直進するその火炎弾の威力は、先程の砲撃には劣るが代わりに連射速度と弾速が比べ物にならない程早い。

先の一撃を大砲とするならば、これはさしずめ機銃といったところか。

その火炎の螺旋弾は熱に耐えかねて外に出ようとする触手を次々と焼き切っていく。焼き切られた触手は地面に落ちても尚、炎が消えず数秒ほどのうち回った後、全身に火が周り炭化していった。

最早怪物の命は風前の灯と思われたその時だった。穴の内部からそれまでの触手よりも更に太い、直径20メートルを越える巨大な触手が飛び出した。

当然それも瞬く間に燃え始めるが、完全に燃え尽きるよりも早く触手の先端が開いてそこから1機の寄生戦術機が飛び出すと、正体不明機には目もくれず、肉腫に覆われた跳躍ユニットを全開にしてその場からの脱出を図る。

それと同時に、ソフィーナ機の直上に位置していた正体不明機が再び掻き消える。

今度は彼女にも知覚できた。

正体不明機は高速で移動したのだ。その速度は恐らくは極音速を軽く越えるだろう。

そして正体不明機が速度を落とし、視認できるようになったのは戦域を脱出しようと全力で匍匐飛行している寄生戦術機の眼前だった。

寄生戦術機は突然現れた敵機に対して速度を落とすこともなく、手にした突撃銃による攻撃を試みた。36mmと120mmの砲弾が立て続けに正体不明機に向かって放たれる。

しかし正体不明機はその攻撃を前にして回避行動を取らなかった。否、取る必要がなかったのだ。

放たれた砲弾の雨は、全て正体不明機の正面に位置する光球に飲み込まれてしまったのだから。

続いて正体不明機の反撃。

それはその戦闘を見ていたソフィーナの予想を超える攻撃方法だった。

正体不明機は機体の前面に装備した光球を射出し、寄生戦術機に『体当たり』させたのだ。

そしてその攻撃の結果もまた彼女の予想を超えるものだった。

光球は寄生戦術機に触れるやいなや、一切の物質的な抵抗などないかのように寄生戦術機を、まるで空間ごとえぐり取ったように消滅させてしまったのだ。

いや、それは消滅させたというよりは『喰った』ようにソフィーナには見えた。

射出された光球は寄生戦術機を飲み込んだ後、ぐるりと旋回してまるで主人に従う猟犬のように母機である正体不明機の前面に再び装着される。

そして敵機を消滅させた正体不明機はその機首を旋回させ、未だに炎上を続ける『α』へと向けた。

またもや機首に集束する青い光の粒子。

燃え盛る『α』からは更に無数の触手が飛び出し、それを地面に突き刺して内部の本体を

穴から引き出そうとしている。

そしてついにそれが穴から姿を表した。

焼き焦げながらもそれ以上の速度で表皮を再生させる全長50mはあろうかという醜悪な肉塊。肉塊の表面にはヒビ割れのような亀裂や穴が空いており、その下には肉塊とは全く別の何かが潜んでいるようにみえた。それはまるで肉によって出来た巨大な繭だった。一体この繭から何が孵化するのかソフィーナとしては考えたくもない。

だがそれが穴の外に脱出することはついぞ叶わなかった。

それが姿を表すと同時に正体不明機の紅蓮の砲撃が、大穴から出ようとすると肉塊に向けて叩きつけられたのだ。

付近の大気を燃え上がらせ、余波で付近の降り積もった雪を気化させながら、一直線に放たれた業火の鉄槌。

それは『α』の大穴から脱出しようとしていた触手の本体と思わしき巨大な肉塊に直撃し、炭化させながら穴の内部へと叩き返す。

再び怪物がその体を開いた無数の亀裂から、次々と悲痛な甲高い悲鳴を上げる。

先の『α』の外殻に遮られた遠距離からの砲撃と違って、今度の一撃は完全に肉塊を捉えて消し飛ばし、更にその勢いは衰えることはなく、『α』の最深部へと着弾した。

炎の炸裂音が怪物の悲鳴を上書きし、衝撃が大地を揺らす。永久凍土に覆われたアラスカの大地が熱波で解凍され、そのまま燃え上がって炭化を通り越してガラス化する。

『α』から1kmは離れているソフィーヤの機体の装甲の表面温度も、砲撃の余熱で異常な高温になり、彼女は慌てて機体を更に後退させた。

彼女の目にはもはや怪物を完全に仕留めたように見えたが、正体不明機はそれでも尚、慎重だった。

再び青い光を機首に集束させ、三度目の砲撃の準備を行いはじめたのだ。

今度は至近距離で火炎砲撃を内部に叩きこむためか、炎上し未だ炎を吐き出し続ける『α』の大穴の手前に移動。

あの地点は溶鉱炉のような温度になっているはずだが、正体不明機は気にした様子もない。

そして駄目押しとばかりに三度目の火炎放射を穴の中へと撃ち込んだ。

もはや今度は悲鳴すらなかった。

その代わりに今まで『α』そのものが、内部で荒れ狂う業火に耐え切れなくなつたのか、水漏れした壺のように構造材の隙間から炎を吐き出しはじめて、巨大な篝火と化す。

あらゆる存在を焼きつくす焦熱地獄となつた『α』を見て、ようやく正体不明機は満足したらしい。

ゆつくりと高度を取ると、標的の取りこぼしがないか確認するかのようにつ近一帯の上空を旋回。

正体不明機は数回に渡つて戦域を旋回し、そこでやつと敵の殲滅を確信したようで索敵を打ち切つた。そして機体の後部から青いスラスト光を爆発させるとソニックブームをまき散らして一瞬で離脱していく。

光球を従えた黄色い正体不明機が残したスラスト光の青い残光が、打ち上げられたロケットのように垂直に遙か宇宙に向かって伸びていった。

「なんだつたの……あれは……」

唯一人取り残されたソフイーヤが呆然とその光の軌跡を見て呟く。

それが地球人が初めて捉えたR戦闘機の戦闘だった。

そして彼女は気がついていなかった。

この戦場の生き残りは彼女だけではなかったということに。

ここより更に5 kmほど離れた場所には——『α』を確保するべくやってきた米軍のステルス戦闘機ラプターの一部隊が存在していたことに。

『α』を守るソ連軍部隊を秘密裏に排除するべくやってきた彼らは襲撃準備を整え、行動開始までカウントダウン寸前まで来ていた。

しかし行動を開始する直前、『α』で異常が発生した。

部隊の隊長は反射的にカウントダウンを中断し、その場で様子を見ることにしたのだ。

それが彼らの命を救った。もしこの混乱に乗じてソ連の戦術機部隊に襲撃をかけていたら彼らも『α』からの攻撃を受けて、寄生戦術機の仲間入りを果たしていた事だろう。

そして沈黙を保ち続けていた結果として、『α』の内部に潜む謎の生命体と正体不明機の戦闘機との戦闘記録を入手することができた。

しかし唯一生き残ったソ連の戦術機はこちらの存在に最後まで気がついてないようだったが、あの正体不明機はラプターの存在に感じているようにだ。

なぜなら『α』を火達磨にした後、数度に渡ってこの戦域を巡回した際、ラプター達が潜む森の上空を観察するかのようにゆつくりと横切ったのだ。これは偶然とは思えない。

ともかく、当初の想定とは全く違う流れになっている。

この状況下で丸焼けとなった『α』をあの生き残ったソ連の戦術機を排除してまで、無理に確保することに意味は見いだせない。

それよりもこのデータを一刻も早く米軍に持ち帰ることが先決だ。

彼らは現れた時と同様に、音もなく後退しその姿を消した。

七話 接触

厚木市の付近に落下したファイアーボールから剥離した巨大構造物。

幸いにも避難が進んでいたことと、市街の外れに墜落したことによって被害は予想以上に小さなものだった。

正確に言えば小さすぎた。

巨大構造物——アラスカのそれにならって『Y』と呼ばれるその大型ブロック（当初はβというコードネームになるはずだったが、BETA繋がりややこしいということなのでやめにした）は、付近の住民の証言によると地上への激突の瞬間、突如速度を落として緩やかに着地したとのことらしい。

これはつまりこの巨大構造物の中の機能がまだ生きていることを意味する。

その為、『Y』を確保するべく派遣された国連軍所属の特殊戦術機部隊A—01もまたあらゆる状態に備えるため、フル武装で向かうことになった。

そして現場に到着したA—01が見たものは無人の市街地にまるで場違いな高層ビルのように横たわる巨大な『Y』の姿だった。

直線の装甲板で構成され、所々に付いた小さなライトを発光させる『Y』は空母程のサイズがあり、それはどこか戦術機の装甲を始めとする人類の兵器のそれを連想させた。

そして『Y』近づくに連れてA—01の隊員は誰もがこれはBETA由来の物ではなく、人間が———というか地球人が作ったものだと確信を抱いた。

なぜなら『Y』の装甲のあちこちに様々な英数字が書かれていたからだ。

それらの英数字の大半は何らかの規格を表すもので、読むことはできても意味は分からない。

しかしそんな中でも一際わかりやすい単語が幾つかあった。

” Earth Allied Armed Forces ”

直訳すると地球連合軍といったところか。

しかし地球上にそんな組織の名前の軍隊はいない。

これに近いのは国連軍だが、だからと言って軍隊の表記を変えるような真似はしないだろう。

となればこれを落とす相手は、国連軍でも米軍でも日本帝国軍でもない全くの別勢力となる。

それを理解したA―01の隊長である速瀬水月は、展開する部隊員達に当初予定していた対BETA戦の陣形と警戒ではなく、対人戦のそれに切り替えるように指示を出した。

もしこの『Y』の中から敵が出てくるとしたらそれは、BETAではなく人間だろうと思ったからだ。

そんな彼女の意を組んだのかA―01の隊員達は異議も唱えることもなく、即座にそれに従う。

対人用の陣形を取り、市街地のビルを遮蔽に使いながらA―01はゆっくりと慎重に『Y』に近づいていった。

そして何の迎撃もなく『Y』の元へと辿りつく。

そのことにほっとしつつもA―10の突撃前衛である白銀武は思わず隊長に話しかけた。

「速瀬中尉……何の迎撃もありませんでしたね」

「静かなのは今だけかもね。中に入ったらBETAかラプターの大群がお出迎えって可能性もあるわよ」

「いや、まさかラプターはないでしょう？　米軍だってこれには大混乱だったみたいですし」

「馬鹿ね。要は何が飛び出してきてもいいように構えてなさいってこと！　……『Y』の東側の側面を見なさい。あそこに戦術機も通れる穴が空いているのが見えるわね？　そんなわけで名誉ある一番槍はあなたに任せるわ」

「うわお……藪蛇でした？」

「どのみちあなたに任せる気だったんだから、そんなこと言わないのエース君。本当は私が見てみたい所だけど立場やむなくあなたに譲るんだからね。……それにあなたなら不測の事態が起きてもどう

にかしそうだし。まず内部を軽く見てすぐ戻ってくるだけでいいから。茜、彩峰！ 白銀に入り口まで付いて行って、何かあったら支援射撃。白銀も敵が出てきたら即座に離脱して！ いいわね!」
『ラジャー!』

指名された隊員達が返事をする。そしてまず白銀機が。そして彼の支援を任された2機が彼に続いて東の側面に空いた大穴の前へと飛ぶ。

(さて、鬼が出るか蛇が出るか……。頼むぜ……。BETAよりは紳士であってくれよ……)

夕月との会話とここに来るまでに見た『Y』に刻まれた数々の英単語や数字で、白銀武はこれが未来の——或いは並行世界の地球のものだとほぼ確信していた。

後はこれの持ち主がこちらと話し合いに応じる姿勢を持っているかどうかだ。

恐らく『Y』、そしてその本体であるファイアーボールを作り上げた未来の地球は、現在の地球とは比べ物にならない技術力を持っているはずだ。

それが現在の地球に敵対したらBETA以上の脅威になりえると夕月博士は言っていた。

だが逆に友好的に接して彼らの技術を取り込むことが出来れば、BETAなど敵ではなくなるかも。

もしこの『Y』の内部に生存者がいても白銀は余程のことがない限り穏便に接して、できれば相手を捕虜として確保するつもりだった。

大穴の内部は闇に包まれている。

そこに踏み込んだ白銀機は突撃銃や戦術機に備え付けてあった指向性ライトを全開にして、視界を確保した。

そして絶句する。

円形に照らされた光の中には戦術機に勝るとも劣らぬサイズの人型機動兵器が待ち構えていたからだ。

反射的に突撃銃を発砲しそうになるも、違和感に気付きなんとか堪える。

「白銀！ これって……」

「ああ、わかっている、茜達も撃つなよ！」

白銀が照らしたその大型人型兵器の存在は、当然白銀の背後でバツクアップに当たっている二人も見ている。

だがその二人もまた発砲しなかった所を見ると、彼女達もこの兵器の違和感に気づいたようだ。

「この機体……整備途中なのか？ ハンガーに固定されてる……」

その兵器は大型の整備ハンガーに取り付けられて、装甲の一部も外されていた。

少なくとも今すぐ動き出して襲い掛かってくる様子はなさそうだ。

白銀は更にその人型兵器を観察するために、ゆっくりと回りこむようにして近づいていく。

この兵器は形状こそ人型だが、よく見ると戦術機とは全く違う作りをしている。色は緑。

まずサイズからして二回り、いや三回りも大きい上に、装甲が随分と厚い。まるで一世代型の戦術機のようなのだ。

しかし戦術機にあるはずの跳躍ユニットが両腰についていない。最初は取り外されたのかと思ったが違う。最初からついていないのだ。そしてその代わりに背中に可動式の推進システムを背負っている。

恐らくこれが跳躍ユニットの機能を持っているのだろう。

更にその上、首筋から背中に向けてマントのように、まるで甲虫の羽を思わせる大型のパーツがついていた。

武は頭を悩ませたが、このパーツの意味するところは結局わからなかった。放熱板の一種だろうか？

とりあえずこの機体のことは一旦置いて、更に内部を確かめるため『Y』の奥に踏み込もうとしたその時だった。

闇に包まれていた『Y』の内部が突如として人工的な明るさに包まれる。死んでいたライトが復活したのだ。

「……なんだ!？」

「ちよつとこれ……!」

「白銀!？」

「待て！ お前達は態勢はそのまま待機していてくれ！」

突然灯りが付いたことは当然、入り口で待機している彼女たちにも理解できた。

だから白銀は彼女たちに動くなど伝えた。

いや正直彼女たちをどう使うか、と言ったところまで気が回らなかったと言ってもいい。

なぜなら——彼は白い人工灯で照らされた『γ』の内部に圧倒されてきたからだ。

この部屋はそれだけで二百万立方メートルはある広さがあった。そのまま『γ』の中身を全て繰り抜いたような広さである。広さだけでなく高さも200メートル近くはある。

隠れていた闇の中には無数のハンガーがあり、そこには先ほど白銀が見つけた巨大人型兵器が複数固定されていた。

最初に見たものが一番状態のよかった機体であったようで、それ以外の人型兵器は腕や足がなかったり、酷いものは胴体に大穴が開いている機体すらあった。

そしてそのハンガー隣にはこの人型兵器の携行兵器と思わしき、巨大な火炮やガトリング砲が置かれていた。明らかに人型兵器には大きさが合わないサイズのものも放置されており、まさに武器庫と言った具合だ。

それ以外にも重要物資が詰まっていそうな大型のコンテナがそこら中に散乱している。

戦闘があつたのか、それとも落下の衝撃で飛び散つたのかはわからない。

よく見ると散乱したコンテナの奥には真っ赤な戦闘機——巨大な盾を付けた戦闘機なんて見たこともないがキャノピーがある以上、戦闘機のはずだ——が転がっていた。

その戦闘機に近づいて観察した所、戦闘の痕跡が残っていた。この機体の盾は半壊し、エンジンや胴体には被弾の痕がある。

戦闘機のキャノピーは開放されて無人だったがコクピットシート

と思わしき物が見える。間違いなくこれらは人間が作り出し、人間が操る兵器なのだ。

白銀は興奮するあまり、思わず管制ユニットの内部でガッツポーズを取った。

「人はいない……でもすげえ……すげえぞこれ……！　ここは兵器の格納庫か何かだったのか？　どっちにしても宝の山だ……これを見たら夕子先生が飛び上がって喜ぶぞ」

「いや、ここにあるものは全て地球連合軍の所有物だ。勝手に持って行かれては困るんだがね」

だからこそ、聞きなれない男の声が自分の独り言に対して返事をしてきた時、白銀は臍腑を鷲掴みにされたような気分になった。

反射的に通信システムを見ると、誰かが自機の通信システムに介入している。

画像はなし。声だけだ。発信源すら不明になっている。

「……誰だ!？」

「地球連合軍、太陽系第2防衛艦隊所属、第1混成遊撃部隊——。いや、現時点ではグリトニル突入部隊になるのかな。

君の前に転がっている赤い戦闘機があるだろう？　そいつのパイロットさ」

立て板に水のようにその声はすらすらと答える。

だが言っていることは全くの意味不明な上に、結局名乗ってもいない。しかし質問に答えるつもりはあるらしい。

白銀は質問を変えた。

「どんなところ?」

「この落下したD-3ブロックの管制室。その兵器の凶体じゃ入ってこれない場所だ。ところでこちらも君の所属を聞いてもいいかね?」

逆に問い返されて白銀は言葉に詰まる。果たしてどこまで自分の事を話してもいいものだろうか?

反射的に通信システムを見やる。そこにはA-01の隊員全ての顔が表示されている。隊長である速瀬水月の顔もだ。今までのやりとりは、通信システムを通じて全てA-01全員が聞いている。

全員が未知の勢力の人員との接触到に固唾を飲んで見守っていた。速瀬は無言で白銀に対してゆっくりと頷いた。自分達の所属を明かしていいというサインだ。上官から許可を得た白銀はゆっくりと自分達の所属を喋り始めた。

「自分は——国連軍横浜基地の特殊任務部隊A—01に所属する白銀武少尉であります。厚木市に落下したこの正体不明の人工物を調査するために派遣されてきました。」

その言葉に、相手はしばらく沈黙した。

不安になった白銀が思わず問い返す。

「ちよつと？ 聞こえてますか？」

今度は返答はすぐに帰ってきた。

「ああ、聞こえているとも。まさか例の基地の部隊とはな。確かにここに一番近いが……。いやはや運がいいのか悪いのか」

「貴方には今回の事件で聞きたいことがあります。……悪いようにはしませんので、こちらの事情聴取を受けていただけませんか？」

白銀はあくまで下手に出る。相手は生身のようにだが、この『γ』の管制室に籠っているようなので、威圧的に出れば何がどうなるかわからないからだ。

「構わないとも。こちらもいろいろ事情を説明する気だったからな。……痛つ。全くエニグマも怪我人にメッセンジャーになってこい、とは乱暴なやり方をする」

「怪我をしているんですか？ でしたら尚更——」

「いや、結構。大した怪我ではない。それよりも君たちの上官は横浜の魔女かな？」

「——っ!？」

いきなり飛び出してきた自分の上官の二つ名に白銀は表情を変えた。

（なんで夕子先生の渾名を——!？ ていうか今回の件は俺絡みじゃなくて先生絡みなのかよ!？）

驚愕する白銀を置き去りにして、淡々と男の声は続く。

「その様子だと正解のようだな。どんな方法でもいい。香月夕呼と話

がしたい。なんとかして話が出るようにしてくれ。その話し合いの結果次第では——君たちが『γ』と呼ぶこのグリトニルD—3ブロックを君たちに進呈してあげてもいい。

だがもし力づくで来るなら私はこのD—3ブロックの迎撃設備を全て起動させて、管制室に立て籠もることになる。こんな風に。

この場合、『γ』はBETAのハイヴより厄介なことになると忠告させてもらおう」

一方的に条件を喋ると、男の声は沈黙した。

そして巨大な格納庫の壁の一部が開き、そこから巨大な砲塔が出て、こちらにその砲身を向けてくる。あれが彼の言う迎撃設備だろう。

「警告しておくが、下手な発砲は控えることだ。お互い碌な事にならないのが目に見えている。そんなわけでよろしく頼んだ、白銀少尉」
そう言つて正体不明の通信がブツリと途切れる。

白銀は恐る恐る別ウインドウに映るA—01の隊長である速瀬に目を向けたが、予想通り爆発寸前に見えた。

「上等じゃない……！ 現場指揮官の私を通り越して香月副司令官と話させるだあ？ いい度胸してんじゃないの！」

「ちよ、ちよつと中尉、ここは冷静に……！」

「わかつてるわよ！ 今横浜基地に回線を繋げて事情を説明してる。暗号度の高い通信にしないといけないからちよつと時間がかかるわ。あんたはそれまでそこで待機してなさい！」

「りよ、了解」

そんなA—01のやり取りを耳にしながら——当然これも秘匿通信だが勝手にシステムに介入して盗み聞きしているのだ——R—9DP3”KENROKUE”のパイロットであり、『マルト』というコールサインで呼ばれていた男は管制室の通信システムで仲間に話しかけた。

「これでよかったのか？ エニグマ」

『問題ない。細工は上々とまではいかんが、取り敢えず彼らは香月博士とコンタクトを取っているのが確認できた』

「お得意のハッキングで盗聴しているのか。悪趣味だな。コールサインをピーピングトムにでも改名したらどうだ？」

『俺は別に覗きはしない。それに盗み聴きはお前もしているから同罪だろう』

エニグマの言うとおり、マルトーは現在A―01も含むこの付近で行われている通信を全て把握している。

だが実際にA―01の通信システムに介入を行い、その内容を管制室にも聞こえるようにしているのは、このグリトニルド―3ブロック、現地の勢力が『γ』と呼称するブロックの遙か上空で待機しているエニグマだ。

エニグマの乗機 R―9 ER 2”

“アンチエイズド・サイレンス UNCHAINED SILENCE” は電子戦機と早期警戒機の機能を併せ持ち、更に威力偵察も可能な戦闘力をも有する特殊なR戦闘機だ。最前線で友軍への電子支援を行い、場合によっては直接戦闘もこなすこの機体は、パイロットとしての才能に加えて、情報処理と指揮能力に優れた地球軍でも極めて特殊なパイロットしか搭乗することができない。

R―9 ER 2の電子戦能力を駆使すれば一世紀も前の旧世代のセンサーやレーダーから身を隠すことも造作もないし、彼らの通信システムを盗聴するのもさほど難しいことではない。

マルトーは悪びれた様子のない同僚に溜息をついた。

「それにしても人使いが荒い指揮官殿だ。怪我人に交渉役を努めてこいとはな」

マルトーは通信システムに向けて皮肉を言った。彼は被弾し、墜落した時の衝撃で肋骨に罅が入ったのだ。その気になればRに乗れなくもないが、R戦闘機のザイオング慣性制御システムも完全ではない。

巡航速度でならともかく、戦闘速度で高速機動を行うと、僅かだがどうしても完全に制御できないGが発生し、パイロットにもある程度負担が掛かる。パイロット自身も高性能な耐Gスーツを着ているが、それも限度がある。肋骨に罅が入った状態で戦闘機動を行えば、今度

こそ肋骨が折れて肺に突き刺さってもおかしくはない。

とはいえ彼らの医療技術からすれば、この程度の負傷はそれほど重傷でもないのも確かだ。今は医療キットで処置してあるが、彼の母艦で然るべき処置を受ければ数日で治る怪我でもある。

『今の状況でお前を救出するとなるとどうしても荒事になる。そうになった時の準備はしているが、交渉する前から険悪な関係になるのは避けたいのでな』

「R-9ER2のジャミングを使えば連中に気付かれずに、俺一人連れ出すことなど訳ないだろうに」

『まあそれぐらいならできる。それで？ このD-3ブロックに残った物資は丸ごと現地の連中にくれてやるわけか？ それとも俺がここの連中諸共焼き払うか？ その場合、折角手に入れられそうになつた例の魔女の繋がりが台無しになる。』

諦める。現地勢力の動きをコントロールするためにはどうしてもメッセンジャーと目に見える餌が必要だ』

「パイロットの仕事じゃない」

マルトーは食い下がった。

『元々ネゴシエーションが出来るような人物など制圧部隊にはいないさ。バイド相手の殲滅任務にそんなもの必要ないからな。そこにいる奴がやるしかない。』

となれば、乗機を破壊されて暇になりそうなパイロットをあてがうのが合理的とは思わんか。特に今は猫の手も借りたいほど人手不足だしな。

俺もこれから他のブロックの落下地点に出向かなければならない。大半のブロックはBETAとやらの勢力圏に落ちて、現在進行形で荒らされている。奴らは手当たり次第に物資を乱暴に持つて行くから装備を奪い返しても、ボロボロで再利用もできない有り様だ。

我々はブロックと装備の奪還は諦めて、BETAに対する技術の漏洩を防ぐ方向にシフトした。その為早急に動けるR戦闘機を使ってブロックと盗人達を、付近のハイヴごと焼き払わねばならないんでね』

だが口の達者なエニグマの前では無意味だった。

諦めたマルトーはそれでも最後の抵抗をする。

「負傷したパイロットを休養させるとかそういう考えはないのか」

『若い内は休むことよりも働く事を考えたまえ。俺だって休めるものなら休みたい。それにパイロットだというならバイド戦の戦術アドバイザーにもうつつつけだろう？ ……ところでハウンド・ドッグの件だが、奴はどうなった？』

マルトーは目を細めてグリトニルを破壊する為に共に突入した僚機——R—13A”^{ケルベロス}”CERBERUS”コールサイン『ハウンド・ドッグ』とはぐれた顛末を語った。

「わからん。運悪く通路で白兵戦特化のゲインズ3の群れに出くわしてな。更にそいつらを囷にして通路の中に建造中の戦艦がブースターを最大出力で吹かせてきた。」

戦艦の推進炎を回避する際、バウンド・ドックとは分断された上、フォースは俺を守るために推進炎の直撃を受けて消し飛んだ。それからは俺は生き残ったゲインズ3と相打ちになって、汚染を避けるために被弾した機体を汚染されてないこのD—3ブロックに移動させるので精一杯だった」

次元航行戦艦の推進炎の威力はR戦闘機どころかフォースにとっても侮れない。まず次元航行戦艦のエンジンからして数千万トンにも及ぶ質量を、一瞬にして加速させR戦闘機に追従可能な速度を叩き出すことが可能な出力を持っているのだ。

そんな次元航行戦艦の推進部から放たれる推進炎の余波は、それだけで次元航行戦艦の全長を上回る規模になり、波動砲に匹敵するエネルギーを秘めている。

それを利用してバイドに汚染された次元航行戦艦は、時として急激な方向転換や加速を行い、推進炎を武器とした『格闘戦』をR戦闘機に仕掛けてくることがある。ガイオング慣性制御の限界を越える為、生身の人間が乗っていれば絶対にできない戦法だがバイドならば可能だ。記録によれば限界を超えた急加速の負荷で、艦体を真っ二つにへし折りながらも襲いかかってきた戦艦もあるという。

この推進炎を使った汚染戦艦の戦術は、R戦闘機パイロット達からはその予想できない動きとその威力から畏怖をもって『魔剣』と呼ばれ恐れられていた。

その一方でこの推進炎を攻撃に利用するという発想を逆に取り込み、R戦闘機で実行する猛者もいるのだが。

『そうか。奴のIFFもバイタルサインは確認できない。予定されていたハウンドドッグによるデルタウェポンの発動も確認できなかった。撃墜されたか汚染されたと思うべきだろう』

「だろうな。その時の戦闘データをそちらに送る。解析はそつちでしてくれ」

『了解』

しばし会話が止まり、その場に流れるのはエニグマが流してくるA—10と横浜基地とのやり取りだけになる。

横浜基地との秘匿回線を使って、『Y』と香月夕呼が直接会話出来るようになったのはこれより10分後のことだった。

八話 交渉

「国連軍横浜基地の副司令官を務めている香月夕呼です。はじめまして……は不要かしら？　どうもそちらは私のことをよくご存知みたいですからね」

『γ』と通信を繋いだ香月夕呼は開口一番、真っ先に皮肉を口にした。相手の思考回路はまだ読めないが、いきなりこちらを指定してくるような相手だ。これぐらいの皮肉を言われるのは折込済みだろう。

更に言うなら相手は自分の姿も晒していない。画像ウインドウには砂嵐しか写っておらずこの通信は音声のみのやりとりだ。そんな失礼な相手に礼を尽くしても意味があるとは思えない。

予想通り相手もそんな彼女の態度は気を悪くした様子もなく、答えてくる。

『いいや、確かにはじめましてだ。こちらも貴女の事は噂程度しか知らないからな』

(どんな噂なんだか……)

夕呼は内心をそう聞きたくなるのを堪えた。というよりは来たばかりのはずの来訪者達がなぜ自分の事を知っているのか。そちらのほうに気になるが、まずはそれよりも聞きたいことがある。

「私の性格は理解していらっしやるようなので、単刀直入にお尋ねしますわ。貴方達はいったい何処からやって来たのです？　いえ、もつとわかりやすくいうのならどの時代から来たのです？」

この機密通信を行う為に用意された専用の部屋には彼女と、彼女の上司であるパウル・ラダビノツド准将しかいない。

余りにもストレートなその質問にカメラの死角で待機している准将は、顔を引きつらせていたが知ったことではない。

だが、『γ』の持ち主もその質問に対して含むところがあったのだろう。小さく感心するような声を出した。

『流石は地球圏一の鋭才と言われるだけはある。我々の素性をもう予想していたか』

「あれだけのヒントがあつてむしろわからないほうがおかしいと思

ますが？ あとはこの現実離れた答えを受け入れられるかどうかというだけです」

『話が早くて助かる。しかしその前に一つだけ話しておきたい。我々は確かに貴女達からすれば未来の人間になるが、この時間軸の延長上にある未来からやってきたものではないということだ』

「……なんですって」

思いも寄らない言葉に夕呼は眉を潜めた。その場合、前提条件がずれてくる。彼らが自分達の世界の未来からやってきたのなら、BETAによる人類敗北の危機はなんとしても避けたいはずだ。その為協調することが出来ると思っていたのだが、そうではないとすると彼らとしてはこの世界の未来がどうなっても問題ないと判断する可能性が出てくる。

かつて自分がこの世界を救う為に、白銀武が居た世界に彼の持つ破壊の因果を放り込んだように。

『少なくとも我々の歴史には、20世紀にBETAなる異星起源生物による侵略行為を受けた記録はない。代わりにもう1000年程先の未来に全く別の侵略者から攻撃を受ける事になった』

1000年後。

香月夕呼はその単語に関心を抱いた。つまり彼らは少なくとも1000年は先の未来人ということか。だが一旦それを飲み込み、続けて聞く。

「その侵略者の名前は？」

『バイド。我々はそう呼んでいる』

「……まさか、貴方方と同時に転移してきて、地表に落下した巨大な人工衛星。もしかしてあれはそのバイドに乗っ取られていたのですか？」

『……本当に話が早くて助かる。1を聞いて10を知るとはまさに貴女の事を指すのだろうか。』

如何にも、あれはバイドに汚染されている。バイドは22世紀の地球軍が作り出した宇宙軍事要塞グリトニル、君たちがいうところのファイアーボールを奪い、兵力を地球に空間転移させて攻撃するつも

りだったようだ。

しかし我々との戦闘の結果、次元カタパルトによる空間転移は失敗どころか暴走し、時空の壁を突き破ってこの時代に跳ばされた。――
――まあ大雑把に言えばこんな経緯だ』

「つまり我々の世界には純粹な事故で来たと言いたいのですか？」

『そうだ。お騒がせして悪いが、我々も君たちに敵意があるわけではない。グリトニルを占領するバイドを殲滅次第、すぐさま我々もこの世界から去るつもりだ』

「その貴方方の敵であるバイドについてお聞きしても？」

『勿論答えよう。先ほど我々は君たちに敵意はないと答えたが、バイドは別だ。あれは無差別に付近の物を攻撃し、あらゆるものを侵食同化する高次元エネルギー生命体。規模は違うが在り方としてはBE TAに近い。』

君たちが余計な手出しをして、状況を悪化させないように最初からバイドの情報は渡すつもりだった。

それに関しては少々長くなるが、我々の戦いの歴史もかいつまんで話さなければならぬな』

「……長話になっても構いませんわ。時間はとつてあります」

『いや、実のところ我々と君たちに残された時間は少ない。それもバイドの性質によるものだが……それも含めて説明していくとしよう。』

事の始まりは西暦にして2120年。地球を出発した人類初の長距離ワープシステムを搭載した異層次元探査艇フォアランナが、異層次元と呼ばれるワープ空間の探索において偶然バイドの破片を入手し帰還したことに始まる――』

そうして未来の戦いの歴史が語られた。



全てを聞き終えた香月夕呼は頭痛を堪えながら、簡潔に彼らの話をまとめて確認した。

「つまり――貴方方22世紀の地球は、26世紀の人類が作り上げ、

手に負えなくなり異次元に投棄された筈の生物兵器バイドの攻撃を受け、そこで終わりのない戦いを繰り広げている。そしてその戦争の最中に、バイドに汚染された地球の軍事要塞が転移事故で、この時代の地球に転移してきた。そう認識してよろしいのですか？」

こうして口に出すと余りの馬鹿馬鹿しさに担がれているような気分になる。相手が単なる敵対的な異星人ならまだしも、過去と未来に別れての殺し合いとは、国や民族の違いで争っているような連中が可愛く見える程の愚かしさだ。

だがその愚かしさ、或いはその狂気に比例するかのようには彼らの技術力は凄まじいものがある。

遺伝子工学や生物物理学、果ては21世紀では存在すら認知されていない魔導力学まで取り入れた星系内生態系破壊用兵器を作り出す26世紀の技術など、如何に天才といえど21世紀の人間である香月夕呼には想像するのも難しい。

が、だからこそ数世紀先の兵器と渡り合っている彼ら22世紀の地球軍の異常さもまた際立っている。

狂気と戦闘力は相関関係があるのだろうか、一度彼女は調べてみたくなつたほどだ。

相手もそれは察したのだろう。苦笑しながら応じてきた。

「そういうことになる。我らのことながら馬鹿げた話だ。君たちのように侵略者が純粋な異星人相手ならまだ憎むべき相手がいるのだが、相手が未来の人類では振り上げた拳をどこに振り下ろせばいいのかわらぬ」

画面の砂嵐の向こう側で相手は肩をすくめる気配をみせた。

「それでも拳を振り下ろさないという選択肢は決してないがな」

そして続ける。

「もしかしたら君たちの戦うBETAもバイドのように、どこぞの並行世界の地球産の兵器という可能性もあるかもしれない」

「ご冗談を。それにもし例えそうだとしても我々のすべきことに変わりはありません」

「まあ、その点については安心していい。我々もBETAのサンプル

をいくつか採取して調べたが、BETAはバイドとは完全に無関係の存在だ。

解析結果からの推測によると、BETAというのは星から星へと渡り歩き、資源を食いつくす宇宙規模の蝗^{イナ}か、シロアリののような存在だ。物資を宇宙に向けて射出している所から考えると、彼らの母星のようなものが存在すると考えられるが、これが自然発生したものなのか、何者かに人為的に作られたかまでは詳しく調べる程の時間もない。

しかし先ほど言ったように無関係だからこそ、より厄介なことになる可能性がある」

「バイドの汚染特性ですか……」

香月夕呼はうんざりしたように呟いた。

先ほど彼の口を通して聞いた、バイドの性質。

有機無機どころか空間や次元すら侵食汚染し、目をつけた文明をカローリ^{ローリー}として取り込むだけでなく、その知性や技術まで奪い取り自己進化を続ける怪物。それがバイドだ。

そして高レベルのバイド体は、自力で自由に異層次元へと移動できる能力を持ち、通常兵器では倒すことはおろか、同じ空間で戦うことすらできない。

そしてその本質はバイド粒子と呼ばれる素粒子であり、バイド粒子に汚染されたバイド体を物理的に破壊することは出来ても、バイドそのものを滅ぼすことは極めて難しい。

これを解決するために開発されたのが、22世紀の地球が開発した次元戦闘機、R-TYPEシリーズだ。

汎用性を求め、宇宙作業艇をベースに開発されたこの戦闘機は異層次元探査艇フォアランナが持ち帰ってきたバイドの欠片から得られたオーバーテクノロジーをつぎ込み、何十年という年月をかけて数少ないバイドと互角に戦える兵器として完成した。

全てを侵食するバイド粒子と対を成し、バイド粒子を含めたあらゆる存在に浸透、破壊する波動粒子を集束させて撃ちだす波動砲と、高純度のバイド体を培養し、エネルギー生命体としてコントロールした球状型次元兵装フォースを装備した超兵器。

これに加えてR戦闘機は異層次元航行システムを標準で装備しており、例えばバイドが異層次元の奥深くに身を潜めても独力で次元の壁をつき破り異層次元へと突入して、バイドに攻撃を仕掛けることができるのだ。

戦闘機は地球上での全天候、全環境展開能力を有しているが、R戦闘機はそれを更に越える全次元、全空間展開制圧能力とすべき性能を有している。

物理法則が異なる異層次元においても行動可能な上に、通常の宇宙空間は勿論、地球型惑星や木星型ガス惑星のような高密度の大気圏内や海中での戦闘、果てはブラックホールのシュヴァルツシルト面付近での高重力下での戦闘や、恒星上空での戦闘にすら対応可能という万能性だ。

詳細なスペックは流石に教えてはもらえなかったが、それでも香月夕呼にはわかる。

このR戦闘機が一機あれば一ヶ月で地球上のハイヴを殲滅できるということが。

22世紀の地球はそんなものを量産し——そしてその上でバイドに大苦戦を強いられているのだ。

はつきり言って彼らもバイドもこの地球からすれば厄介者以外の何者でもない。下手に技術を奪おうにも、そう簡単にはいかないだろうし、多少彼らの技術を盗んだところでバイドに対抗出来るとはとも思えない。

そういった意味あいもあって彼女はうんざりしたように言ったのだが、相手はそれを無視した。

「その通り。現在もグリトニルの落下地点であるカシユガルのバイド係数の探知数は増大の一途を辿っている。間違いなくBETAがバイドに汚染されている証拠だ。

だが数は多いがバイド係数そのものは最低ランクなのが唯一の救いだな。これならば汚染能力も低く、君たちの通常兵器でも対抗できるし、ナパーム辺りで徹底的に焼き払うだけでも汚染拡大は防ぐことができる。現在グリトニル付近のBETAの間引きも計画中だ。

しかし時間をかければかけるほど、より強力なバイドが生まれることになるだろう。単独で異次元航行が行えるB級以上のバイドが発生したら、もう君たちの手には負えなくなる」

溜息を付きながら夕呼は皮肉を返した。

「絶望的な情報、どうもありがとうございます。それで我々に出来ることは何があります？ 遺書でも書くべきかしら？」

「流石に君たちにバイドの相手をしてくれとは言わない。それは我々の仕事だ。だが我々の行動の黙認と支援を頼みたい」

「へえ……？ それはつまり貴方はバイド殲滅を諦めていないと？」

「我々は戦力の再編成を行いながら、技術流出を避けるために落下したグリトニルの破片に残された情報を消去している。

ここはすでに君たちが来たため焼き払うことはできなかったが、アラスカに落ちた破片からはバイド係数が確認された上に、確保に動いた現地の勢力が汚染されていた為、こちらで消毒した。

そしてBETAの勢力圏内に落ちたいくつかのグリトニルの破片についても、現在進行形で物理面での消去を行っている。

特にそちらのほうはBETAに確保されつつあったので、情報を奪われないように破片に群がっていたBETAのみならず、破片周辺のBETAのハイヴも含めて処理をしているところだ」

BETAのハイヴも含めて処理。

その余りにも聞き捨てならない言葉に香月夕呼は思わず席から立ち上がって声を荒げた。

「つまり貴方は……現在ハイヴを攻撃しているということですか?!」

彼らの部隊の規模を考えると余りにも無謀な行為としか思えなかったが、彼らからすればそうでもないようだ。

画面の向こう側の人物は何のこともなしに、ああ、領いた。

「あの数相手に正面切って殴りこむのはR戦闘機でも手間がかかるのでね。大気圏外からの波動砲によるモニュメントに対する長距離砲撃、それと並行して異次元航行システムによって、ハイヴの中枢に直

接転移して反応炉を破壊するという手順を取っている。

そろそろそちらでも確認が取れるはずだが。どうする？ 席を外して確認してくるかね？

その場合ついでに各国に我々の存在をうまく伝えてくれるとありがたいのだが」

挑発というよりは純粋な親切心からきたであろうその言葉に、香月夕呼は一瞬迷ったが、結局断った。

彼らがハイヴを攻撃中だという嘘を言っているのならすぐにわかることだ。それよりも今は少しでも彼らの情報が欲しい。

「いえ、結構です。各国政府には後でこちらから情報を回しましょう。どのみち彼らが暴走してもそちらに攻撃が出来るとは思えませんしね。

それで……貴方は我々に何を望むというのですか？ 単独で地球上のハイヴを攻略してまわるような方々に、我々の助力など不要なように思えるのですが」

「勘違いしないでほしいのだが、我々はあくまでハイヴを機能停止させるので精一杯だ。すでに発生した無数のBETAを殲滅するには今の部隊の規模では流石に手に余る。本来停止したBETAなど放置しても構わんのだがバイドがいるなら話は別だ。

停止したBETAがバイドによつて汚染され、再起動させられたら極めて不味いことになる。

そしてなにより——これから我々はグリトニル奪還の為に全戦力を投入する。

正直な話、君たちの手助けをしたり、世界中のBETAを相手にする余力はない。それどころかまだ正常な機能を保っているBETAや汚染されたBETAまで押し寄せてきたら、我々の対処能力を越える恐れがある」

「なるほど……。現在『ファイアーボール』……いえグリトニルが落下したカシユガル付近にBETAが集まってきているという情報も入ってます。貴方方の戦力ではグリトニル内部のバイドで手一杯。そこで他のハイヴのBETAの足止めの為に陽動として、我々の兵力

も借りたいということですね」

「そういうことになる。というよりは現状これしか方法がない。我々はBETAの群れを相手にしている暇はないし、君たちの装備ではバイドに対抗できない。そして時間が経てば経つほどバイドはその戦力を増大させて手に負えなくなるだろう。これは適材適所だと思っ
ていただきたい」

相手は確かに理にかなった言い方をしている。いるのだが香月夕呼はどこかきな臭いものを感じ取った。それは研究者でありながら、政治家まがいのことをしてきた経験からかもしれないし、或いは女の直感かもしれない。

彼女はその直感従って一番気になることを訊ねることにした。

「ところで一つ聞きたいのですが」

「話せることなら」

「大したことではありません。貴方は22世紀に帰れるのですか？」

「……ああ、目処は立っている。グリトニル奪還とバイドの殲滅後に帰還する予定だ」

「その後、グリトニルはどうなるのですか？ 残していかれるのですか？」
「フムン、それは状況による。できうるならば持ち帰りたいが、我々の部隊の規模ではそういった大規模転移は難しいかもしれない。場合によつては処分することになるだろうな」

「その処分方法についてお聞きしても？」

「……剥離したグリトニルのブロックと同じく使えなくするだけだ。それほど物騒な手段は使わんよ」

妙だ。と香月夕呼は思った。彼らが自由に時間や世界線の壁を突破できるなら、このような異常事態だ。独力で決着をつけようとせず、増援を呼んでもいいはずだ。

彼らはグリトニルの次元カタパルトで起きた事故により、この時代に転移してきたと言った。

つまりそれは彼らは独力では、元の世界に帰ることはできないということなのではないのか？

更に言うなら彼らのグリトニルの処分方法の詳細を明かさないので気になる。あれほどの大質量、生半可な事で破壊するのは不可能な筈だ。処分方法によっては地球にも影響が及ぶ可能性がある。

衝撃の事実を立て続けに打ち明けられ、麻痺しつつあった彼女の思考が再び回転をはじめた。

彼らはグリトニルの奪還に拘っている。つまり事故の発端となったグリトニルの次元カタパルトを使って、元の世界に戻る気なのだろう。

だがもし。そのグリトニルの次元カタパルトが破壊されてしまったら？

彼らは元の世界に戻る術がなくなり、グリトニルと共にこの世界に帰化することになるだろう。

そうなれば——この地球が、単機でハイヴを落とすR戦闘機の技術を手に入れる事ができるということだ！

彼らの態度を見る限り、この世界に対してはかなりドライな立場を取っているようだ。あまり積極的な技術支援は望めそうにない。お好みの白銀武と違って、最悪この世界が滅んでもさほど気にしないだろう。

こうして自分達と接触し情報を流している件についても、同じ人類の誼よしみであり単なる義理といった感がある。

だが帰る術がなくなり、ここが彼らの故郷になるとなれば、彼らも生き延びるために自分達の技術を吐き出すしかない。

となれば彼女がやるべきことは唯一つ。

「わかりました。この話は私が責任をもつて各国上層部へと伝え、実現出来るように尽力させていただきます。その代わりと言ってはなんですが、我々からも一つ条件を出したいのですが」

「条件？」

「ええ。貴方達グリトニル突入部隊に、我々国連軍の特殊部隊を同行させていただきたいのです」

彼女の策——それはグリトニルに毒を仕込むこと。

具体的には特殊部隊A—01を使い、R戦闘機群よりも先にグリト

ニル内部の次元カタパルトを制圧——或いは破壊することだ。

無論これはあくまでそういった機会が来たら儲けもの程度の作戦であり、直接実行するにはリスクが大きすぎる。事が露見して本格的に決裂するような真似は絶対に避けねばならない。

状況を誘導する程度の事は出来ても、直接実行できる可能性は殆どないだろう。

だが例えこの作戦が実行に移されなくても、A-01には仕事が山ほどある。グリトニルは未来の技術の塊だ。様々なデータを入手出来る可能性があるだけでも行く価値はあるのだ。

更に言うなら彼らがバイドの殲滅を行うというなら、それを確実に実行されたかどうか確認しなければならぬ。

彼らだけさっさと帰還して、バイドだけが残されるという事態になつたら目も当てられない事になるのだ。

そして彼らが全滅するような事態になつたら、気に食わないがオルタネイティヴ5の連中の力を借りて、ありったけのG弾をグリトニルに撃ちこむ事も視野に入れなければならない。例えどんな二次被害が出ようともだ。

戦力的に役に立たなくとも、彼らの戦いを監視する存在は絶対に必要なのだ。

「しかしそれは——」

予想通り相手は渋るような返答を出してきた。当然だ。戦力的に劣る上に、こちらの技術を狙っているだろう輩を連れて行くなど面倒なことこの上ない。

だがそれでも彼女には今回の交渉に限っては勝算があった。

確かに彼ら22世紀の地球と自分達の地球は隔絶した技術の差がある。しかし人間同士の口のやりとりならば負けるつもりはない。

特に今回の相手は一見余裕を持ってこちらに接しているように見えるが、どうにも交渉慣れしていないような印象がある。それがブラフなのか、意図せず行っているのかはわからないが、後者であれば交渉事専門の人材ではないのかもしれない。

ならばそこに付け入る隙がある。

——こちとらオルタネイティブ4計画と予算確保の為に海千山千の政治屋共と何度も渡り合ってきたのよ。この香月夕呼を舐めてもらっては困るわね。

そんな決意を胸に秘め、彼女は改めて通信システムに向き直った。



通信を切ってマルトーは溜息をついた。

今回不慣れなネゴシエーターの真似事をしてわかったことは、男は女に口では勝てないということだ。それは時代が変化しても変わることはないらしい。

結局横浜の魔女の部隊の同行を押し切られた上に、不測の自体に備えてある程度の技術貸与まで約束する羽目になった。

元々現地部隊がバイドと接敵した時に備えて、必要最低限の武装や技術の貸与はするつもりだったしこの程度の『出費』は許容範囲だったが、それはそれとして予想以上にふんだくられた気分だ。まったく美人との付き合いは金がかかるとはよく言ったものだ。

一応貸与する武装に関しては、波動技術やバイド技術が使われていない枯れた技術を中心にし、念のために条件付きの自爆機構も備えた上で渡すつもりだが、行動開始まで時間がなく、大した仕掛けは仕込めない。いくらかは完全にあの魔女の手の内に渡ると見ていいだろう。

もつとも原理的には難しくない電磁投射砲や、使い捨ての兵装が主になるので、仮に相手の手に渡ってもさほど問題はない。電磁投射砲程度ならこの世界でも開発に成功しているようだし、こちらの電磁投射砲も仕組みは大して変わらないのだ。単に出力や材質の問題から威力が全く違うだけで。

そして話し合いの結果、自分達は表向きはこの地球の国連軍が進めていたオルタネイティブ計画によって生み出された特殊部隊『シユールディングスター』として行動することになった。この名前は彼らがこちらに付けたコードネームから取ったものだ。

グリトニルも同じくオルタネイティヴ計画の産物で、衛星軌道上で密かに建造していたそれが事故とBETAの攻撃で地上に落下したというカバーストーリーで誤魔化することになる。実際に彼らは移民船団をラグランジュ点に作っている。そこにもう一つおまけで作っていたと言えば一般の部隊からすれば、そんなもので済むだろう。とはいえ、それはあくまで本当に一般の部隊に対する表向きの話であり、各国の上層部には自分達の素性とバイドの正体はそのまま伝えることになっている。

如何に荒唐無稽な話であろうとオリジナルハイヴを押しつぶしたグリトニルと、現在進行形でグリトニルから脱落したブロックの周辺のハイヴを潰して回っているR戦闘機を見れば、誰であろうと信じざるを得まい。

バイドの正体とその出現の経緯にしてもそうだ。

バイドの正体は22世紀では新兵どころか一般市民にすら知られている。どれだけ情報を封鎖しても、グリトニルやその破片からちよつとした情報媒体——雑誌や個人の日記レベル——でも確保されたらそれだけで事が露見する可能性がある。だったら最初から公表しておいた方がいいというのがグリトニル突入部隊の司令部の判断だった。

もし交渉相手が異星人なら、バイドの正体は間違いなく外交問題に発展するため箝口令が引かれていただろうが、相手も同じ地球人だ。文句の言いようもない。

どうしても気に入らないのであればタイムマシンでも作って、26世紀の地球人に直接文句を言ってこいとか言いようがない。

自分たちもいずれそうするつもりなのだから。

そして香月夕呼。

噂に違わず——いやそれ以上の切れ者だった。

自分達の素性を各国政府の上層部にしか知らせないようにはしたの
は、恐らく自分達が22世紀の帰還に失敗したことを見据えてのこと
だ。

グリトニル突入部隊がこの世界に取り残された場合、あくまでこの

部隊は元からこの世界の存在だったというカバーストーリーをそのまま利用するつもりなのだろう。

そして全滅の危険も大きいというのにわざわざグリトニルの突入部隊に自分の手駒を押し込んできたのは、恐らくはこちらの帰還を妨害するため。

彼女は自分達がこの世界に対する興味が薄いということを見抜いている。ストレートに技術の提供を求めても断られると考えているのだろう。

そしてこちらにも実際にそのつもりだった。少なくとも自分達が22世紀の地球連合軍として動いている以上、他所の勢力に大規模な技術提供などするつもりはない。

故に自分達の帰還方法を失わせて、この時代の地球に帰化させてなし崩し的に22世紀の兵器と技術を取り込もうという魂胆だろう。

確かにグリトニル突入部隊はバイド殲滅後は次元カタパルトを用いて、元の世界線へ帰還するつもりだ。

香月博士に語った通りグリトニルごと帰還したいのは確かだが、グリトニルの動力炉と次元カタパルトをもつてしても、突入部隊だけならともかくグリトニルごと世界線の移動すると再び暴走し、また何処とも知れぬ世界へと放り出されてしまう可能性が高いという計算結果が出た。

その為、グリトニルは破棄が決定され、動力炉とカタパルトに突入部隊帰還後に作動する自爆プログラムを仕掛け、グリトニル諸共自分達の痕跡を全て消していく予定だった。

全長30kmの宇宙要塞を地上で自爆させるのである。この地球にそれなりの影響が出るのは間違いない。

この自爆は次元カタパルトのシステムを暴走させて、空間歪曲を引き起こすという自爆というよりも消滅という言葉が相応しい仕組みの為、核兵器のような派手な爆発や衝撃波は起きず、二次被害は最小に抑えられる予定だ。だがあのG弾程ではないにしろ、グリトニルのあった場所はなんらかの空間汚染や重力異常が発生してもおかしくない。

そういった意味では香月夕呼がこちらの帰還の妨害をしてくるといのは、まったくもって正しい行為だった。

グリトニル突入部隊が保有する艦艇は、小型輸送艦をベースに改造した全長200m弱のヒルデイスヴィーニ級強襲揚陸艦トールと、全長700m弱のナーストレンド級ミサイル駆逐艦フライバーのみ。これらは地球連合軍の艦艇としては比較的小型の部類になる。

地球連合軍が保有する艦艇は、全長1kmを越える巡洋艦や戦艦クラスからは外宇宙航行に備えて艦の内部に自前の工廠も有しており、各種消耗品はもちろん資源惑星があれば自力でR戦闘機だけでなく艦艇すら作り出せるのだが、突入部隊の艦艇にはその能力はなく、今ある武器弾薬や燃料、各種消耗品を使い切ったらそれで終わりだ。

もしカタパルトが破損して帰還に失敗したら、この世界に帰化するか——或いはグリトニルを徹底的に除染した上で自分達の拠点にし、この世界の新たな勢力となるしかない。

前者なら自分達の技術を切り売りして生きていくことになるし、後者だと人数が少なすぎ過ぎて勢力を保つことが不可能ではないが面倒ではある。グリトニル突入部隊の人員の数は強襲揚陸艦とミサイル駆逐艦の乗員数を合わせても2000名を下回る程度の数でしかないのだ。

しかも戦闘に関わる人間が大半を占めるのも勢力として歪だろう。グリトニルの設備の破損や汚染の度合いによって変わってくるが、必要最低限のダメージである要塞を奪還できれば世界中からの干渉をシャットアウトしてグリトニルに引きこもり、次元カタパルトを始めとする設備の修理に尽力することもできる。だがそれでも専門の人員がいなかったため、修理には最低でも数ヶ月、下手すれば数年はかかる。

だがグリトニルがすぐに使用不可能なほど破損していたり大きく汚染されていた場合、やはりこの世界とそれなりに向き合う必要が出てくる。

そして現状では後者になる可能性のほうが大きいと言わざるを得ない。

どちらにしても帰還が失敗した時点で、グリトニルを自爆させることはできなくなる。

香月夕呼が自分の部隊をねじ込んできたのはそれも考慮した上だろう。

この時代の人間からすればグリトニルは宝の山のような物なのでから、なんとしても手に入れたはずだ。

グリトニル突入作戦に国連軍が同行してくる表向きの理由も、バイド殲滅作戦完了後は地球連合軍グリトニル突入部隊はそのまま元の時代に帰還してしまう。その為この時代の人間も同行させ、バイドとBETAの完全な殲滅を確認しなければこちらも安心できないというもつともらしい理由なので、表面上は協調体制を取るつもりながらも無下に断ることはできない。

万が一、次元カタパルトを奪還しての帰還作戦が失敗し、この世界に長居する羽目になった時のことを考えると、やはり現地の勢力との関係性を完全に悪化させるわけにはいかないのだ。

因みにバイド殲滅作戦自体が失敗した時のことは考えていない。

自分達が全滅したらこの世界にバイドに対抗出来る戦力はない。気の毒だがこの地球の歴史はそこで終わることになるだけだ。

加えて言えば援軍や救助を期待しようにもこんな事故による転移では転移先を特定するだけでも一苦勞の為、それも期待できない。自分たちは独力でこの状況を打破するしかないのだ。

「全く、人間が絡むといつも面倒なことになるな」

何も考えず、バイド殲滅のみを目的に動いていた時のほうが遥かに気楽だ。

そんなことを考えながらマルトーは交渉の経緯と結果を報告書にまとめて、衛星軌道上で待機している友軍へと送信した。

これで彼の仕事は終わり——というわけではない。

この後は香月夕呼との交渉に基づいてこのD-3ブロックに残った兵器のいくつかを、国連軍に譲渡する予定がある。当然彼らにも使えるように、兵装のセッティングやら調整やら、機密保持用の自爆シス

テムを組み込まなければならぬので、マルトー一人でできることではない。

その為グリトニル突入部隊から技術チームが派遣されて来る予定だ。

だがその人員もギリギリであり、彼らに全てを丸投げして終わりというわけにもいきそうにない。暫くは現地勢力と技術チームの調整や司令部との連絡役など、雑務に追われることになるだろう。何しろ横浜基地からも、技術チームが調整した武器を受け取り、ついでに簡易テストを行うための部隊が派遣される事になっている。とか今現在D-3ブロックで待機している香月夕呼の子飼いの部隊『A-01』がその役目を担うことになるのは間違いない。

できれば技術チームには自分の愛機も直してほしいところだが、機体が修理されてもこの怪我では数日はRには乗れないだろう。

そしてその数日中に恐らく全ての決着がつくのだ。

なんとなしに彼は現在グリトニル突入部隊に所属するR戦闘機の現状を確認した。

ミーティアを始めとした幾つかのRはバイドの交戦で被弾した為、ナスストレンジ級ミサイル駆逐艦フライバーの格納庫で修理中。

あとのRは軌道上で待機している艦艇の護衛に僅かに残り、それ以外は各地に散らばったグリトニルの破片の破壊とグリトニル攻略の為の下拵えに、忙しく動き回っているようだ。

破片の落下地点の付近にあったハイヴの攻撃も平行して行われており、既に3つのハイヴの反応炉が破壊されていた。

九話 殲滅

無数の手裏剣を重ねたような巨大な塔。モニュメントと人類が呼称したその塔の下には蟻の巣を思わせる巣が広がり、その中にはやはり昆虫を思わせる無数の生体がひしめいていた。

しかしその異星からやってきたBETAという名前の昆虫は地球の昆虫とは違い、小さな個体でも数メートル。大きな個体は数十メートルというサイズがあり、人体を醜悪にこねくりまわしたような造形をしていた。

人類にマシユハドハイヴと呼称されたその場所は、BETAがこの星に築きあげた2つ目の橋頭堡であった。

今日この日までは。

軍隊蟻の群れのように地面を埋め尽くすBETAの絨毯に向けて、遙か天空から噴進炎の尾を引いて無数のミサイルが降り注ぐ。

そのミサイルの総数は数百にも及び、個々の弾速は秒速30kmを超えていた。

無論BETAもそのミサイルの雨を黙って見ているはずもない。

如何に高速であろうと彼我との距離が数十km以上あり、動きが直線的ならば、『見る』という行為がそのまま照準となる光線級属ならば充分に捕捉可能だ。

モニュメントの内部から、或いはモニュメントの麓から、或いは地上のBETAの群れの中から、無数の光が天に向かって解き放たれて、ミサイルを迎撃する。

槍袞の如き光の群れに串刺され、天と地の狭間でミサイルの大半が火球へと変わった。

だがそれらの動きはミサイルを発射した者達にとっては予定通りの動きだった。

『ビーハイヴよりエニグマへ。サーチミサイルの87%が迎撃された。予想以上の精度だ。反撃を回避するため、これより衛星軌道上か

ら離脱する』

『エニグマ了解。これで光線級の位置を全て確認できた。サンピラーへデータを回す』

『サンピラー了解。データを受け取った。波動砲の照射を開始する』
その言葉と共に遙か上空——大気圏を超えた更なる高み、重光線級のレーザーでも届かない地上から20000km程離れた宇宙空間に待機していたR戦闘機が行動を開始した。

R戦闘機というのは個性的な外見を持つ機体が多いが、この機体ほどわかりやすいRはそうはいないだろう。

機体の上部には機体の全長の2倍近い巨大な砲塔を背負い、更に機体の下部には機体と同じ全長の長砲身の電磁投射砲を装備している。そして機体の後部は砲塔用の冷却システムとジェネレーターで埋め尽くされていた。

最早このR戦闘機は、この巨大な波動砲システムを運搬し、発射するためだけにあると言っても過言ではない。

R-9DH3”CONCERTMASTER”。

波動砲の照射持続時間と照射範囲を徹底的に上げ、点ではなく、面での制圧を目的としたR戦闘機。

瞬間的な破壊力と射程距離においては他の長距離特化型Rに譲る部分もあるが、数万kmから十数万kmという中距離及び長距離からの制圧射撃に特化した機動砲台とも称するべきR。

その性質上、接近戦は不得意だがグリトニル付近のバイドを殲滅し、グリトニル内部へと突入するR戦闘機の露払いという役割を担う為に、この機体もまた『サンピラー』というコールサインを与えられ、突入部隊へと編入されていた。

サンピラーは突入部隊が内部に侵入した後は、グリトニルの軍港の出入口付近へと陣取り、港にバイドの増援が姿を表す度にその波動砲を撃ちこみ、徹底的に消し飛ばしていたのだが、今回はそれが仇となってグリトニルの転移へと巻き込まれた。

だがそれが皮肉なことに中距離での戦闘力に特化したグリトニル突入部隊における、数少ない長距離攻撃能力を持つRとして活躍す

ることになったのだ。

『波動砲、発射』

サンピラーの言葉と共に、R-9DH3に搭載されたフルチャージの持続式波動砲Ⅲが発射される。

機体の上部に搭載された大型の砲塔が圧縮した波動粒子を放ち、巨大な円柱状の光となって亜光速で地球に向かって突き進んでいく。

ミサイルの大半を撃ち落とした光線級の群れは、射程距離外へと離脱しようとしている自分達の巢を攻撃してきたミサイル群の母機に報復を与えるべく、発射中のレーザーの軌道を向けようとして――自ら放った光線ごと、遙か宙天から降り注いできた極光に押し潰された。

直径100メートルはあろうかというその光の柱は、地面に着弾すると同時に光に飲み込んだBETAを原子の塵に還していく。着弾地点で大規模なプラズマ爆発が発生し、直撃を受けていないBETAですら、着弾の衝撃波と放射熱で燃え上がり吹き飛んでいった。

そして光の柱は着弾と同時に軌道を変えて、複数のレーザーの発射地点を次々と飲み込んでいく。最終的に光の柱は6秒間に渡ってモニュメントとその付近を徹底的に焼き払い、モニュメントの3分の2を溶解させてそこでようやく収まった。

その光景は衛星軌道上から見れば、まるで地上というキャンパスに光の筆で落書きしたかのように見えるだろう。

この攻撃でハイヴに所属する光線級属の8割が消え去った。例外はミサイルが発射された時点でハイヴの奥深くにいて、迎撃に加われなかった個体のみ。

その例外を念入りにすり潰す為に、先ほどレーザーを回避する為に大気圏外へと離脱したR戦闘機が再び衛星軌道上に舞い戻り、再度のミサイル掃射を開始した。そして今度のミサイルの弾速は先のそれを遙かに上回っている。最初の攻撃は光線級の迎撃を促す為にあえて弾速を落としていたのだ。

その赤い塗装が施されたR戦闘機は、通常のR戦闘機とは少々異なるデザインラインをしていた。

機首の大半を占めるラウンドキャノピーこそ同じだが、キャノピーの形状がより流線的であること、そして通常のR戦闘機の推進ユニットは単発か双発が大半なのだが、この機体は四つの大型推進ユニットを装備している為、機体のシルエットが肥大化し、従来のR戦闘機とは違うマツシブな印象を見るものに与えていた。

そして何よりの違いはフォースだ。通常のフォースはエネルギーの球体にコントロールロッドという機械部品を取り付けたような形状だが、この機体のフォースは分離式の連装砲塔のような形状をしていた。

そうと知らなければ、これがフォースだと気づくことすらないだろう。

だが、このフォースもまた紛れも無く数多くあるフォースのバリエーションの一つであり、このR戦闘機——OFX—4”SONGOKU”の為に開発された専用のフォースなのだ。

この機体の原型はR戦闘機ではなく、R戦闘機よりも先に実用化された人類初の大気圏突入、離脱能力をもった軌道戦闘機、OFシリーズである。

対バイド戦においては汎用性を重視され、汎用作業艇であるRシリーズが地球連合軍の主力兵器となったが、R以上の歴史と実績を有し、OrbitFighterの異名を持つ軌道戦闘機群にもR戦闘機によって得られた技術をフィードバックし、改良が施された。

その結果、OFシリーズもまたR戦闘機と遜色ない戦闘力を獲得し、Rシリーズのバリエーションとして扱われることになり、最前線で運用されることになったのだ。

OFシリーズは総合性能ではRシリーズと大差ないが、その運用思想については全く異なる機体だ。

元々が軌道戦闘機ということもあり、OFシリーズは高重力下や衛星軌道上での戦闘を考慮して大推力の大型エンジンを搭載し、その機動力は並みのRを遥かに上回る。その反面、波動砲は従来のスタンダードタイプで統一されており瞬間的な火力はやや落ちる。それを補うために独自開発されたOFシリーズ専用のOFフォースは、レ

ザー以外にもフォースが生成する攻撃性バイド粒子によって成形された実体弾を発射することも可能となっている。

更に状況によっては同じく専用開発された特殊ビット、ポットシリーズを装備することで、総合的な戦闘力は更に高まる。

特にこのOFX-4 SONGOKUが装備する『OFフォースIV』はそれらの技術の結晶ともいうべき代物で、R戦闘機が運用するホーミングミサイルとほぼ同性能の誘導噴進弾をバイド粒子によって成形し、発射することができる。しかもこれらはフォースレーザーと同じ仕組みで成り立っているためフォースが破壊されない限り、弾数は無尽蔵と言ってもいい。

事実先ほどマッシュハドハイヴに向かって撃ち込まれた数百のミサイルは、このSONGOKUただ一機が張った弾幕だ。

このフォース製のミサイルは単純な破壊力、弾速ではフォースレーザーに劣るが、それでも戦車程度なら一撃で撃破出来るほどの火力を持つ。それに加えてフォースによるミサイルの成形速度と連射速度は凄まじく、機関砲の弾幕に匹敵する速度で連射可能な上に、ミサイルであるが故に個別に軌道や炸裂するタイミングをレーザー以上に自由に設定することが可能な為、戦術の幅を広げる事もできる。

西遊記にその活躍を描かれた石から生まれた猿の英雄、斉天大聖孫悟空はちぎった体毛から無数の分身を作り上げて、敵を圧倒したという。

そして22世紀の技術が鉄と火から産みだした機械仕掛けのSONGOKUは、空域そのものを埋め尽くす圧倒的な数の誘導噴進弾を生み出して、敵を制圧するのだ。

最も衛星軌道上に陣取り、装備した連装砲塔のような形状したフォースから、ミサイルを尽きることなく吐き出し続けるその姿は、分身の術というよりはこの機体に与えられたコールサイン『ビーハイヴ』という名前のほうがぴったりくる。放たれるミサイルは巣箱から放たれる獐猛な雀蜂の群れといったところか。

放たれたミサイルは扇状に大きく広がった上に、更にそれぞれが高速かつ複雑な動きをするために密度が薄れたレーザーでは追い切れ

ず全て撃墜できない。

かといってミサイルを発射し続ける母機を撃墜しようにも、ミサイルの弾体とミサイルを撃墜した際に起きる爆発がレーザーを減衰させて照準を防いでしまう。爆発の隙間から僅かに姿を見せた一瞬を狙っても秒速数百kmという速度での鋭角的な乱数回避を行われ、ともに照準を向けることすらできない。

それどころか光線級がレーザーを発射することで火点が特定され、波動砲が撃ち込まれて消し飛ぶことになる始末だ。

それでも極稀に光線級のレーザーがビーハイヴを掠めるが、全てフォースに防がれてしまう。

砲塔のような形状をしているとはいえ、OFフォースの防御力もまた通常のフォースと遜色ないのだ。重光線級のレーザーなら或いはフォースを貫通する可能性もあったが、それらは最優先目標として真っ先に潰されていた。

空を埋め尽くす勢いで発射されつづけるミサイルの数は既に数千にも達し、僅かに生き残った光線級では迎撃しきれなくなるのは誰の目にも明らかである。

もはやマシユハドハイヴの光線級、いやBETAそのものの全滅は時間の問題だった。

そのBETAにとっても、そしてこの時代の人類にとっても、常識外なその殲滅戦を目撃していたのは当事者達だけではない。

この時代の地球人達もまた衛星軌道上に配備された偵察衛星によって、彼らの戦いを観察していた

そして衛星の目の届かぬ地の底でも人類とBETA、立場を変えた虐殺劇が行われていた。



目的の場所に到達すると、彼は自機の異層次元航行システムを解除して、亜空間から通常空間へと復帰した。

青く歪んだ視界が元に戻る。

しかし元に戻った景色は、亜空間のほうがまだマシだったと思わせるほどの醜悪な光景だった。

深度数 k m はある地下深くに掘りぬかれた仄かに光るその広大な空間は、無数の BETA が文字通り埋め尽くしている。

そして広間の中心には彼の目的とするものが鎮座していた。

それがこのハイヴ——ヴェリスクハイヴの心臓部である反応炉だ。

標的を確認すると彼は自機の可変機構を作動させ、機体の形状を戦闘機形態から人型形態へと変形させた。

彼——コールサイン『トマホーク』の愛機である TL-2A2

”NEOPTOLEMOS” は R 戦闘機でも一際珍しい、白兵戦を意識した R である。

R 戦闘機はその汎用性の高さ故に、大型構造物の攻略作戦に駆り出されたり、閉所での戦闘を強いられる場合も多々ある。

例えば閉鎖空間での戦闘でも R 戦闘機はザイオン慣性制御システムの恩恵によって、あらゆる方向に即座に移動が可能で、極めて高い運動性を確保しているのだが、それにしても限度というものがある。

その為、R 戦闘機に陸戦部隊などで使用している機動歩兵のノウハウを取り入れ、白兵戦用の人型機動兵器として運用できないかというのが、これら可変型 R 戦闘機のコンセプトだった。

当初は可変機構とそれに連動した複数の波動砲を運用するための試作機に過ぎなかったこのシリーズだが、度々高レベルのジャミングでレーダーが封じられた閉鎖空間でバイドとの接近戦を強いられる R 戦闘機のパイロット達から高い評価を受けた結果、本格的な改良と量産を視野に入れられることになったのだ。

そして彼の乗機たるである TL-2A2 ”NEOPTOLEMOS” はこれら白兵戦用可変型 R 戦闘機の集大成の一つとも評される機体である。

全身をモズグリーンに塗装された重装甲と無数の武装を持つこの R 戦闘機は、戦闘機形態でも通常型の波動砲の強化版である『スタンダード波動砲 II』を使用可能で、R-9A を凌駕する性能を持っている

るが、その真価は閉鎖空間において発揮される。

可変機構を作動させるとこのRは文字通り人型機動兵器へと変形し、格闘戦に特化した専用のビームサーベルフォースに加え、大口徑電磁投射砲を組み込んだ携行ライフル式の複合武装型の波動砲を運用することが可能になる。

この携行ライフルに搭載されている波動砲は衝撃波動砲と呼ばれるタイプの強化型で、R戦闘機の異層次元航行システムを利用して、集束させた波動粒子を敵性体の内部に転送し炸裂させるという、異色の波動砲である。

これは炸裂時に広域に波動粒子の連鎖爆発を起こすため、面制圧兵器としての側面も持っており、閉鎖空間の制圧にうってつけの兵器だった。

宙間戦闘では通常のRとして運用し、敵要塞などの閉鎖空間に突入した後は人型形態へと移行、そしてこの波動砲——『衝撃波動砲Ⅱ』で制圧し、取りこぼした敵を全身に装備した無数の兵装で叩き潰すのがこの機体のコンセプトだ。

NEOPTOLEMOS^{ネオプトレモス}が装備したビームサーベルフォースは、フォースに取り付けたロボットアームから生やしたビームサーベルで格闘戦を行うことができるだけでなく、ビーム刃を高速射出しての射撃戦にも対応しており、機体後部には四連装ミサイルハッチを装備して全周囲への攻撃を可能としている。

更にフォースを失った時に備えて白兵戦用斧状光学兵器まで装備している上に、全身の重装甲を利用しての『体当たり』すら武器となるこの機体の在り方は、戦闘機でありながら戦車でもあった。

もつとも今回の戦闘ではこの機体の真価を見せる必要はなかった。彼がやるべきことは実にシンプルだったからだ。

衛星軌道上から亜空間航法を使い、BETAの対空レーザー網やモニュメントを文字通り『すり抜け』て、メインホールまで降下。

そしてメインホールで通常空間に復帰すると同時に、BETAの動力源でもありメインコンピュータも兼ねていると思わしきハイヴの最重要施設である反応炉に波動砲を叩き込む。

ただそれだけの仕事だった。

彼の感覚からすればこれは最早戦いですらなく、屠殺に近い。

無感動に波動砲のトリガーを引く。

圧縮された波動粒子の砲撃が大広間の中心に位置する青く発光する反応炉内部へと転送され、炸裂しそれを付近のBETA諸共粉々に打ち砕いた。

ハイヴの全機能が停止し——それに伴って侵入者を排除しようとしていたBETAが一時的に動きを止めた後、即座に再起動してメインホールの外に出ていこうとする。

守るべき物が無くなったため、別のハイヴに向かうつもりなのだ。

だがトマホークとしてはそれを許すわけにもいかない。

余り時間はかけられないが、それでもできうる限りBETAの数を減らせというのもまた司令部からのオーダーなのだ。

機体の左手に装備したビームサーベルフォースのアームから光剣を展開させ、天井から落下して襲い掛かってくる戦車級を切り飛ばしつつ、彼は右手に構えた衝撃波動砲IIの照準をメインホールからの出口に殺到しつつあるBETAの群れへと向ける。

かくして機械的な虐殺が始まった。



衛星軌道上でエニグマは指揮下にある複数のR戦闘機に指示を出しながら、その動きを確認していた。

グリトニルから脱落したブロックは日本に落下したものを除き、全てが火炎武装型R ”DOMINIONS” を駆るフレームタンによって全て焼き払われている。

如何に波動砲といえど一部分とは言え、頑丈なグリトニルのブロックを木っ端微塵に破壊するのは難しい。

多少時間をかければできなくもないが、そんな時間はないし最大出力の波動砲を何度も撃ちこむ事になるので、地球環境にも多大な被害が出てしまう。

その点、火炎放射器で焼き払えば、グリトニルのブロックの原型は残るがブロック自体に残されたあらゆる物資と情報は焼き払う事ができるので都合がいい。

とは言え既にBETAに荒らされたブロックもいくつか存在するため、現在彼の指揮下にあるRはBETAのネットワークに対する自軍の技術流出を防ぐため、グリトニルのブロックの付近に存在するハイヴの反応炉への攻撃に当たっており、その任務を終えつつあった。

反応炉をピンポイントで攻撃しているのは、恐らくはこれがBETAの動力源兼頭脳であると推測されたからだ。

BETAは思念波とでも言うべき一種の量子通信による情報伝達を行っているようだが、流石にそんなものを解析している程、人手も時間も無い。おまけにBETAのネットワークがバイドに汚染されている可能性も考えると、手間暇かけて解析するぐらいなら、さっさと破壊したほうが手っ取り早いという結論になったのだ。

今の所、バイドに比べると数以外は取り立てて見ることのないBETAだが、スペックを改めて検証するとこれが予想より油断ならないものだという事が判明した。

特に警戒するべきは光線級種だ。とりわけ重光線級のレーザー照射は多数同時に受ければ、フォースをもつてしても防ぎきれない程の火力になることが判明している。元々高出力光学兵器はR戦闘機の苦手とする物の一つだ。

光速で迫り来るレーザーは出力によってはフォースが攻撃を『喰う』速度を上回り、フォースを破壊できずとも貫通してくる場合もあるし、フォースのエネルギー吸収許容量を越えた攻撃——例えばリミッターをカットした波動砲や戦艦の艦首砲レベルのエネルギーを一度に叩きつけられれば破壊される場合もある。如何にフォースが人類最高の防衛兵装であるとは言え、元はバイドであり、絶対の存在ではない。それはフォースのオリジナルであるバイドそのものを、R戦闘機が過去に何度も破壊していることが証明している。

この為、ハイヴ攻撃をする時は最優先目標として光線級属を徹底的に叩くように指示しており、彼の指揮下にあるRは確認した光線級属

のほぼ全てを殲滅しつつあった。

とはいえ一機辺りが制圧する範囲が広すぎる為に、一定数の取りこぼしは存在するだろう。こればかりはどうしようもない。

一応R戦闘機もフォースに頼らない防御システムとして、かつてサタニックラプソティにおいて活躍した試作R戦闘機RX-10”ALBATROSS”^{アルバトロス}に実験的に搭載された光学ミラーコーティングを実用化し、全R戦闘機に装備させているが、それもフォースに比べれば気休めのようなもので、光線級ならともかく、重光線級のレーザーの直撃には3秒も耐えられれば上出来といった結論を技術チームは出した。

まあ、3秒も猶予があれば例え不意打ちで直撃を食らっても、R戦闘機の機動力と反応速度なら即座に反撃か回避が可能な為、R戦闘機パイロット達はむしろこれを朗報と捉えたが。

ともあれ次々とハイヴの反応炉を破壊している現状、Rの敵ではないことは証明されているわけだが、それもいつまで続くかわからない。

BETAの最大の脅威は適応能力の高さである。この世界で一週間で航空機に対抗する為の光線級を繰り出してきたことを考えると、余り悔つてかかつて良い相手ではない。

G元素というG弾の元になる物質を自力で精製できることを考えると、空間干渉兵器の類を短時間で開発してこちらにぶつけてくる恐れもある。

いや、そういった新兵器や新種を繰り出してくるまでもない。BETAというものは元々大した戦術を持たず、物量に任せた非効率的な戦いばかりしている。

それを修正して、高度な戦術的な動きをするようになれば、自分達にとつても厄介な上、この世界の人類は王手をかけられてしまうだろう。

そしてこの地には今その非効率な動きしかできないBETAに、効率的な戦術を与えることができる存在がいる。

バイド。

彼らは個体によって余りにも性質が違うせい、BETAとさして変わらないレベルの戦い方をしている個体もいれば、人間以上に高度な戦術を取ってくる個体もいる。

今回グリトニルを乗っ取ったザブトムなどは後者の筆頭だ。

グリトニルの下敷きになったオリジナルハイヴにいた無数のBETAがバイドに汚染されて、バイドと連携して戦術的な動きを取るようになっていけば、如何にR戦闘機といえど厄介な事になる。

しかもオリジナルハイヴの反応炉がバイドに汚染されているせいか、それともBETAがハイヴを奪還しようとしているのか、付近のハイヴから無数のBETAがオリジナルハイヴへと集結しつつある。その総数は数十万にも及んでいる。

その為、グリトニル突入部隊はグリトニル再突入前の下準備として脱落したグリトニルのブロック周辺のハイヴのみならず、オリジナルハイヴ周辺のハイヴにも攻撃を仕掛けて、徹底した間引きを行っていた。

グリトニル再突入への下準備として、現在オリジナルハイヴ周辺にあるマシユハドハイヴ、エキバストウズハイヴ、ポパールハイヴ、敦煌ハイヴの四つのハイヴに複数のRが攻撃を仕掛けている。

こちらへの攻撃は反応炉の攻撃のみならず、ハイヴに所属するBETAへの徹底した攻撃も行われていた。

この攻撃は数を減らすことも主眼に置かれている為、R-9DH3やR-9Sk2を始めとする突入部隊に所属するRの中でも特に殲滅戦に優れたRが担当していた。

だがそれでもオリジナルハイヴに向かうBETAの全てを殲滅することは不可能だろう。

弾薬や推進剤、機体やパイロットの消耗を度外視すれば地球上の全てのハイヴを破壊することも容易いことだが、BETA殲滅に全力を尽くしバイドの殲滅が難しくなるというのは本末転倒だ。

現在グリトニルとその内部にいるバイドは沈黙を保っているが、これはバイドの群れの中核であるザブトムがミーティアとの交戦で、大きなダメージを負ったからだと推測される。

だがバイドの修復能力を考えると、最低でも10日後には再び動き出すと司令部は予測していた。

今回の作戦で破壊するハイヴの数は8つ。オリジナルハイヴ付近にある4つのハイヴと、グリトニルから剥離したブロック付近に存在するハイヴの4つだ。機体やパイロットの消耗、この後行われるグリトニルへの再突入作戦へのタイムリミットを考えるとこれが限度だった。

そしてグリトニルへの再突入作戦が開始されたら、オリジナルハイヴに殺到してくるであろう、残りのBETAは現地の部隊に任せるしかない。

オリジナルハイヴ周辺の汚染されているであろうBETAは、衛星軌道上に位置するミサイル駆逐艦とその護衛のR、そして支援用の長距離攻撃型Rが相手をするようになるため、現地勢力が相手にするのは基本従来のBETAになる。

その為、なんとかなるだろうとは思っていたが――。

(少々樂觀視しすぎていたかもしれんな)

エニグマは指揮と平行しながらも、21世紀の地球のネットワーク・システムにハッキングを仕掛け、横浜基地と各国の上層部のやりとりを盗み聞きしていた。

その結果わかったことは、香月夕呼女史は各国政府への説得と説明に予想以上に苦勞しているということだった。

だがそれも当然だ。別の世界からやってきたという自称未来の地球人達は、各国政府に対して何の説明もなく好き勝手に動き回り、人類が総力をあげてようやく一つ潰せる存在であるハイヴを既に複数陥落させている。

抗議しようにも彼らへの交渉窓口は香月夕呼一人のみ。

となれば、彼女に全ての疑問と質問とクレームが殺到するのは必然と言えた。

これに加えて各国政府の利益追求と腹の探り合いまで加わって、客観的に見ている筈のエニグマですらうんざりするようになり取りが行われていた。

だがそれも予想の範囲内ではある。

というよりはグリトニル突入部隊司令部は、こうなることを見越して彼女一人に窓口を絞って交渉をしたのだ。

はつきり言って今の自分達には国連という組織や各国政府と個別に長々と交渉できる程、人員も時間の余裕もない。何しろ予測では凡そ10日以内に、ほぼ全ての決着が付く予定になっている。

その為、香月夕呼にはその高い政治力に加え、この時代に並行世界の存在を認識し因果律量子論として論文という形で発表して学会に認めさせられる程の見識、そしてオルタネイティブ4の責任者として各国政府への太いパイプがあることから、現地との面倒な交渉事を自分達に変わって引き受ける事ができるマネージャーとしての役割を期待して接触したのだ。多少の武装の提供は言わば、その報酬だ。

接触する対象を彼女一人に絞った事により、彼女のみを警戒すればいいという利点もある。

それ以外の勢力はそもそも物理的に自分達に接触することすら出来ないのだから。

彼らの会議を聞く限りこちらに対して良からぬことも企んでいるようだが、元より内容が筒抜けな上、こちらがその程度の事は出来る。と香月夕呼なら薄々気がついている筈だ。

それを分かった上でそう振る舞うのは、そうでもしないとスポンサーである国連やそこに所属する国家の援助を引き出す事が出来ないのかもしれない。

何しろこの世界はバイドの脅威を直接目撃していないのだ。

バイドをBETAの延長線上の存在として考え、グリトニル突入部隊を同じ人間であるが故に、この世界のやり方が通じると考えるのも致し方ない事かもしれない。

いずれにしても作戦前にこの七面倒臭いやり取りを自分達がやるのは是が非でもお断りしたいというのが、エニグマの感想だ。

だが交渉窓口を彼女一人に絞るのもこの作戦が終わるまでの話であって、万が一バイド殲滅に成功したが帰還には失敗した、と言った状況になったら改めて自分達も直接国連や各国との交渉に乗り出さ

なければならぬだろう。気は乗らないが。

そういつた経緯もあって、諸々の面倒事を彼女に押しつけた形になったわけだが、この調子で話が長引くと再突入作戦の際に、現地勢力の協力が得られないかもしれない。

と言っても現地勢力は固か陽動になればいい程度の考えなので、現地勢力と決裂しても作戦は決行されるし、後々それで損をするのは現地勢力であるのだが。

(ま、精々頑張ってくれ)

今は作戦失敗後の事まで考えても仕方がない。どの道バイドに負けば次はない。

他人事のエニグマは胸中で無責任に彼女にエールを送ったのだった。

十話 会議

「いったいあいつらは何なのだ!？」

ドンという机の音を叩く音がテレビ電話回線越しにも伝わってきた。

いま机を叩いたのはアメリカ合衆国の軍の高官。

オルタネイティヴ5の推進者の一人でもある彼は、現在このオンラインによるテレビ会議でもっとも影響力を持った人間の一人の筈だが、その顔は恐怖と驚愕に歪んでいた。

そして他のテレビ会議の出席者も大なり小なり、似たような顔をしている。

「お気持ちお察ししますわ」

内心では全くそう思っていないにも関わらず、心の底から気の毒そうに香月夕呼が声をかける。

彼女が今いるのは横浜基地の世界各国の政府へのホットラインが設置された、ある意味基地でもっとも重要な場所の一つだ。

香月夕呼は落下した巨人工業要塞とそれに対するR戦闘機の行動に対する説明のためにこのホットラインを使い、各国の高官や大使を呼び出した。

あのR戦闘機たちはハイヴを潰すという行為を言葉通り、一切の隠蔽を行わずに実行しているため、それを観測した国という国が大混乱に陥っていた。

そこに横浜の魔女が、全ての事情を説明すると発表したのだから飛びつかないわけがない。

特にアメリカやソ連は独自で収集した正体不明の戦闘機群の衛星軌道上や地上での戦闘記録を持っていたため、どこよりも強い危機感を抱いているのだろう。

本来ならばこのテレビ会議に出席するのは大使レベルの筈なのに、アメリカに至ってはオルタネイティヴ5の関係者まで出席しているのがその証明だ。

それ以外の国も大使の他に各国政府の有力者が多数出席していた。

しかしそんな彼らですら衛星軌道上から撮影された写真と、ハイヴ付近の偵察部隊が捉えた映像を最初に見た時、これがフェイクの画像だと思えなかった。

天空から何千何万と無尽蔵に降り注ぐ誘導弾の雨。

地上にひしめくBETAを大地諸共焼き払う地獄の炎。

大気圏外からハイヴに突き立てられる光学兵器による光の柱。

そして——光線属種のレーザーによる迎撃を超高速、超低空飛行で掻い潜り、行く手を阻むBETAを球状兵装による体当たりとそこから放たれる光線で消し飛ばしつつ、ハイヴ近辺で徹底した殲滅戦を仕掛ける戦闘機の群れ。

そのどれもが同じ兵器体系に所属するということは一目了然だった。

未来からやってきた地球軍という荒唐無稽な話も、この圧倒的な力を目にすれば信じざるを得ない。

問題はそこではなく、その先にある。

「バイドだと……？　これだけの戦力を有する未来の地球軍を、更に圧倒する怪物……！　とてもではないが、そんなものを相手にするだけの戦力など我々にはない！」

「しかもそのバイドを創り出したのは更に別の時間軸の未来の地球人とは……例え冗談であっても悪趣味にも程がある！　一体そいつらは何を考えていたんだ?!」

「ファイヤーボール……いえ彼らの言うグリトニルは地球への落下の際、G弾の攻撃を回避しました。もしかしたら彼らはこの手の重力兵器に対する対策も有しているのかも……」

「ふん、どの道、これでアメリカお得意のG弾も頼りにならんということが証明されたわけだな？」

「……生憎だが、完全に無力化されたというわけではない。回避したということとは直撃を受けると不味いということの証明でもある。落着し自由に動けない今こそG弾を撃ちこむチャンスなのでは？」

様々な国の大使や高官が好き勝手な事を言い合う中、聞き捨てならない事を聞いた香月夕呼は素早く釘を刺した。

「残念ですが、彼らから与えられた情報によると、バイドの群れの司令塔の役割を持つA級バイドは高度な時空間干渉能力を有しており、重力兵器や空間干渉兵器に対してはその干渉能力を持って、力づくで相殺する可能性が高いとのことです。」

全く通用しないわけではないのですが、効果的に使うにはまずその司令塔のバイドへダメージを与えなければならぬと。

BETA戦に例えるなら——反応炉がG弾を無効化してしまうため、先に反応炉を破壊しないといけないと言った所でしょうか」「だったらますます我々にどうしろというのだ！」

激高した米国の高官の一人が机を叩くが、他の出席者も全く同感だった。

「基本的にバイドの件には彼ら——22世紀地球連合軍グリトニル突入部隊『シューティングスター』に任せるしかないかと。ただし完全に放置するわけにもいきません。首輪をつける予定です」

それに反応したのは帝国の大使の一人だった。
「首輪だと？ その気になれば、そんなもの彼らはいつでも引き千切ることができるだろう」

「勿論その通りです。しかし彼らはそれが出来ない理由があるので。——例えば我々の時代の軍隊が第一次世界大戦の時代に現れたらどうなると思います？」

「それは——過去の時代の勢力が我々と同じく頭を悩ます事になるだろうな」

「確かに一世紀以上も離れた兵器が突然現れれば、その時代の人々は為す術もありませんね。ですが本当にそうでしょうか？ 我々の戦術機は、戦艦は、戦車は、航空機は、補給もなしに延々と戦えるそんな都合のいい存在でしょうか？」

その言葉にTV会議に出席していた大使や高官達がざわめく。

「そうか……補給！ 奴らも無制限に戦えるわけではないということか！」

「となれば、この異常な速度でハイヴに攻撃を仕掛けているのも説明が付く。弾薬や燃料が尽きる前に速攻で勝負を決めたいのか……」

「或いは我々への示威行為も兼ねているのかもしれない。例え弾切れになつていようとその確信が持てない以上、迂闊に彼らに手出しは出来ないというわけか……」

議論がひと通り落ち着いてきた所に香月夕呼は新たなカードを切る。

「そしてここからが重要なのですが……彼らはバイドを殲滅しグリトニルを奪還した後、グリトニルの次元カタパルトを利用して元の世界に帰還するつもりです」

それを聞いたオーストラリアの大使がほつとしたような表情になる。

「それならば構わんのでは？ バイドを殲滅しシューテングスターも消える。その過程でBETA共は甚大な被害を受けるだろうし我々としては万々歳だ」

それに対して冷笑的な皮肉を入れたのはソ連の大使だ。

「オーストラリアの方は随分と無欲でおられることだな。これがBETAに侵略されていない国の考え方というものかね？」

その言葉に再び場が色めき立つ。

そんな彼らを代表するようにアメリカの大使が、ゆっくりと発言をした。

「つまり大人しく帰ってもらうにしても、彼らから何らかの技術を頂くべきだとそう言いたいわけかね？」

それに対して頷いたのは香月夕呼だった。

「それだけではありません。彼らは『帰還』するにあたって、グリトニルを持ち帰れない場合、何らかの方法で『処分』をするとのこと。それらを防ぐため、私は彼ら地球連合軍と交渉し、彼らがグリトニルに再突入をする際、バイド殲滅を確認するためという名目で国連軍の戦力も同行させることを約束しました」

その言葉に場が静まり返る。

「そしてその最終的な目的は——22世紀の技術やグリトニルの奪取ではなく、次元カタパルトの機能の停止です。私は彼らの活動には限界点があると感じました。もし彼らが帰還に失敗すれば補給のあ

てのない彼らはこの世界に帰化するしかありません。そしてその可能性は彼らも念頭に入れているのでしよう。だからこそ我々にコンタクトを取り、必要最小限の交渉窓口を設けたのです。万が一自分たちが帰れなくなった時、この世界と付き合っていくために」

「あいつらをこの世界に取り込もうというのか……!?!」

「危険すぎる！ 確かに奴らの兵器を我々が使えるようになれば最早BETAなど敵ではなくなるが、しかし……」

再び喧々囂々となった会議の場場違いな拍手が響き渡る。

その拍手を行ったのは先ほど発言したソ連の大使だった。

「流石は極東一の天才と名高い香月博士だ。そう、人類には力が必要だ。BETA由来の不安定な技術であるG弾などではない、純粋な人間の叡智によって築き上げられた真の力が。ソ連は香月博士の計画に助力を惜しみませんよ。さしあたってはその同行させる部隊に、我が祖国でもっとも優秀な衛士を編入させるというのはどうでしょう？」

そのあからさまな横槍に、香月夕呼は腹の底を感じさせぬにつこりとした笑みで答えた。

「ありがとうございます。ですが、同行させる部隊に関しては、既に彼らと打ち合わせを行い、決めておりますので今回は見送らせて頂きますわ。彼ら『シューテングスター』は政治的な駆け引きを嫌っているので、指揮系統が複雑になりかねない多国籍軍形式の部隊は禁止することになっています」

勿論打ち合わせまでしているというのは嘘である。しかし交渉窓口が彼女しかない以上、確認のしようがない。香月夕呼は唯一の交渉窓口という特権を最大限に利用するつもりだった。

ただでさえ頭痛がするような話を聞かされっぱなしだったのだ。これぐらいの役得は当然であると彼女は思っている。

すっかり釘を差されたそのソ連大使は、やはり内心を一切表に出さず、

「そうですか。それは残念です」

と一言述べて一旦引き下がった。しかし頭の中ではまた別の計画

を建て始めているのだろう。

すると今度は米国の大使が彼女に対して要求してきた。

「しかし今回の情報は全て香月博士からもたらされたものばかり。これでは我々としても全てを鵜呑みにするわけにもいかない。公正さと情報の真偽をはつきりさせる為にも、やはり我々にも彼らとの交渉の窓口が必要だ」

「同感ですな。現状では香月女史から得られた情報の真偽を確かめる方法がない。万が一にもあり得ないとは思いますが——彼女が情報を隠匿したり、虚偽の情報を交えていた場合、取り返しのつかないことになる」

当然といえば当然なその要求に対して、次々と各国の大使や有力者達と同調を始める。

だがその圧力に対しても香月夕呼は顔色一つ変えずに、受け流した。

「先ほども言った通り、シューティングスターはこちらの政治面に関わるつもりは一切ありません。彼らからすればこの数日以内で決着をつけて、元の未来に帰還する予定でしょうから当然でしょうね。そして彼らはあくまで自分達のことを第一優先としており、BETA殲滅に力を貸したり、この世界に技術を提供するような真似をする気は一切ないようです。

となれば交渉窓口を増やしても彼らからすれば煩わしいだけで、下手すれば全ての交渉窓口をシャットアウトし、こちらを完全に無視した独自の行動をする恐れがあります」

すらすらと答える香月の答えにアメリカの高官が憎々しげに呻いた。

「つまりしばらくは君の地位は安泰というわけだな」

「私もそこまで彼らから信頼されているというわけではありません。ただ忠告させていただくと、彼らはG弾を目撃しており、その対抗策を保有している可能性があるだけでなく、ラグランジュポイントの例の船団にも気がついていて可能性があります。くれぐれも性急な行動はなされぬように……」

言外に彼らを始末するためにG弾を打ち込んでも、最悪の場合無効化されるどころかオルタネイティブ5の要の一つである移民船団までもが報復に晒される可能性がある。と香月は忠告した。

それに対してアメリカの高官は苦々しげな顔をしていたが、反論はしなかった。

実際宇宙空間で、単機でハイヴを壊滅に追いやるような兵器に襲われた場合、大した迎撃システムを持っていない移民船団は碌な反撃も出来ずに宇宙の藻屑になるしかないのだ。

その事を知る香月夕呼は畳み掛けるように続ける。

「そして我々が取る作戦ですが、甲20号作戦は後回しにし、今回の彼らのグリトニル攻略戦に便乗させてもらい、オリジナルハイヴ攻略作戦を前倒しで発動するべきだと提案させて頂きます。この戦いでBETAが被る被害は相当なものになるでしょう。そして逆に彼らが失敗すれば、我々はバイドに為す術なく滅ぼされることになる。

ここにいる皆さんも衛星軌道上から彼らの戦闘を観察しているとありますが、バイドに汚染されたと思わしきBETAは明らかに行動パターンが攻撃的になっています。

これがバイドに汚染された結果だとすると、人類の今までの戦術が無効化される可能性もあります。

だからこそこの機会を逃す手はありません。というよりはこれを逃せば我々は打つ手がなくなるのです」

そう力説する彼女にその場にいる全員が苦々しい視線を向けるが、反論はなかった。

そして暫しの沈黙の後、消極的な賛成や同意の意見が上がっていき、

それはアメリカですら例外ではない。

佐渡島ハイヴで00ユニットがハイヴのマップデータを始めとして様々な貴重なデータを手に入れた事は、この場にいる人間は全て知っている。この会議はそれだけの権限を有した地位の持ち主達による会議なのだ。

しかし能動的に動くバイドがBETAへの汚染を完了すれば、その

マップデータも役に立たないものになるだろう。

拳句の果てに高レベルのバイド体は宙間戦闘どころか、空間転移すら可能という事実を聞かされると、オルタネイティブ第五計画が発動しても、地球を脱出した移民船団にも追手を放ってくる可能性も出てくる。

こうなってしまうては是が非でもあの客人たちに、バイドを始末してもらおうしかないのだ。

それでもソ連を始めとして、あの未来人達にいらぬちよつかいを出そうとする勢力は確実に存在するだろう。彼らの無駄に高い諜報能力を持つてすれば、たとえ相手がシューティングスターであっても、作戦開始までの猶予が僅か数日であっても、思いもよらない事をしてかす可能性は充分にある。

だからこそ、香月はあえて彼らの帰還を意図的に妨害し、この世界に留まらせて技術を入手するチャンスがあるかのような話を振った。

無論彼らの技術が喉から手が出るほど欲しいのは彼女とて同じ。というかチャンスがあれば彼女自身も自ら進んで動くことも躊躇うつもりもない。だが、同時に意味もなく無謀な賭けをする気がないのも確かだ。

彼女にとって一番理想的なのは彼らにBETA共々バイドを殲滅してもらい、そのまま丁寧にお帰りいただくことだ。

そしてその際、彼らがいくつかの『忘れ物』をしてくれれば上出来だ。

グリトニルそのものを忘れていつて貰えれば一番いいが、まあそれは高望みだろう。だがそこまで行かずとも、R戦闘機が撃墜されてその残骸を回収できたり、グリトニル内部で何らかの物品やデータを回収できればそれだけでも十分な成果になる。

もつとも他の勢力はそれだけでは満足しないだろう。それらの忘れ物を回収できるチャンスがあるのはRに同行する香月博士の子飼いの部隊だけなのだから当然だ。

しかし香月夕呼が意図的にチャンスを作る気はない、と言うと間違いない彼らは独自の行動に出てシューティングスターにいらぬ

ちよつかいをかける。こういった連中の無駄な行動力の高さは侮れない。彼女自身、それを何度か辛酸を嘗めるほどに味わっている。

そしてそんな連中であつても巨大な勢力である以上、これから始める世界規模での陽動作戦において必須である。

だからこそ、香月夕呼は自分からそういったプランがあることを仄めかし、無謀な行動を牽制し、自分の方でそれらの外部工作の類をコントロールするつもりなのだ。

とりあえず、今の所はその策は功を奏しているようだ。これも完全なブラフではなく彼女自身も何らかのチャンスがあれば実行したいと心の何処かで考えている為、説得力が増したのかもしれない。

いくつかの妨害工作の手段が遠回しに提示され、彼女はそれを考慮するような態度を取った。

勿論考慮はしても実行に移すかどうかはまた別の問題だ。

グリトニル突入作戦は前例もない前代未聞の戦闘になる。

作戦通りにいく保証など欠片もなく、準備した工作が不発に終わっても不思議ではない。

そして全てが終わった後に文句を言っても手遅れなのだ。

本来なら彼らもその程度の事は理解している筈だ。だが突然異界の乱入者により戦いの舞台から引き下ろされ、無力な傍観者に成り下がる事を強制された衝撃がそう簡単に治まる筈もない。

言うなればこれら一連の工作は各国のガス抜きでもあり、愚痴であり、自分達もまだ何かが出来るといふ事を証明したいという考えの現れだ。確かに最悪の自体を常に想定し、それに対処するためのプランはないよりはあつたほうがいい。

これらの策が実行出来るかどうかはともかく、そういったことを考え準備することで自分達もあの連中に対抗出来るはずだという気にはなれる。今の香月夕呼にはその気持が何となく理解できた。

(ま、今の段階じゃ大人しく陽動作戦を粛々とこなしてくれるのが、あんな達に確実に出来ることなんだけどね。どうせこの会議の内容も盗聴されてもおかしくないし)

シユーティングスターがこの世界のネットワークに自由に干渉で

きる技術力を有しているのは、転移から僅か数日でオルタネイティブ4計画の責任者である香月夕呼を探し出したことでも明らかだ。

そう言った意味では彼女は最初からこの会議は、シューティングスターに聞かせる為に開いたと言っても過言ではない。どの道ネットワークを利用したオンライン会議の時点でシューティングスターによる盗聴を防ぐ方法はない。

彼らの盗聴を防ぐには出席者が直接一同に会して、物理的に遮蔽された会議室で会議を行うしかないが、今の情勢でそれは余りにも非現実的な方法だ。

結局どういった策を練ろうと最初からバレていれば意味はない。この会議はシューティングスターへの警告も兼ねているのだ。

もし彼らを出し抜ける者がいるとすれば、彼らと直接接触する自分しかない。それすらやる価値があるのか分からない極めて危険な賭けになるが……。

香月がそんな事を考えている合間にも更にいくつかの案が出て、ようやくシューティングスターに対する工作関係の話は終わる。

というよりは恨み節を吐き出して、各国の有力者達の頭が冷えてきたと言ふべきだろう。

出席者達の思考が切り替わってきたと見た香月夕呼は、一番重要な陽動作戦の細部を詰めるべく話を続けた。



オリジナルハイヴに到着してから、彼はひたすら損失した戦力の補充に努めていた。

彼にとつて一番の誤算は共に落下したグリトニルが落下の衝撃でメインフレームの一部が自己防御システムを発動し完全にロックされ、設備の大半が暫くの間使用不能になってしまったことだ。

もしグリトニルの戦力と設備を完全に自由に出来たのなら、一緒に転移してきた中隊規模のR戦闘機群など敵ではなかった筈だった。

だが実際には転移寸前に相対したたった一機のR戦闘機に致命傷

に近いダメージを受け、その傷の修復に全力を費やす羽目になったというこの現実。

しかも悪いことにあのR戦闘機との激戦で、人間で言うところの脳にあたる情報処理システムにもダメージを受けたせいか、自身が有していた各種兵器技術も一部失う事になった。その為、傷を癒やすだけでなく、失った兵器技術の補填もしなければならぬ。

無論それとは別にグリトニルで手に入れた完全な状態の兵器も幾つか保有していたが、それらを収めたブロックの大半は、大気圏降下の際のあのR戦闘機の猛攻で、ブロックごと脱落してしまい処分されてしまった。

後に残ったのは制御権を奪うことに成功したグリトニルの一部の兵装と幾つかの戦闘ユニットぐらいで、その数も少ない。それでもこの星を蹂躪するだけなら釣りがあるが、あのRの群れを相手にするには賭けになる。

この状態をゲーム風に言うなら兵器として大幅にレベルダウンした挙句、武器や装備の大半を失ってしまったところか。

これらの事実を鑑みると、あのR戦闘機部隊は他の部隊とは訳が違う。

奴らは明らかにA級レベルのバイド狩りに特化した狩人の集団だ。

そんな怪物達の相手をするには単に傷を癒やすだけでは不十分。

もっと力をつけねばならない。

もっと数を増やさねばならない。

もっと技術を取り込まねばならない。

もっと戦力を上げねばならない。

あの狩人共は態勢を立て直し次第、すぐにでもこちらを狩りに来るだろう。

それを迎え撃つのに、グリトニルのシステムを解除して戦力を再生産するなど、悠長な事をしている暇はない。

今の彼に必要なのは即座に汚染可能で、支配下における戦力であり技術力だった。

そして幸いな事に彼にとってのうつつの餌の巣が、グリトニル

のすぐ真下に存在した。

有機ベースのロボットと思わしきそれらの大群は、こちらから襲撃を仕掛けるまでもなく、グリトニルの真下にあつて尚原型を留めていた彼らの巢から這い出て、グリトニルの外壁をよじ登つて内部に侵入し——そしていとも簡単に待ち構えていたバイドによつて汚染された。

そして汚染された個体を通じて更に別の個体へと次々と汚染を広げていく。落着して24時間後にはこの世界の人間達が言うところのオリジナルハイヴとその司令部である重頭脳級と呼ばれる個体の汚染と制圧を完了していた。

ただ問題があるとすれば強引な汚染に対して、重頭脳級が大きく抵抗した為、その機能の一部を破損させることになり、結果として世界中の有機ロボットに対する命令権を完全に奪えなくなったことだ。

その為、この有機ロボット群——BETA、と人間たちが呼称するそれを支配しようにも、彼は重頭脳級の権限を完全に行使用することができず、地道に物理接触などを通じて汚染を広げていく羽目になつてしまつたのだ。

当初は彼らの思念ネットワークを通じて世界中のBETAを一挙に支配下に置くつもりだったが、前述の問題のせいではそれは断念せざるを得なくなつた。

今の彼の半端な権限ではそれぞれの巢の直轄の個体群への命令を行う事は出来なかつたのだ。

それどころか各地の巢が、汚染された自分たちの指揮官を奪還しようとして戦力を差し向けてくる事態になつた。もつともそれなら直接接触による汚染支配が可能になるため問題ないのだが、忌々しいRの群れが先手を打つて、こちらに殺到するBETAの大半を殲滅してしまつた為、今はどの巢も様子見に徹している状態だ。

だが全てのBETAの支配が出来なかつたわけではない。

散らばっているそれぞれの巢の直轄の個体への命令は弾かれたが、巢を潰されたり、数が多すぎて巢から飛び出して、巢に属さない群れを何とかコントロールすることが可能になつたのだ。

そしてそれらのいわゆる巢を持たない『はぐれ』というべき群の一部。

この世界の地球で言うところの佐渡島ハイヴからの残党というべき群れが、地上における『R』共の前線基地、正確にはその付近にある極東の基地に襲撃をかけようとしているのを察知して、彼はその行動に対する中止と待機を命じた。

無論、恐怖からではない。

碌な強化も受けていない、素のままのそれらではRに敵うわけがないと彼は知っていたからである。

故に、彼はそのBETAの群れに、現地で入手し強化を加えた大型輸送用有機ユニットと、世界中からかき集めたさらなるはぐれBETAの群れを援軍として送り込み、その援軍の到着と同時に襲撃をかけるように命令を下した。

既にオリジナルハイヴと呼ばれた場所は、バイドによって汚染された有機ロボットの改造工場と化している。

特にG元素と呼ばれる希少物質が大量に保存されていたのも彼にとって好都合だった。

BETA達からすれば本星に送る貴重な資源かもしれないが、知ったことではない。これ幸いとばかりに大量の光線級属を生産していた。

今回の襲撃は、この『工場』で生み出した新型兵器の実戦テストと、この世界の人類の対処能力を試す意味合いもある。

当初はこの世界の地球人如き、Rを駆る人類に比べれば脅威度は低いという認識をしていたが、世界線が違えど仇敵たる地球人には変わりはない。

それを彼は重頭脳級から手に入れた人類の情報から理解しつつあった。

OOユニット。

戦略機凄乃皇。

G弾。

これらは明らかに21世紀初頭の地球が持っているいい水準の兵

器ではない。やはり時代は違えど地球人は侮れないということだ。

単体では自身の敵ではないが、これが22世紀の兵器であるR戦闘機と接触した時、彼にとって都合の悪い形での化学反応が起きる可能性がある。

故に叩く。

どんな時代であろうが、どの次元であろうが、彼は地球人に対して手を抜くことはない。

今までも。そしてこれからも。

そしてこの地球とR戦闘機を叩き潰した後は、グリトニルの技術を完全に解析して宇宙に飛び出し、この次元の宇宙中に増殖している有機ロボットの創造主とやらを滅ぼし、その力と数を我が身へと取り込む。彼らが運用するG元素は、時空間干渉に持つてこいの性質を有しており、この技術を解析すれば偶発的な要素にも頼っていた並行世界間の移動を安定して行うことができるようになるだろう。

その後は取り込んだ彼らと共に、再び元の22世紀へと舞い戻り、その物量でもって今度こそあの忌々しい『R』を駆る22世紀地球文明圏を粉碎するのだ。

これから始まる無限の闘争の予感に、彼は人間で言うところの歓喜とも言うべき感情に身を悶えさせた。



「観測の結果、オリジナルハイヴよりバイド係数をもった個体が移動を開始した」

グリトニル及びオリジナルハイヴを偵察していたエニグマのその言葉に、R戦闘機パイロット達は目を細めた。

この通信はR戦闘機パイロットだけではなく、部隊全てに伝わっており、突入部隊の隊員達全てが手を休めてエニグマの言葉を聞いている。

「目標のバイド係数はCランク。深深度の地下を掘り進みながら、BETAの群れを伴い横浜基地方面へと侵攻中。恐らく横浜基地だけ

でなく、厚木市に落下したD-3ブロックも標的だろう。言うまでもないが、機能が生きているD-3ブロックがバイドに奪われると非常に不味いことになる」

「では横浜基地は見捨てて、D-3ブロックを守るのです？」

そう隊員の誰かが発言し、エニグマはそれに対して首を横に振った。

「いや、それも不味い。まだ不確定な情報しか集まってないが……この横浜基地には00ユニットと呼ばれる高性能量子コンピューターが存在する。

これがどれほどの性能なのか、地球のネットワークを漁っただけでは完全にはわからなかった。余程大事なもののなのか、オフラインのシステムに大半の情報を仕舞いこんでいるようだ。

どういったものか予想はできるが、正確な性能が不明な以上、バイドの手にこれを渡すのは危険すぎる。よって横浜基地にも援軍を出す。

そして戦闘のついでに00ユニットのデータを掠め取ってくるのが理想的だ」

「要は火事場泥棒か」

そう言ったのはミサイル駆逐艦フライバーで整備兵達と自機のR-9C”WAR-HEAD”のシステムチェックをしていたミーティアだ。既に彼の機体は修理も終わり、本来の力を取り戻しつつある。

そんな彼の言葉にエニグマは苦笑して答えた。

「彼らを助ける為に援軍を派遣し、その対価を貰うだけだ。こっそりとな」

「そもそもその00ユニットとやらはそれほど重要なものなのか？」

そう疑問を発したのはR-9Sk2”DOMINIONS”を駆るフレームタンだ。

彼はこここの所、友軍との情報共有の暇もなく、ひたすらハイヴとBETAを焼き払い続けていたので00ユニットの存在意義と性能をあまり理解していない。

「断片的な情報を繋ぎあわせ、それらを部隊の情報士官達に解析してもらった結果、極めて革新的な発想の元に作られており、我々と情報戦を行える程の機能を有している可能性も否定できないという結論が出ている。場合によっては、帰還の際の手土産にするべきだという意見が出たほどだ」

その言葉に艦内や彼らのネットワークに小さな驚きの波紋が広がる。

21世紀初頭の技術で、22世紀の最新鋭兵器と渡り合えるとは俄には信じがたいが、そもそも自分たちも22世紀の技術を元にした兵器で、26世紀の戦闘兵器たるバイドと渡り合っている。

ならそういうこともあるかもしれない、となんとなく皆納得してしまった。

やはりこういう時に自分達という前例があると理解が早くて助かる。と思いながらエニグマは続ける。

このやりとりを00ユニットの開発者である香月夕呼が見ていれば、一緒にするなど叫んでいたかもしれないが。

「ともかく、これから香月博士に警告を出し、D-3ブロックと横浜基地へと派兵する戦力を抽出する。強襲揚陸艦トールと一緒に転移してきたのは不幸中の幸いだった。艦長、トールに搭載しているグリトニル制圧用の機動歩兵部隊と支援用のRを貸してもらおうぞ」

そういつてエニグマは、トールの艦長に話を振った。彼は軍帽をかぶり直し、答えた。

「……ストームガンナーを使う気か。だが全ては無理だぞ。最低でもグリトニル攻略戦に備えて半分は残しておきたい」

「構わん。彼ら是对バイド戦には使わない。BETAの掃討と戦闘の混乱に紛れて、データの回収をしてもらうのが目的だから危険は少ない筈だ。」

実際に戦場で暴れてもらうのは『ゴリアテ』にしてもらう」

『ゴリアテ』は強襲揚陸艦トールに搭載された歩行戦闘機型のR兵器、TP-2H”POW”ARMOR”II”のコールサインだ。

この兵器は元はパウアーマーと呼ばれる汎用自走コンテナをベ-

スに、R戦闘機の技術をフィードバックして改良した兵器であり、他のRシリーズの例に漏れずフォースや波動砲、異層次元航行システムを装備し、通常のR戦闘機と遜色ないレベルの戦闘力を誇っている。特にこの歩行戦闘機が装備したニードルフォースは閉鎖空間において絶大な制圧力を発揮するため、歩兵部隊の支援には持つて来いの存在だった。

横浜基地のような閉鎖空間内ならば、（因みに横浜基地の内部構造はエニグマによるハッキングと、今まで攻略してきたハイヴの解析によつて概ね判明している）その火力で猛威を振るうことになるだろう。

「そしてD-3ブロックへの援軍は手の開いているRを幾つか向かわせるが、念のため『モール』にも先行して降下してもらおう。敵は地下を掘り進む能力を持っているようだが、『モール』なら地下での戦闘にも対応できる」

このモールもまた強襲揚陸艦トールに搭載されたRシリーズ唯一の戦車型R、T W - 2 ” K I W I B E R R Y ” につけられたコー
ルサインである。

陸戦主体のR兵器はバイド戦に対して効果的ではないと判断され、Rシリーズ開発初期に開発を打ち切られた兵器だが、陸戦以外にもコロニー内戦闘や要塞攻略戦になるとこれが意外と有用であると証明され、幾つかの派生機が改めて開発されることになった。

この機体の最大の特徴はドリル型のフォースを装備していることで、その気になれば陸戦どころか地下を掘り進んで敵陣に侵攻することも可能な性能を有していることだ。

地下深くを移動してくる敵を迎え撃つのに、これほど適した機体はあるまい。

それを理解したのかトールの艦長も特に何も言わなかった。

「では、モールとゴリアテは出撃の準備をしてくれ。機動歩兵部隊の編成はそちらに任せる。制圧部隊の降下準備にはどれぐらいかかる？」

「グリトニルに突入するつもりだったから元々準備は万全だ。30分

「以内には出撃可能だ」

「なるほど。だが、早々に援軍を出してこちらで全て片付けてしまつては、横浜基地に制圧部隊を送り込む口実がなくなる。戦場が程よく混乱した所で降下させるとしよう。出撃のタイミングはこちらで指示する」

「了解した。それにしても随分なやり方だな」

「それはお互い様ということにしておくべきだな。向こうも向こうでグリトニルの次元カタパルトの破壊だのと言った悪巧みをしてるんだ。こつちも悪巧みの一つや二つしても文句は言われんだろう」

地球側の各国の会議の内容は、オンライン会議だったこともあって当然の様にエニグマが盗聴し、その内容はグリトニル突入部隊に筒抜けだった。

もつともその程度で彼らがこの時代の地球に対して悪感情を抱くことはない。代わりに好感情も抱くこともなかった。

出た感想はまあそれぐらい考えるのは当然だろうな、という冷めたものだった。仮に自分達が彼らの立場になつてもその程度の事は考えるだろう。

次に発言したのはナスストrend級ミサイル駆逐艦フライバーの艦長だ。

「こちらからも少しいいか？ 軌道上に配備された衛星を通じて米国がこちらにコンタクトを取りたがっている。グリトニル落下の際に衛星の通信システムに割り込んで警告を飛ばしたから、そこから接触できると踏んでいるのだろう。」

無視することもできるが……ある程度の情報交換ぐらいはするべきじゃないのか？」

この地球連合軍グリトニル突入部隊は、確かに政治的な枷を嵌められることを嫌っている。

しかしだからといって交渉の窓口を本当に香月夕呼一本に絞るほど、物ぐさというわけではない。

本格的に交渉する暇がないからそうしているだけで、万が一のこと考えるとこの手のルートは幾つか確保しておいたほうがいいだろう。

それはフライバーの艦長だけでなくエニグマや、突入部隊の情報士官達の一致した意見でもあった。

「そうだな……。こちらとして彼らが使うG弾にも興味がある。こちらがハイヴを陥落させた時、G元素もいくらか回収したことだし、こちらの戦力を餌にしてG弾の情報を頂くのも悪くない。」

それに何より、我々が目撃したG弾の威力ならバイドを殲滅することとは不可能でも、ダメージを与え消耗させる程度のことは充分可能だ。

折角の機会だ。彼らにはグリトニル突入の前に秘蔵のG弾を吐き出して貰うことにしよう」

そのやり方に呆れたミーティアがエニグマに尋ねた。

「その話、横浜の魔女にもするの？」

「いや？　なんで？」

「……だと思ったよ」

彼は肩をすくめると再び愛機のコクピットに潜り込み、整備の続きを始めた。

やはり人間が絡むと面倒だ。自分はバイドを殺すことだけを考えるのが性に合っていると考えながら。

十一話 武装

「横浜基地にバイド襲撃の可能性ありですって……?!」

『Y』に滞在する地球連合軍の使者——マルトーと呼ばれるその男の発言に香月夕呼は目を見開いた。

『Y』からの突然の呼びかけに何事かと思い通信を開いたが、開口一番予想だにできなかったことを聞かされて硬直する。

バイドにコントロールされたと思わしきBETAの群れが地下を掘り進みながら、この横浜基地を目標しているというのだ。

数は現状で推定4万。更に増える可能性もある上に、BETAと共に進むC級レベルのバイド体の存在を感知したという。

その事を聞いた香月夕呼は一瞬本気で横浜基地の放棄を考えたほどだ。

何しろ現状の人類はBETAはともかくバイドへの対抗策は全くと言っていいほど、出来てはいない。

今のところ彼女の子飼いの部隊であるA-01が地球連合軍の装備の引き渡しと新しい装備の運用の仕方を学ぶ為、『Y』——彼らの言うところのグリトニルD-3ブロックに出向いているが、まだ彼らの装備を本格運用出来るようになるにはもう少し時間がかかる筈だ。

そんな彼女の考えを覆すかのようにマルトーはあっさり言う。

「君の部隊ならもう既に実戦に投入しても問題ないレベルに仕上がっているよ。通常のBETA程度なら、相手にならないぐらいには戦闘力が向上しているはずだ」

予想以上の展開の早さに香月の目が見開かれる。

確かに尋常ではない技術力を有しているとは思っていたが、ほんの2、3日で戦術機を実戦可能なレベルの改修が出来るとは想像もしていなかったのだ。

改修作業の過程は本来逐一報告させるつもりだったが、地球連合軍側は機密の問題からそれを拒否。密かに通信をしようにもジャミングまで張られて、現地のA-01とは今まで一切の連絡が取れなかったのだ。

「それほど難しい改修をしたわけじゃない。なにしろ戦術機にD-3ブロックに残っていたR戦闘機の電磁投射砲と誘爆ミサイルの弾頭を利用したグレネードを持たせ、兵装への電力供給用に外付け式バッテリーを背負わせただけだからな。規格の違いがあるから互換性を持たせるためにいくつかパーツを新規開発しなければならなかったが、D-3ブロックに整備用に作られた高性能な部品製造システムが壊れずに残っていたのが幸運だった。

この改修によって、戦術機一機辺りの攻撃力は最低でも1300%は向上し、バッテリーの余剰電力によって戦術機の電磁伸縮炭素帯の出力も300%増しになった。というよりはこれ以上電磁伸縮炭素帯の出力を上げると逆にオーバーヒートして断裂する恐れがある為、最大300%でリミッターを付けさせて貰ったわけだが。

改修に対応するための機体側のドライバやOS関連も、こちらのほうでアップデートしたから、今までと同じ感覚で扱えるようになってる。

ただ、これでも低レベルのバイドはともかく高レベルのバイドには対抗できない。よってそちらは我々の方で援軍を出して始末する。バイドの襲撃といっても大半の戦力はバイドにコントロールされただけの従来型のBETAが殆どだ。この時代の戦力でも充分戦えるだろう」

なんでもないように語るその内容に香月は目を見開いた。彼の言うことが本当なら、A-01の不知火はもはや既存の戦術機を範疇を超えた戦闘力を手に入れていることになる。

だが、本来なら喜ぶべきはそのその内容に、香月夕呼は微かに不信感を抱いた。

余りにも話がうますぎる。彼らが親切すぎる。

何かあると女の直感が叫んでいたが、この状況下ではそれを無下に断るわけにもいかないのも確かだった。

「ありがとうございます。そちらのご厚意ありがたく受け取らせて頂きますわ。それで具体的にはどういった迎撃態勢を取るおつもりですか？」

「当然だが我々としてはこのD―3ブロックを最優先で死守する。だがA―01部隊はそちらに一足先に戻らせるとしよう。バイドも恐らくこちらを優先して攻撃を仕掛けてくる筈だからこちらが粗方片付いたら、そちらにも援軍を送る。それまで持ちこたえてくれれば充分だ」

「どれぐらいでそちらの決着が付くか聞いても？」

「長くて数時間。短ければ数十分と言ったところか。バイドも我々の存在には気がついていだろうし、半端な戦力は送ってくるまい。そちらのほうに先に危機的状況に陥ったら、一旦基地を放棄して撤退したほうがいいかもしれんな」

（簡単に言ってくれるわね……。反応炉のある横浜基地をそう簡単に捨てられる訳がないってのに……！）

或いは彼らは横浜基地の00ユニットの事も感じており、カマをかけているのかもしれない。

不快感を飲み込み、香月夕呼は当たり障りのない返答を返した。

「いえ、あの横浜基地は人類にとつての重要拠点。貴方方の援軍が来るまでなんとか持ちこたえてみせますわ」

「君たちの期待に答えるようにこちらにも迅速にカタをつけるよ。我々としても君たちが有するXG―70dにも期待している。あの機体は改修によつては充分バイド戦に耐えうるスペックを有している。」

あれを我々の技術で改修すれば例え我々が帰還した後も、この世界のBETA共など鎧袖一触で蹴散らせるようになるだろう」

それは必ずXG―70dを守りきれ、という念押しのように香月には聞こえた。

しかしそこに彼女は小さな違和感を感じた。彼らはXG―70dに拘っているように見えるが、それはブラフで他に本当の目的があるように思える。

確かに凄乃皇は、00ユニットの拡張モジュールであり、その派手な攻撃力により同時に00ユニットの存在を外から隠す為の存在でもある。

その為彼女は彼らから国連の兵器の改修の話になった時、XG―7

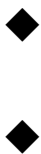
0bの情報は渡したが、その制御システムである00ユニットの事は一切話していない。

そういった意味では彼らがXG-70dに注目するのはありがたいが、果たして本当にそうなのだろうか？

人類の切り札であるこの00ユニットの存在は、最重要機密であり具体的な情報はすべてオフラインのシステムにしまつてある。勿論概要自体は国連の上層部にも伝わっているため、そこから彼らがその存在に気がついていてもおかしくはない。

だがそれを彼女から聞くわけにも行かない。

今の彼女に許されるのは、彼らから渡されたBETAとバイドの侵攻ルートを元にこの横浜基地をどうやって守るかという思考のみだった。



厚木市 D-3ブロック コードネーム『Y』

『というわけだ。A-01の諸君、君たちの戦術機の改修作業と運用テストは一旦終了だ。名前は……ありきたりだが、不知火改とでもしておこうか。先ほど話した通り、現在このD-3ブロックと横浜基地にバイドにコントロールされたBETAが向かっている。こちらは我々に任せて君たちは古巣を守りに戻るがいい』

D-3ブロック内部の広大な空間にスピーカーを通じて、おなじみとなったマルト-1の声が響き渡る。

その言葉を聞いたA-01部隊の隊員達は不信げな表情に顔を歪めるが、それも当然だろう。

彼とはほんの数日の付き合いでしかないが、A-01の隊員はマルト-1の顔も見えていない。彼はこのブロックの奥深くにある管制室に常に籠もりきりでその姿すら見せなかったのだ。

ただ交流が一切ないというわけではなく、兵器改修に関してこちらの意見を求めてきたり、バイドの生態やバイド戦に有効な戦術をこちら

らに教えたりと全く何もしなかったというわけではない。

それ以外にも改修された戦術機の運用テストにアドバイザーとして付き合ったりと、有能な人物であることに疑いようはない。

ただ、それらのコミュニケーションは全て施設内放送や強化装備の通信機越しに行われていた上、通信も音声オンリーの為、彼の顔すらわからない。

交わす言葉の内容も極めて実務的な内容ばかりで、趣味やプライベートの話は一切せず、精々が会話に微かなユーモアを乗せる程度で、彼の人物像もまともに掴めなかった。

勿論彼も正規の軍人であるわけだし、単にお固い性格であるという可能性もあるが、ここまで来ると意図的に自分の情報をシャットアウトしているのが明白である。

それに加えて更に薄気味悪いのがヴァルキリースの戦術機の改修を担当した、彼らの本隊から送られてきた数十人のエンジニアによる技術チームである。

彼らは全員が装甲服としても通用しそうなフルフェイスのエンジニアスーツを着込んでおり、その素顔を窺い知ることができない。

彼らもまた、必要以上の交流をするなどという命令を受けているようで、一方的に戦術機の改修プランをA-10部隊に示した後は、黙々と戦術機の改修作業に取り組んでいた。

途中、改修した戦術機の運用テストと微調整の為、戦術機に組み込まれたシミュレータープログラムを使うことになり、その際何度か意見のやりとりもしたが、これもまた徹底的に事務的なことしか喋らなかった。

(何だか気持ち悪いんだよなこいつら……。実は全員ロボットであるマルトーって奴はAIだったと言われても驚かないぞ)

そう言った感想を白銀が抱くのも無理のない話だった。

当初彼はSFのような装備を持つ未来人達と話が出来るということもあり、舞い上がり好奇心たっぷりの質問を投げかけたりしたものだ、それに対する彼らの反応は、

「我々は君たちと世話をしにきたわけではないし、我々の情報は必

要なもの以外一切君たちに渡すなという命令を受けている」

という冷たいものだった。

その余りに突き放した対応にA―01の隊長である速瀬中尉は大いに憤慨したようだが、流石に隊長という立場もあり、それを表に出すことはしなかった。ただその内心の怒りは白銀にも伝わった程で、いつ爆発するのではないかと白銀は気が気でない。もつともそれは彼女の隊長としての責任感と能力を考えると流石に大きなお世話だろうが。

白銀の鼻屑目もあるかもしれないが、A―01の隊員達は魅力的な女性ばかりだ。自分だってコミュニケーション能力はそれなりに高いほうだという自負はある。

にも関わらず、一切のコミュニケーションを断ち、ひたすら黙々と作業に従事する彼らからは何処か非人間的なイメージを感じてしまう。

しかしそんな不気味な連中だが、その能力面に疑問を抱くものはいない。

戦術面や運用面で疑問に思った事に対してはマルトーが的確に答えてくれるし、彼らに改修された戦術機のスペックを見た時は誰もが目を疑った。

シミュレーターで性能を確かめてもまだ半信半疑であり、実機を使った運用テストでこのD―3ブロックの外の市街地で実際に機体を動かした時は、武は思わず歓声を上げたほどだ。

改修された不知火の一番の変更点は突撃砲の代わりにメインウェポンとして提供されたR戦闘機に装備されているという口径30mの電磁投射砲。これは元はR戦闘機用の装備だが、技術チームが保持用のグリップや電気信号をやり取りをするための幾つかのパーツをD―3ブロックの設備であつという間に作り上げ、それを組み込みライフル型の形状にすることによって、戦術機にも運用が可能になった物だ。

口径こそ戦術機用の突撃銃より小さいが、その弾丸の初速は秒速20kmを軽く越える。

しかも電磁投射砲であるため、火薬を使用せずに発射するのでこれだけの初速にも関わらず反動は火薬式の砲に比べると遥かに小さいのだ。

それでもこれは戦術機でも反動を抑えられるように弾速を調整した結果であり、本来の初速は秒速100kmを遥かに越えるのだという。しかしそれもよく考えると当然だろう。元々R戦術機は秒速数百kmという速度で宙間戦闘を行うのだ。それを考えると秒速100kmも出ないような兵器等、搭載する意味が無い。

いくら発射した弾丸に自機の速度が上乘せされているとはいえ、R戦術機は慣性制御による不規則な戦闘機動をするのだ。そんな弾速の遅い兵器では下手したら、自分の撃った弾丸に自分で追いついて当たってしまうという間抜けな状況も起こりうる。

しかし大幅に弾速を落とされているとはいえ、これならば突撃級の外殻や要塞級の装甲も容易く撃ちぬくことが可能で、腕のいい衛士なら一発で、狙いが適当でも数発も当てれば確実に倒す事ができる。

更にこれらのリミッターは機体側で調整可能な為、状況によっては衛士の判断でより高初速で撃つこともできる。

その場合、機体の腕がもぎ取られる程の反動を覚悟しないとイケないだろうが。

そしてこの電磁投射砲は火薬を一切使わない為、装薬も不要。その為弾丸も小さく、その結果装弾数が増え、戦術機用の突撃銃の装弾数を凌駕するほどの弾薬を装填できる。

更にそれに加えて技術チームがD-3ブロックの生産設備を使つて、戦術機用の電磁投射砲の予備弾倉も複数作ってくれた。

これと電磁投射砲の威力も相まって戦闘中に弾切れする心配は、ほぼないと言つてもいいだろう。

恐らくこれが弾切れになる程の激戦なら、先に機体かパイロットが音を上げることになるのは間違いない。

加えて使い捨ての投擲式誘爆爆弾も幾つか提供してくれた。発射機がないため、戦術機の腰等に下げ、必要になったら爆弾についたグリップを掴み、腕を使って投擲するという仕組みになる。その形状は

かつてドイツ軍で使用されていたポテトマッシャーと呼ばれる柄付手榴弾によく似ていた。元々はR戦闘機用のエネルギー集束技術を応用した、指向性波動粒子による投下型誘爆式ミサイルの弾頭部分と
いうことだ。

爆発範囲はS-11に比べると控えめだが、それでもかなりの広範囲を焼き払うことができる。しかも着弾と同時に炸裂するプラズマ状の波動エネルギーは指向性を持って敵に襲いかかる為、投擲した機体に被害は及ぶことはない。

この高エネルギーの津波の射程は200メートルほどで、その威力は低レベルのバイド体なら跡形も残さず消滅させるらしい。

市街地で試し撃ちした時は、着弾と同時に発生した濃緑色の波動粒子の洪水が、火砕流のようにビル数棟を纏めて飲み込んでしまい、その光景に誰もが絶句したものだ。

その後マルトーから、これを決められた手順以外で解体し、解析しようとしたらその場で炸裂する安全装置が付いているから取り扱いは気をつけるようにと、思い出したように注意を受けた。

マルトー曰く、バイドに奪われた時の為のセキュリティ上のシステムのことだが、どう考えてもこちらで解析した場合に対する警告である。

それ以外にも電磁投射砲の電力を供給するために、戦闘機の背中に装着された箱状の外部バッテリーも思わぬ副産物をもたらしてくれた。

高性能バッテリーの余剰電力により戦闘機の筋肉である電磁伸縮炭素帯の出力が飛躍的に向上し、限定的ながら跳躍ユニットも使用せず、脚力だけで立体的な機動が可能になったのだ。

無論長距離の飛行には従来通り跳躍ユニットを使う必要があるが、市街戦やハイヴ内のような足場がそこら中にある空間なら、跳躍ユニットを使わずに脚部だけで三次元戦闘を行う事が可能になり、結果として戦闘持続時間が大幅に増えることになった。

注意点としては大型のバッテリーの装着によって機体バランスが少々変わったことぐらいだが、OSに修正と電磁伸縮炭素帯の出力の

大幅な増加によって、崩れたバランスをパワーで抑えこむ事が可能となり、さしたる問題にはならなかった。

問題があるとすれば想定を超えた負荷を電磁伸縮炭素帯にかけるので劣化が早まり、数回の戦闘で機体のオーバーホールを行い、全身の電磁伸縮炭素帯そのものを丸ごと交換しなければならないということだ。ただこれも横浜基地の防衛戦とグリトニル突入戦の2回の戦闘ならギリギリ耐えられるだろうという結論を技術チームは出していた。

並みの衛士ならばこんな機体運用の変更には簡単についていけなだろうか、幸いな事にこの仕様はX M 3に慣れた衛士との相性がよく、A-10の隊員達は数回のシミュレーター訓練とD-3ブロックの外での市街戦演習ですぐに機体の特性を掴み、乗りこなしてしまっただ。

その中でもっともこの仕様に順応したのは、仲間達から常日頃から宇宙人だの変態機動だのといった評価を受けている白銀武だったのは言うまでもない。

これらに加えて、バイド係数を検出するための特殊センサーを取り付け、更にバイド汚染を防ぐ為に、戦術機の全身に特殊な対バイドコーティングも行った。外見的には全くわからないが、このコーティングは対レーザーコーティングとしての役割も持っている為、対レーザー防御力が5割程上がったということだ。重光線級相手では気休めだが、光線級相手にならかなり心強い。

「とにかく現在、急ピッチで君たちの不知火改の出撃準備を進めている。予想されるB E T A及びバイドの到達時間は半日後。もうすぐ全ての準備が終わるので、出発の準備をしておいてくれ。

今はまだ横浜基地に置いてあるX G-70dも改修する予定になっっている。しっかり守ってくるんだな。

君たちが帰ってくることを祈っているよ」

珍しくこちらを気遣うような言葉を投げかけてくるマルトーに、速瀬水月が楽しげに返した。

「あら？ 私達のこと心配してくれているの？」

「君たちというよりは改修した戦術機のほうを心配している。ここ数日、技術チームには無茶をさせたのに、いきなりの実戦で撃墜されては気の毒だからな。死んでも構わんが、その場合機体のデータだけは回収して持ち帰ってくるように」

「……そんなことだろうと思ってたわよ」

眼尻を尖らせた速瀬が呻くように言ったが、やはりマルトーは何処吹く風と言った具合だ。

「どの道この程度の相手で苦戦するようでは、バイドとは戦えない。君たちにとつてもいい経験になるだろう。こちらから言えるアドバイスは今までのBETA戦のセオリーを過信するなということだ」

「……どういうこと？」

「言葉通りの意味だ。例えばBETAの光線級は決して味方誤射をしないとのことだが、バイドはそんなにお上品じゃない。今回のBETA群がバイドにコントロールされているとしたら、そんな制約はないと思え。奴らは友軍ごと敵を薙ぎ払うなんてことは当然のようにしてくるぞ。」

それとオリジナルハイヴ付近での間引きをしている友軍からの報告によると、いくつかのBETAを合体させた奇形のBETAが発見されたそうだ。どれも即興で作られたようでバランスも悪く、オリジナルよりも性能が悪かったそうだが、思いもよらない攻撃を仕掛けてくるものもいるだろう」

「なるほど、さしずめ合成級^{キメラ}ってところね」

「今回はバイド体そのものは殆どいないようだが、それでも常にバイド係数探知機には注意を払っておけ。バイド係数が検出された個体が現れたら近接戦は避けるように。正確には返り血や体液を浴びるようなことは極力避ける。倒したら死骸はグレネード、なければナームや焼夷弾で徹底的に焼き払え。低ランクのバイド体ならそれで充分消毒できる。」

これは横浜基地の連中にも伝えておくが、徹底しろ。人間が汚染されて怪物化して襲ってくる光景はなかなか堪えるものがあるぞ」

「……肝に銘じておくわ」

マルトーからのアドバイスは淡々としているが故に、妙な凄みがあった。この言葉が確かなら彼もまた汚染された人間や友軍との交戦経験があるということなのだろう。

そこにマルトーのほうに小さな電子音が鳴り響く。

「フムン。戦術機の準備も終わったようだ。では行ってきたまえ。後々我々の援軍も向かう。生きて戻ってこれたら、甘味の一つでも奢ってやる。レトルトだがな」

「あら。それは嬉しいわね。ここで出たレーション、美味しかったもの。期待させてもらうわ。——皆、聞いたわね！ 生きて戻ってこれたら、甘いもの食べ放題よ！」

その言葉にヴァルキリーズのメンバー達が歓声を上げる。

歴戦の衛士である前に彼女達も年頃の乙女なのだ。

滅多に口にできない嗜好品への衝動に突き動かされたのか、出撃準備をしていた彼女たちの動きは更によくなくなり、あつという間に出撃準備を整えて、僅か五分後にはD-3ブロックを出発していった。

それを見送ったマルトーはボソリとつぶやいた。

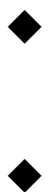
「誰も食べ放題なんて言っていないんだが……」

念のため食料庫の貯蔵を確認したほうがいいかもしれない。元々このブロックは兵器関連の設備の為、食料庫は非常用の物であり規模は小さいのだ。

これは単なる勘だが、もし彼女達の希望が叶えられなかった場合、あの速瀬中尉辺りはこのブロックのかげられた管制室まで乗り込んで抗議してくるような気がする。

「やはり、女を相手にすると何かと物入りになるな……」

そう言ってマルトーは席を立って食料庫へと向かっていった。



「部隊の配置はどうなってますか？」

「現在全ての部隊の配備は完了している。帝国軍の支援に関してはやはり先日の佐渡島攻略戦で受けた痛手が響いて期待はできない。艦

砲射撃による支援が精一杯ということだ」

横浜基地の司令部にやってきた香月夕呼の質問に対してパウル・ラダビノツド司令官は苦々しく答える。

横浜基地では、これから襲ってくる推定4万のBETAの群れに対しての防衛網が張られつつあった。

もうこの段階では日本が各地に設置した振動探知機にも地下を進むBETAの群れの存在が捉えられており、あの地球連合軍——コードネーム『シューティングスター』の警告は本当だったということが証明されつつあった。

「しかし、このままでは基地の陥落は時間の問題だ。例えば君のヴァルキリーズが戻ってきてても実質250機程度の戦術機で、四万のBETAを相手にすることになる」

「彼女達の不知火は大幅に強化されているということですが、それでもやはり時間稼ぎにしかならないでしょうね。」

ですが悪い話ばかりでもありません。BETAがバイドにコントロールされているのなら四万のBETAの内、何割かは確実に厚木市の『Y』へ向かうでしょうし、『シューティングスター』の増援が間に合えば四万程度のBETAなら間違いなく蹴散らせます」

「つまり我々が出来ることが時間稼ぎしかないということか」

「そうなります。彼らはXG-70dにも興味があるようですが、彼ら、あれがBETAに破壊されるような事態は避けたいでしょう。必ず援軍は来るはずです。……問題があるとすれば一体いつ来るかということだけです」

「……最悪、基地内の要所を充填封鎖することも念頭に置かねばならんな」

「ええ。充填封鎖すれば基地の復旧に数ヶ月はかかりますが、どの道BETAとバイドへの決戦はこの数日以内に挑む予定ですし、こちらの突入部隊の最終調整は『Y』で行うので問題ありません。とにかく、00ユニットとXG-70dだけを守ることを念頭におきましょう」「いずれにせよ大勢死ぬことになるな……。ここは我々の星であり、ここは我々の基地であるというのに、状況の主導権を握っているのが

我々ではないというのは何とも情けない話だ」

「今更ですわね。それを言うなら私達は最初の到着ユニットの降下を許した時からずっと主導権を奪われっぱなしです。ですがいつまでも舐められっぱなしというのも性にありません。必ず彼らにもBETAにも一泡吹かせてみせますわ。その為の00ユニットです」

そう言い切った彼女にオペレーターが報告をする。それを聞いた彼女は満足気に頷いた。

「……ヴァルキリーズがたった今帰還したようですわ。とりあえずはシューティングスターによる改修の成果を見せて貰うとしましょうか」

厚木市周辺で二手に別れたBETAの内、半数が横浜基地に到達したのはそれから数時間後のことだった。

十二話 異常

「BETA群、旧町田市一帯に出現！ 数は推定4万！」

「帝国軍の艦隊及びMLRS部隊による面制圧砲撃開始されました！」

白銀武が横浜基地に戻り司令部に入った時、既に戦端は開き始めていた。

予想より早い。本来なら最低でもまだ5時間程度の猶予があったはずなのに。

彼は司令部の中で報告を受けている香月博士を見つけると事情を聞きにいった。

「先生ただいま戻りました。……もう敵が町田市まで到達したんですか？ 予想よりかなり早いじゃないですか!？」

「ああ、戻ってきたの。……そうね。『シューティングスター』が出した予想よりも更に早かったわ。マルチーからさつき連絡があつたけど、日本に近づいてから、BETAの地中での移動速度が異常に上がったらしいわ。お陰こっちはてんやわんやよ。一応準備だけはギリギリ間に合つたけど。」

「それで……戦況はどうなってます？ 向こうで聞いた話だと今回の中には例のバイドは殆どいないってことらしいんですけど」

「そうね。今帝国軍が支援砲撃をしているけど、普通に吹き飛ばされてくれているわ。光線級の迎撃もなし。これだけ見ると単なるBETAの群れに見えるけど……」

その彼女の言葉を遮るように司令部のオペレーターが声を上げる。

「BETA群、ふた手に別れました。約半分が旧厚木市の『γ』へ！ 残り半分が横浜基地へと向かつてきます！」

それを聞いた香月は頷いた。

「一応彼らの言うことも全部が外れたってわけじゃないみたいね。これで少しは楽になるわ。帝国軍には旧厚木市市方面に向かうBETAには支援砲撃の必要はないと伝えなさい。どうせ『γ』の連中が自力で片付けるから時間の無駄だわ」

そう伝えると彼女は改めて白銀に向き合った。

「で、どう？ 向こうの技術で改修された不知火は？ やれそう？」「やれそうなんてもんじゃないですよ！ 動きも火力も別物です！ 下手したらヴァルキリーズだけでハイヴを攻略できそうなスペックになりました！」

興奮する白銀を香月は、玩具を手に入れてはしゃいでいる子供を見るような目で見てため息をついた。

「それはよかったわ。で、4万、いえ今は2万になったBETAをあんた達だけで殲滅できそう？」

あつさりとムチャぶりをしてくる彼女に白銀は顔を引きつらせた。「いや、流石にそれはきついというか……、でも数千ぐらいのBETAなら、正直充分片付けられそうな気がします」

「へえ……。まあいいわ。後で速瀬にも伝えるけど、あんた達は凄乃皇四型と反応炉の防衛に回すわ。とにかく凄乃皇四型と00ユニット、そして反応炉さえ無事なら最悪この基地が壊滅しても構わない。凄乃皇四型の最終調整と改修作業は『γ』で行う手はずだしね」

余りにも淡白なその物言いに白銀は思わず怯んだ。思わず言い返そうとしたとき、再びオペレーターが報告をする。

「旧町田市周辺に更にBETAの増援が出現！ 数は推定4万！ 全て旧厚木市の『γ』へと向かっていきます！」

それを聞いた白銀は冷や汗をかく。もし『γ』が陥落すれば、これらのBETAは返す刀で横浜基地へと襲い掛かってくるだろう。

香月夕呼ですら微かに顔を引きつらせていた。

だが、その心配はすぐに無用となった。

「……『γ』上空から侵攻中のBETAへ向けて、大規模な火炎放射を確認！ ……厚木市方面に向かうBETA群、の先頭集団約1万が消滅！」

オペレーターの言葉と共にメインスクリーンに『γ』が存在する旧厚木市方面の戦場、いや惨状が映し出される。

まだ原型が残っていた厚木市の市街地の大半は今や炎の海に包まれて、そこに侵攻しようとしているBETA共々炭化していた。

その灼熱地獄の上空にはオレンジイエローのR戦闘機がレーザーを回避しながら縦横無尽に空を駆け巡り、地上を走るBETA達に向けて氾濫した川の流れを思わせるような勢いの業火を叩きつけていた。

その余りにも一方的な攻撃に司令部の誰もが言葉を失っていた。戦闘機に火炎放射器をつけるという発想も馬鹿馬鹿しいが、何より馬鹿馬鹿しいのは市街地一つを容易く火の海に沈めるその火力だ。

『Y』を守るR戦闘機はその一機だけではなかった。もう一機、角ばった重装甲に覆われた緑色のR戦闘機もいる。

真っ赤なキャノピー。その機首に接続されるのは重装甲を前面に施されたフォース。そして無骨なスラスタールとエンジンブロックを有するその機体は、機体下部にロケットポットのように無数の穴が空いた筒状のユニットを抱えていた。

緑色のRは高速で旧厚木市を離れ、未だBETAが湧いて出てくる旧町田市の上空に移動すると、その筒状ユニットに青い光を集束させはじめた。

R戦闘機の主兵装、波動砲を発射する前兆だ。

「あいつらの戦闘記録を取って！早く！どんな武装をしているのか見逃さず、しっかりと記録に取りなさい！」

初めて直接見るR戦闘機の戦闘に香月夕呼は、助手のピアティフ中尉に戦闘データの収集を命じる。

香月の命令が飛ぶと同時に、緑色のR戦闘機の下部で集束し臨界を突破した青い光が一気に金色の光へと代わり、爆発した。

凄まじい閃光がモニターを塗りつぶし、映像が復帰したときには景色は一変していた。

地面を走る数千のBETAの群れが、小型種から大型種、果ては要塞級に至るまで文字通り攪拌された挽き肉の如き有り様になっていたのだ。

「馬鹿な……今何をしたのだ!？」

それを見たパウル・ラダビノツド司令官がそう呻くのも無理はない。

閃光が炸裂した時、あのR戦闘機がどんな攻撃をしたのか全くわからなかったのだから。

「さっき撮影した砲撃の場面を出してスロー再生しなさい！」

素早く香月がピアティフ中尉に指示を出す。

そして先の砲撃シーンのリプレイ画像がスローモーションで流され——それを見た司令部の人間は改めて言葉を失った。

スローモーションで再生された緑色のR戦闘機の砲撃は実にシンブルなものだった。

あの機体は機体下部の筒型ユニットに開いた無数の穴から、凄まじい数の光子弾を連続発射したのだ。

モニターが一瞬焼き付いたのは、無数の光子弾幕が発する光量のせいだろう。

そしてあの緑のR戦闘機から発射された光子弾の数は、推測だが数万から数十万にも及ぶ。

一発一発の光子弾はさほどの威力を持たないようだが、それを数万、数十万と一度に叩きつけたらどうなるか。

その答えが挽き肉の山と化したBETAの群れの残骸だった。

「……場合によっては、彼らにも支援砲撃を頼もうと思っていたけど……。やめたほうがいいみたいね。あんなもの撃ち込まれたら、BETA諸共この横浜基地が丸焼けになるか、瓦礫の山になるわ」

遅まきながら、反撃とばかりにBETAが這い出てくる穴や付近の地中から無数のレーザーが飛ぶが、低空を飛行するR戦闘機は、瞬間移動を思わせる超高速移動でそれを回避。

続いて機首に取り付けた光学球状兵装『フォース』から色鮮やかな黄色のフォースレーザーをBETAのレーザーの発射地点の上空に向けて連射。

放たれたフォースレーザーは光線級のレーザーの火点の直上に到達すると、そこで上下に向けて光の雨のように拡散する。炸裂点の直下に存在した光線級達は、その輝くレーザーの雨に撃たれて沈黙した。

軌道変更、特定の場所に到達した後には炸裂し、更に分裂。レーザー

という概念の常識を余りに無視したそれに、香月夕呼の顔が引きつる。あのフォースレーザーに比べたら光線級のレーザーが如何に常識的なことか。

そもそも火力だけでなく、レーザーを平然と回避する機動性も尋常ではない。地上から高度数百メートルという低空を、秒速数十kmという速度で機動するR戦闘機には距離と射角の関係で、光線級属のレーザーも追尾しきれないのだ。

これほどの速度で移動しても衝撃波がさほど発生していないのは、恐らく大気の抵抗を慣性制御システムで抑えこんでいるからだろう。

周りにBETAしか存在しないこの戦場で、彼らが地上への余波を考慮するとは考えにくい。

故に大気の抵抗を抑えるのは、むしろ自機を高速移動させる際に発生する熱や衝撃波から守るためだと推測できる。

逆に大気の抵抗がない宇宙空間では、これ以上の速度を出せるということだ。それは初めて彼らが地球に出現し、大気圏から離脱した時に記録された速度、秒速100kmオーバーという数字が物語っている。R戦闘機が星間戦争で使う兵器だと考えると、本来の速度はこんなものではないはずだ。

R戦闘機の攻防を観察しその性能を推測する香月夕呼だったが、今はそんな時ではないと思い直し、オペレーターに命じてメインスクリーンに自分たちの戦場を映すように指示を出す。勿論戦闘記録の収集は続けるように命令した上でだ。

「ま、この分なら向こうの方は心配するだけ無駄ね。それよりも私達の戦いに専念するとうましよう」

呆然としていた白銀が今更ながらに呻く。

「先生……あのサイズの戦闘機で凄乃皇以上の火力とかレーザーを普通に回避するとか、ちよつとあれ反則すぎませんか？ あんな奴らがいればハイヴなんて楽勝じゃないですか」

「ああ、そういえば通信ができなかったから伝えてなかったわね。あいつらもう既にハイヴを8つほど陥落させてるから。何よ。直接本人達と接触してたのにR戦闘機の性能を聞いてなかったの？」

「え？ マジですかそれ!? いや、あいつら実務的なこと以外は一切喋らないんですよ。あのマルトーって奴の顔も見れませんでした」
「なによそれ。折角情報収集も兼ねて出向させたのにつつかえないわねー。まあいいわ。今はこっちの戦場に集中するわよ。あんたはA—01のブリーフィングルームに先に行っておいて。私もすぐに向かうわ」

そう言っただけで彼女は改めて自軍の防衛網の配置に目を向けた。



R—9DV2 ” NORTH^{ノール}HERN^{ザン} LIGHT^{ライ}S^ツ コールサイ
ン『シユマイザー』は、確認出来る全ての光線級を殲滅した後、再び搭載された波動砲『光子バルカンII』のチャージを開始した。

群れをなして襲ってくる小型のバイド体に対する掃討戦用のRとして開発されたこの機体からすれば、大した対空兵器を持たず、地上を走るしか能のないBETAはまさしくカモだ。

殲滅戦に優れた本機とR—9Sk2 ” DOM^{ドミ}IN^ニION^{オンス}”がわざわざオリジナルハイヴ周辺のBETAの間引きを中断して、D—3ブロックに派遣されたのは理由がある。

ここの護衛を任されたRが過大な火力を有する殲滅戦に特化した機体であるという口実で、横浜基地からの支援を断るためなのだ。

横浜基地にはある程度BETAに乗り込んでもらって、混乱してもらわなければならない。

そうでなくては援軍にかこつけて、00ユニットのデータ収集を目的とする機動歩兵部隊を送り込むことができないからだ。

しかしそれとは別にシユマイザーは、R—9Sk2と自機がここに派遣されたのはある意味正解だったと思いはじめていた。

旧厚木市から湧き出る数のBETAは既に10万を超え、それでもまだ尽きる様子がない。

恐らく、バイドがコントロール可能なBETAの大半をここに送り込んでいけるのだろう。

これほどの数のBETAが相手だと、従来のRでも遅れをとることはないだろうが、殲滅に時間がかかり、D-3ブロックの護衛という目標を達成できなかった恐れがある。

そんな思考をしつつ、彼は機体を急上昇させ、チャージの完了した光子バルカンを地上のBETA達に向けて掃射を開始する。

散布界を最大にした数十万の光子弾は高空から光の雨となって地上に降り注ぐ。

発光し、光の残像を残して光速で撃ちだされる光子弾幕はR-9D V2のNORTH^北HERN^極LIGHTS^光というペットネームの通り、戦場の上空にオーロラのような光景を作り出していた。



「というわけで、私達ヴァルキリーズは、横浜基地内部での防衛を受け持つ。と言っても今の私達の火力をただただ籠もらせるのもあれだしね。部隊の半分はXG-70dを死守、残り半分は遊撃部隊として基地内部での火消しとして動く事になるわ」

ブリーフィングルームでは、A-01の隊長である速瀬水月が、これからの動きを説明していた。

それに対して意見があるのか白銀が手を上げる。

「速瀬中尉。俺達は全て基地内部の守りって話ですけど……。何かそれ勿体なくないですか？ 今の所光線級は『γ』方面のBETAにか確認されてないみたいですし、俺達の改修された不知火なら外の方が本領を發揮出来ると思うんですけど」

白銀の言うとおり、シューティングスターから提供された火器を装備した不知火改の火力と射程は従来の戦術機を遥かに上回る。

機動力も格段に向上しており、閉鎖空間よりも野戦のほうがその火力を存分に發揮出来るだろう。

「それに関しては私が説明するわ」

その言葉と共にブリーフィングルームに香月夕呼が現れる。

彼女の目には隠し切れない疲労が浮かんでいた。

「先ほど、こちら側にも光線級属が現れたわ。しかも光線級じゃなくて重光線級が多数。」

あいつらのせいで防衛線の部隊の4割がついさつき消滅して、生き残った部隊は慌ててメインゲート内部に退避してる」

「な……」

余りにも大きすぎる友軍の被害に、白銀のみならず、ヴァルキリーズの全員が絶句した。

「ど、どうしてですか!? いくら重光線級の火力がやばいってもうまく立ち回れば時間ぐらいいは稼げるんじゃない……」

「その立ち回りが通じなかったのよ。あいつらは大型種を前面に押し立てて、自分たちの姿を隠した上で、同時発射して一点に集中させたレーザーで盾にしたBETA諸共こちらの部隊を一気に消し飛ばしてきたの。しかも戦術機や航空機は狙い撃つのに支援砲撃は一切無視してる。要塞級に周りを囲ませることで支援砲撃から身を守ってるから、砲弾なんて撃ち落とす必要がないってことなんですよ。」

おまけに支援砲撃に紛れてそこら中の地中からもBETAと光線が間欠泉みたいに湧き上がってくる始末……、それで手に負えなくなつて撤退させたのよ。分断された挙げ句、空まで抑えられちゃどうしようもないからね」

その言葉でヴァルキリーズのメンバーが思い出したのは、出発前にマルトーから受けたアドバイスだった。

従来のBETA戦の戦法を過信するな。

それはまさしく最悪の形で言い当てられた事になる。

「ちつくしろう！ マジでそんなやり方使つてくるとか反則だろ！」

これじゃ不知火改でもまともにやりあったら消し飛ばされちゃう！」

余りにも従来のBETAとは違う戦闘行動に、白銀は思わず叫んだ。

そもそも光線級という存在は、火力も精度も並外れておりそれ自体が反則的な存在だ。

だが決して友軍への誤射はしない、常に飛行物体を優先して落とすなどと言った性質があり、それはまるで機械のように決して揺らぐこ

とはない。

人類はその愚直なまでの性質を逆に利用して対抗してきたわけだが、今回のBETAにはそれが一切通用しないということになる。

元々光線級は目視以外の方法で敵を捉えている節がある。

地平線で隠され視線が通らないはずの航空機を予め補足して、地平線から姿を表すのを射撃準備をして待ち構えていたという観測データもあるのだ。

故に光線級属からすればレーザーの射線を友軍のBETAが遮つていても、敵を補足できていてもおかしくない。

今までは同族を攻撃しないという制約故に、その異常な探知能力も意味をなさなかった訳だが、その制約が取り払われた時、光線級属にとって文字通り前衛のBETAは、盾であり敵の目を隠すブラインドとして躊躇なく使い潰す事が可能になったのだ。

「そういうことね。シューティングスターの連中も言ってたでしょ？ バイドに汚染されたBETAを従来のBETAと同じに考えないほうがいいって。」

しかもこの戦法だとレーザーを束ねて撃ってくるせいで、重金属雲も突破される可能性が大きくなる。まだシューティングスターによるとバイドは全てのBETAを支配下に置いたわけじゃないって話だけど、もしバイドによるBETAの支配が完了すると世界中でこんな戦法が使われることになる。やっぱりオリジナルハイヴに落下したバイドは絶対に始末しないと人類に勝ち目はなくなるわね」

そう見解を述べる香月に宗像中尉が納得したように呟く。

「……だから私達は、基地内部の防衛に回されたわけですね。重光線級の出力で盾にしたBETAごと薙ぎ払ってくるということは、機体に装備された対光線級用の初期照準レーザー感知システムも反応せず、いきなり遠距離から吹き飛ばされる恐れがある。」

そうなればいくら我々の不知火改でも回避は不可能。ならば射線や敵の出現位置が限られる基地内で迎え撃ったほうがいいと」

その答えに香月は頷いたが、その顔にはまだ苦いものが残っている。

「まあ、そういうこと。でもこの穴熊を決め込む作戦も正直どこまで有効なのかわからないの。BETAは友軍への攻撃は決してしないわけだけど、その友軍の範囲はハイヴといったBETA由来の施設も含まれていると考えられていたわ。」

で、この横浜基地は元はハイヴだから、襲撃をかけてくるにしてもハイヴの壁を破ってくるとは考えてなくて、メインゲートから侵入してくると仮定していた。その仮定が崩れたのよ」

その言葉に、あつと声を上げて珠瀬少尉が反応する。

「ということは……今度のBETAは地下の基地の外壁を破って侵入してくるかもしれないってことですか!？」

珠瀬少尉の言葉の意味に気がついた白銀は、文字通り血の気が引く思いをした。

これはつまりメインゲートさえ死守すればいいという前提が崩れ、下手したら今この瞬間にもBETAが基地の最深部の床や壁を食い破って現れる可能性が出てきたということなのだから。

「そういうこと。今やこの横浜基地は、どこからBETAが現れてもおかしくない状態にあるってこと。あんた達の半分を遊撃に回すのは、モグラ叩きをしてもらうためでもあるの。」

ま、そんな絶望的な顔をしなくてもいいんじゃない? 『Y』のほうが終わったらシューティングスターがこつちにもR戦闘機を回してくれるって言ってるし」

「先生……それってあの厚木市でBETAを町ごと焼き払ってる機体とかですよね? あいつがこつちに來たら俺達この基地ごと蒸し焼きにされると思うんですけど」

この期におよんで尚反論してくる白銀に、香月夕呼はやけくそ気味に叫んだ。

「うっさいわね。そんなのわかってるわよ! あいつらだつて馬鹿じゃないんだから多分その辺はどうにかするでしょうよ。とにかく今すぐあんた達は配置に付きなさい! BETAがこの基地のどこに現れてもおかしくないんだからね!」

『了解!』

香月の言葉にA―01の部隊員全員が返答し、ブリーフィングルームから出て行く。

白銀もそれに続こうとしたのだが、それに香月が待ったをかけた。「白銀。あんただけはまだ話があるから少し残りなさい。……鑑が目覚めたわ。ついさつきね」

「え？ マジですか？ あいつは……大丈夫なんですか!？」
突然の報告に白銀は目を丸くする。

白銀武の恋人でもあり、00ユニットとなった鑑純夏は、数日前バイドやシューティングスターが現れる前日に武と結ばれ、肉体関係を持った後意識を失った。

それは香月夕呼から言わせれば危険な状態ではなく、喜びと安堵の感情がハレーションを起こした結果だと言うが、ここ数日完全に意識を失った状態が続き、メンテナンスベットに入ったままだったのだ。「でも目が覚めた彼女はちよつと錯乱気味になっててね。なんとか霞が落ち着かせたんだけど不味いことがわかったの」

「不味いことってこれ以上まだ何かあるんですか……?」
もう不幸なニュースは打ち止めだと思っていたが、まだまだ先があるらしい。

「彼女の量子電導脳の浄化にはODLって液体が必要なのは言ったわよね？ そしてこのODLなんだけど……実は反応炉由来のものなのよ」

「……ってことは反応炉が破壊されると、純夏はODLの浄化できなくなるってことですか!？」

「ええ、そういうことになるわ。でも大事なのはここから。目覚めた鑑からなんとか聞き出した情報によれば――BETAはODLを通信手段として使ってるってことらしいわ。つまりODLを使って量子電導脳を浄化してた00ユニットの情報はBETA側に筒抜けになってた可能性があるってこと」

「な――」

最早白銀は言葉もでなかった。人類の最終兵器でありBETAに対するスパイとして創りだされた00ユニットが、逆にBETAのス

パイとして利用されるかもしれないというその事実には。

「でも、悪い話ばかりじゃないわ。こちら側から情報を抜かれることは逆にこっちから向こうを覗き見る事も出来るということ。鑑は逆にこちらからBETAのネットワークにアクセスして幾つかの情報を引き出すことに成功したの。……その結果、向こうから『覗かれ』てちよつと発狂しかけたらしいけど、なんとか正気を保つことは出来たみたい」

「……向こうから覗かれた程度で発狂までするものなんですか？」

疑問を口に出した白銀に香月夕呼は呆れたような顔をした。

「あんたね。今BETAのトップにあるオリジナルハイヴは一体誰の支配下にあるか忘れたの？」

「あつ！ そうかバイド……！」

「バイドは有機無機どころか人間の精神まで汚染し、バイド化させる。これはあんたも聞いてるでしょ？ バイド化したBETAのネットワークに触れたことで、鑑は危うく汚染される所だったのよ」

「す、純夏は本当に大丈夫なんですか!?!」

「ええ。一応ね。シューティングスターが提供した情報によると低度の精神汚染なら、本人の精神力次第で跳ね除けられる場合があるし、過去にバイドの汚染空間に取り込まれて、精神汚染を受けたR戦闘機パイロットが自力で汚染を跳ね除けて生還した実例も幾つかあるらしいわ。」

正直これが終わったら、改めて検査しないといけないけど……、BETAにモルモットにされて脳髄だけにされても尚、生き延びた彼女の精神力を信じましょう」

「……わかりました。それで純夏はなんて言ってたんです？」

「現在のBETAのネットワークの状態と今襲撃をかけているBETAの戦力を教えてくれたわ。やはりバイドは世界中のBETAの全てを支配できているわけじゃないみたい。大半のハイヴはまだ汚染されずに正常な——っていうのもおかしいけど、従来のBETAのままだそうよ。」

そしてここを襲っているBETA群は、単にバイドに命令されて動

いてるだけの普通のBETA。勿論バイドに制限を解除されたせい
か、従来のBETAには見られない動きをしているけど、バイドでは
ないただのBETAよ。

でもそれとは別にあいつらをここまで運んできた未確認のBETA
Aがいるらしいわ。異常な地下の侵攻速度はそれのせいね。

しかもそいつは低レベルだけどバイド化しているみたい。これは
バイド係数を確認したっていうマルトリーの報告とも合致するわ」

「……つまりそいつがゲームで言うところのボスキャラって所ってわ
けなんですね？」

「ボスキャラ……？ まあよくわかんないけど、とにかくそいつが今
回の襲撃の司令塔でもある可能性が高いって話よ。バイドは司令塔
の役割をしている個体を倒すと一気に群れの統率が瓦解するらしい
の。もし見慣れないBETAを見つけたら最優先で叩きなさい。現
場の判断でS-11の使用も許可するわ。反応炉の被害も無視して
いい。」

頭にくるけど……最悪反応炉は破壊されても、あいつらに頭を下げ
てどこか適当なハイヴを制圧してもらって譲ってもらうって方法も
あるもの」

どんな対価を請求されるかわかったものではないけどね、と彼女は
呟いた。

ともあれ状況を把握した白銀は力強く頷いた。

「わかりました。とにかくこのバイド化した未確認のBETAを叩け
ば、少しは事態が好転するってことですね。そいつはどんなやつなん
です？」

「それはわからないわ。鑑が奴らの情報を引き抜けたのはほんの一瞬
の時間でしかなかったらしいの。しかもそれ以上奴らのネットワー
クに触れてたら完全に汚染されてたって話で、入手出来た情報は穴だ
らけ。でもまあ推測するなら、これだけ多数のBETAを運ぶ事がで
きたんだからかなりの大型BETAだってことは確かなんじゃない
？」

「……まあボスキャラがでかいのは昔からの約束ですしね。今の不

知火改の火力とS-11を使えばなんとかいけると思っています。あつ
そういえばこの話の内容、速瀬中尉には……？」

「鑑が情報を入手したって所は省いてるけど、バイド化したBETA
についてはピアティフの方から伝えてあるわ。遊撃部隊はモグラ叩
きに加えてこのバイド体を叩くのも目的の一つよ。さ、話はこれまで
！ 行って来なさい！」

「……了解しました！」

白銀は敬礼をすると先に行った仲間達に追いつくべく、ブリーフィ
ングルームを走って出て行った。

それを見送った香月夕呼は小さくため息を吐く。

「さて、こっちも司令部の守りを固めないかね……。全くどこから湧
いて出てくるかわからないBETAなんて反則よ反則。

いざとなったら基地全部を充填処理して00ユニットだけでも連
れて脱出するしかないかしら……」

そう独り言を呟きながら彼女もまた司令部へと戻っていく。

BETAが横浜基地内に侵入したという警報が鳴ったのはそれか
ら30分後の事だった。

十三話 防衛

『エニグマより強襲揚陸艦トールへ。横浜基地へのBETAの侵入を確認した。予定通り機動歩兵部隊とゴリアテを降下させる。準備はいいか?』

『トールよりエニグマへ。いつでもいける。機動歩兵は汎用工作機『タクシー』に全員搭乗済み。準備は万全だ。一足先に降下したモールはどうか?』

『エニグマよりトールへ。奴は予定通り町田市の地下で、BETAを運んできたバイド化した大型BETAと交戦中だ。既に3体片付けたが、まだ増援が来るようで手間取っている。モールは恐らく横浜基地戦には間に合わないだろう』

『了解した。トールよりサンピラーへ。降下地点のBETAをそちらの持続式圧縮波動砲で片付けてくれ。その後は作戦終了まで直接支援砲撃を続行。間違っても横浜基地を撃つんじゃないぞ』

『サンピラーよりトールへ。そこまでへボな腕はしていない。目標の選定と発射のタイミングはそちらに任せるぞ』

『……ではエニグマより今作戦に参加する全てのユニットへ。行動を開始する』

◆ ◆
「ちつくしょう! 叩いても叩いてもキリがない! HQ! メインゲートの充填封鎖はまだなのか!」

横浜基地内部は既に戦術機部隊と内部に侵入したBETAとの戦闘が開始されていた。

重光線級の集中射撃によって薙ぎ払われた防衛部隊は最早、地上の防衛線を捨てて、大半が基地内に撤退し、BETAの侵入を防ぐためありったけの隔壁を下し、メインゲートの充填封鎖まで開始した。しかし、完全に封鎖が完了する前に、BETAの一部が横浜基地内に侵入。

かくして横浜基地内部での迎撃戦が開始された。

『HQよりホーク1へ。メインゲートは現在工兵部隊が硬化剤充填

中。手こずっているが、そちらからのBETAの侵入はまだない』

「だったらこの小型種の群れはどこから湧いて出てくるんだ！ もう入ったBETAは全部倒したはずなのにまだ出てくるぞ!?」

「ホーク1！ 右手の外壁を見ろ！ BETAの死体に隠されてるがデカイ亀裂が入ってる！ あそこから戦車級がワラワラ入ってきてるぞ！」

「クソっ！ 全機、120mm！ 弾種は榴弾！ あの穴にぶち込んでやれ！」

その言葉と共に基地の壁に開いた数メートルの亀裂に向けて、戦術機部隊の120mm砲弾が叩き込まれる。

次々と炸裂する120mmの砲弾は這い出てくる戦車級を吹き飛ばし、戦車級が出てくる亀裂を崩落させて埋めてしまった。

「よし、これで暫くは時間が稼げる。ホーク2、センサーを設置して、監視！ またあの穴を掘り返して出て来るようなら蜂の巣にしてやれ！」

「了解……、おい、待て。ホーク1、崩落した外壁を見ろ！ 色が真っ赤に染まって……いや、熱せられて溶けてるのか!? やばい、離れ——」

ホーク2の言葉は途中で途切れた。

真っ赤に熔解した外壁を吹き散らし、壁の向こうから無数の光線が放たれ、彼の機体を捉えたからだ。

凄まじい轟音が横浜基地全体を揺るがす。

『ホーク1!? どうした！ 応答せよ！ 何があった!?』

状況を把握できないヘッドクォーターが慌てて、現場の部隊に声をかける。その呼びかけに答えたのは引きつった声のホーク1の声だった。

「くそ……！ 外の重光線級が今度は地下から侵攻してきた！ 崩落させた壁を消し飛ばしてBETAも通れるでかい穴を開けた！ ホーク2が巻き添えを食らって消滅！」

『そちらから重光線級を排除することはできないのか!?』

「無理だ！ 奴ら壁に穴を開けたらまた奥に引っ込んでいった！ 今

は穴からはBETAが続々と出ている！ あいつらを皆殺しにして重光線級を追いかけると真似が出来ない！」

『……今そちらに遊撃部隊が援軍に向かう！ そちらで穴を監視しつつ、出てきたBETAを徹底的に叩け！』

ヘッドクォーターのその返答に、ホーク1はなんとか罵声を飲み込んだ。

遊撃部隊だと？ この横浜基地は文字通り、穴だらけになり浸水した船と化している。

そして水の代わりに無数のBETAがそこら中から入ってきているのだ。

そんな状況下で遊撃部隊なんて一体何の役に立つのだ。

もう、さつさとこの基地を放棄するべきではないのか———と思っただが、それを判断するのは自分ではない。

そもそもメインゲートも封鎖した状態では逃げることも叶わない。

半ば諦観と共に大穴から溢れ出てきたBETAを迎え撃とうとしたその時、ホーク1は高速で近づいてくる友軍のIFFに気がついた。

この識別信号は———。

「ヴァルキリー1、フォックス3！」

「ヴァルキリー2、フォックス3！」

その言葉と共に凄まじい火線が降り注ぎ、視界内のBETAが全て水風船のように弾け飛んだ。

頑丈な筈の突撃級も、数だけが多い小型種も、一切合切の区別なく正面から粉々に吹き飛ばされたのだ。砲撃でもない、唯の機関砲らしき火器の掃射で。

反射的に火線が来た方に視線を向けると、二機の不知火がまるでバツタのように跳躍ユニットも使わず、脚部の跳躍力のみでBETAの死骸を飛び越えながらこちらに向かってきていた。

「その戦術機！ 穴の前から離れなさい！ 死にたいの!？」

「っ！ わかった！ 全機一旦後退しろ！」

本能的に不味いことが起きると理解したホーク1は、生き残った部

下にも指示を出しつつ、自らも後方へと下がった。

そして入れ替わるように、新たにやってきた二機の不知火、その内の一機が更に前進。手にした見慣れぬ突撃銃を乱射して、大型小型問わず、湧き出るBETAを一瞬で蹴散らして着地点を確保すると穴の前に降り立つ。

「よっしゃー！ じっくりわよー！ ヴアルキリー1！ フォックス1！」

そのフォネティックコードは、不知火改においては搭載された特殊爆弾の使用を意味する。

「え。ちよつと速瀬中尉それって……！」

その事が意味することに気がついたヴァルキリー2——白銀少尉が止めるまもなく、ヴァルキリー1こと速瀬中尉は、目の前の穴に腰から下げた投擲爆弾を複数投擲した。

大穴の中に緑色の燐光を放つ投擲爆弾が弧を描いて消えていき、そして炸裂。

闇に包まれていた大穴の中が濃緑色の光に照らされた。火薬の爆発とも違う、重低音の炸裂音が次々と連続的に響き渡る。

その時、ホーク1は光に照らされた大穴の内部の惨劇を見た。

緑色のプラズマの洪水がBETAが数体通れる程度の広さしかない地下トンネルに流し込まれ、そこに詰まっていた無数のBETAが、エネルギーの渦に飲まれて消滅していく有り様を。

そしてそのプラズマに飲まれて消えたBETA達の中には、あの憎き重光線級の姿もあったのだ。

狭い地下空間で炸裂したエネルギー爆発に耐えられなかったのか、今度こそBETAが掘り進んできた地下トンネルが大規模な崩落を起す。

先ほどの戦術機の120mでは精々入り口を崩すのが精一杯だったが、今の爆発は、間違いなく数十メートル、いや下手すれば数百メートルに渡って崩壊させたはずだ。

しかも重光線級も巻き込まれたとなれば、またこのトンネルを掘り返すのは如何にBETAと言えどそう簡単にはいかないだろう。

「んー！ スカツとするわね！ さっすがシューティングスター製の誘爆爆弾だわ！ この調子で奴らが出てきた穴をどんどん埋め立てて行くわよー！」

「ちよつ、ちよつと速瀬中尉！ あんなもん使うなら先に言ってくださいよ!? 下手したらこの基地まで崩落してたかもしれないんですよ!？」

「大丈夫よ。ちゃんと事前に計算はしてたから。指向性のある爆弾つけてこういう時、ほんと便利よね。S-11も一応指向性は与えられるけど、重いし、そう幾つも装備できないし、衝撃波ばかりはどうにもならないもの。……じゃあホーク1！ 私達は別の穴を塞ぎに行くわ！ 残敵掃討よろしく！ 行くわよ白銀！」

そう一方的に通告すると、その不知火は僚機を伴って、再び例のバツタのような独特の機動でその場を離れていった。

半ば呆然としているホーク1に部下のホーク3が、恐る恐る訊ねる。

「隊長。あいつらヴァルキリーズの連中ですよ？ いつの間にあんなイカれた武装した機体に乗るようになってたんですか？」

「……そんなものこっちが知りたい。とにかく！ まだ生き残りのBETAはいるんだ！ 油断するな！ この状況で死んだらただの馬鹿だぞ」

ホーク1は半ば八つ当たり気味に部下を叱り飛ばすと、まだ僅かに生き残ったBETAの掃討を開始した。

◆ ◆
『シューティングスター』からA-01に貸与された武装は、確かに従来のBETAを物ともしない性能だった。

小口径の電磁投射砲は頑丈な突撃級の甲殻も一撃で撃ち抜き、弾体が至近で掠めた余波だけで小型種を戦闘不能にする。

密集した場所に撃ちこめば大型種だろうと数体まとめて貫通するため、あれだけ脅威だったBETAが最早射的的に見えてきたほどだ。

とは言え、広大な横浜基地を中隊規模の不知火改でカバーするとい
うのも限界がある。

僅かな数の自分たちがいくら敵を倒しても、司令部、XG-70d、
反応炉……これらを落とされればこちらの負けなのだ。

しかも部隊の内半数は、XG-70dの守りの為に動かせない。

今の状況は穴の空いた船に入ってくる水をバケツで外に捨ててい
るようなものだった。もっとも他の部隊はバケツどころか素手で水
を掬って捨てているようなもので、彼らに比べればまだ恵まれて
いる。

「ヴァルキリー1へ！ 今度はB11フロアとB22フロアにBETA
Aが侵入しました！ B11フロアにはヴァルキリー6と7が急行
しています。そちらはB22フロアに行って穴を塞いでください！」
部隊のCPを務める涼宮遙中尉から新たな指示が出る。もうこの
やりとりも既に4回を超えていた。

最初にBETAが開けた穴を塞ぐには、速瀬中尉がやったように誘
爆爆弾を穴に放り込み崩落させるのがベストだとわかってからは、A
-01の遊撃部隊はBETAが横浜基地の壁を食い破って出現する
度に、穴の空いた場所へ急行し、BETAを排除しながら爆弾を放り
込むという作業を繰り返している。

だがそろそろ携行した誘爆爆弾の数も尽きかけてきた。そうなっ
たらS-11でも放り込むしかないが、下手ををすれば横浜基地にも
重大なダメージが発生する可能性も大きい。

「了解！ 行くわよ白銀！ ……あんた例の爆弾はあと幾つある!？」
「残り3発です！」

「こっちは残り2発……。あと5回でこのやり方も打ち止めね。一旦
凄乃皇を守ってる部隊と合流して誘爆爆弾だけでも分けてもらおう
かしら」

「やっぱ最初に景気良く投げすぎたんじゃ……?」
「うるさいわね。私は未来を見据える女なのよ。デブリーフィングと
反省会は作戦後にすればいいの！ 取り敢えずB22まではメイン
シャフトを通って行くわよ。隔壁を破壊しないように武装は電磁投

射砲から予備兵装の突撃銃に切り替え！ あと推進剤は残ってるわね!?!」

「後10回は補充なしで今までのルートを往復できますよ！ メインシャフトの移動以外は跳躍ユニットはほとんど使用してませんかね！」

「じゃあ遙！ ルートまでの隔壁を一時的に開放して！」

「了解！ ……あっ！」

「ちよつと遙!?! 『あっ！』って何よ!? そういうの怖いんだけど何かあったの!?!」

「……90番格納庫の床を破壊してBETAが侵入しました！ 現在宗像中尉の指揮下の元、A-01及び第19独立警備小隊が応戦中！」

ついに凄乃皇が格納されているブロックまで攻撃を受けたようだ。その事に慌てたのはこの世界での実戦経験の浅い白銀武だ。

「速瀬中尉！ 俺達も行ったほうがいいんじゃない!?!」

「いいえ！ 私達はこのままB22へと急行するわ！ あそこには宗像が指揮をとってるし、斯衛の小隊もいるのよ！ 仲間を少しは信じなさい！」

そう言い切った彼女の顔を見て白銀は動揺しかけた自分を恥じた。

（クソっ、確かに速瀬中尉の言うとおりだ！ 皆だって俺達と同じ装備をしてるんだ!?!…！ 今更多少のBETAなんて敵じゃない。俺もいちいち動揺してないで皆を信じて自分の務めを果たさねえと!）

そう考えなおすと、彼は自分に喝を入れるべく叫んだ。

「了解しました！ じゃあさっさと穴埋めを済ませましょう！」

「ええ！ 10分以内に済ませるわよ！ 10分超えたら腕立て200回だからね！」

「もうそういうのはいいですって！」

そんなやり取りをしながら、ヴァルキリーズの二人のエースは進行方向にいたBETAを蹴散らしつつ、横浜基地を上下に貫通する広大なメインシャフトへと飛び込んだ。

メインシャフトの内部にもやはり多数のBETAが存在した。

二人は開きつつある隔壁に飛び込みながら、ついだとばかりに突撃銃で、隔壁に群がるBETAの群れを蹴散らしていく。その中には光線級の姿もあった。

基地の外壁は重光線級に任せ、内部の隔壁は光線級が破壊するという完全な役割分担が出来ている。これも今までのBETAには見られない行為だった。

というよりは光線級属の数が多すぎる。

いや、光線級属が無駄弾を撃たず、味方のBETAを使って隠れることを覚えた為、なかなか撃墜できず、そう錯覚しているのかもしれないがそれにしてもやはり多い。

とにかくBETAの戦術が今までとは全く変わっていることは間違いない。

そこに例えようもない不安感を抱きながら、白銀はBETAに向かって突撃銃を撃ち続ける。

電磁投射砲に比べると物足りない威力だが、隔壁に無駄なダメージを与えないようにするにはこれしかないのだ。

隔壁に取り付いたBETAを排除するこの作業を電磁投射砲で行えば、光線級の代わりに自分たちが隔壁に穴を開けていたことになる。そういった意味でも速瀬中尉の判断は正しかった。

特に光線級は最優先で潰さねばならない。

落下しながら2機は突撃銃で道中にいた隔壁を攻撃中の光線級を撃ち抜きながら、目標のフロアに到達した。

数度に渡って壁を蹴って三角飛びを何度も繰り返してスピードを殺していく。最後に大幅な減速のために跳躍ユニットを一度だけ大きく吹かして、着地した。

通常の衛士と機体ならこの5倍の量の推進剤を使用していたはずだ。

代わりに1回でも三角飛びをしくじれば無残にも激突死の運命が待っていただろうが。

「よし、行くわよ！ とろとろしていると穴を開けた重光線級が逃げちやうからね！」

「了解！」

基地の壁に穴を開けるのは重光線級の仕事だが、これらは自分の役目を終わると、またトンネルの奥へと引っ込んでしまう。その為、穴の空いた直後に、例のプラズマグレネードを放り込むのがベストなのだ。到着に時間がかかると逃げられて、また別のところに穴を開けられてしまう。

そして代わりに浸透してくるのが小型の光線級だ。

これは他の大型種のBETAに紛れて、レーザーを撃ってくるのだが、そもそも小型の光線級では重光線級のように盾になったBETAごと全てを薙ぎ払うような出力は持っていない。

更に閉鎖空間ということもあり、近距離で照準用レーザーからの照射を開始するため、通常の部隊でも辛うじて対応は出来ていたが、人類に占拠されたとはいえ仮にも元ハイヴでしかも友軍への誤射も躊躇うこともなく、レーザーを発射してくる光線級に対する現場の衛士達の心理的プレッシャーはかなりのものだ。

いずれこのままではこの基地が瓦解することは誰の目にも明らかだった。



XG-70d 凄乃皇四型が格納された90番格納庫でも激戦が繰り広げられていた。

突如して格納庫中央の床が崩壊したかと思うと、そこから無数のBETAの群れが溢れだしてきたのだ。

まだ幸運だったのは重光線級による攻撃ではなかったため、初撃でレーザーで消し飛ばされた機体が出なかったことだ。

しかし床という場所に穴が空いた為、他の遊撃部隊のように爆弾を放り込んで、穴を塞ぐことができないという大きな問題があった。下手に例の誘爆爆弾を放り込むとそのまま90番格納庫全体の床が抜ける恐れがあるからだ。

今はまだ不知火改の圧倒的な火力で、穴を包囲し、這い出てくるBETAを片っ端から挽き肉にしているが、いつまで持つかはわからない。

そして通常の武装をしている斯衛の小隊である第19独立警備小隊は、火力がありすぎる不知火改に代わって小型種が弾幕を抜けてきた際、格納庫や凄乃皇四型を傷つけないように浸透したBETAを倒し、ヴァルキリーズの補助に務めている。

最新鋭の戦術機である武御雷を駆る彼女達はこの役割を当てられた時、当初は眉を潜めていたが、不知火改の圧倒的な火力を見てからは特に何も言わず、只々無言で己の役割に徹している。

この不知火改の異常な火力を始めとして疑問などいくらでもあるだろうに、それを口に出さずひたすら与えられた役目を果たすのは流石は精鋭たる斯衛と言ったところか。

「御剣！ 戦車級が抜けたわ！」

「構わぬ！ 後ろには月詠中尉がいる！ とにかく射線を絶やすでない！」

御剣少尉は格納庫の大穴から間欠泉の様に吹き出てくるBETAの群れを、ひたすら薙ぎ払っていた。

電磁投射砲の火力は凄まじく、普段なら絶望しか感じないであろうBETAでできた山をまるで、砂山のように吹き散らしていく。

しかし時間が経つにつれて、格納庫内は粉碎された無数のBETAの肉片で溢れかえり、生きているBETAとそうでないBETAの区別が付きにくくなり、取りこぼしが出始めてきたのだ。

電磁投射砲の残弾はまだまだあるが、このままでは比喻抜きで格納庫がBETAの死体で埋め尽くされてしまう。

果たしていつまで自分たちは時間を稼ぐことができるのか——
そう思った瞬間、一際大きな振動が走る。

そして同時に聞き慣れない甲高い警告音がコクピットへと響き渡った。

その警告音を発しているのはあの『Y』で不知火に取り付けられた特殊センサー、バイド係数探知機である。

それが何を意味することを理解するよりも早く、この場の指揮官である宗像中尉が珍しく焦ったように叫ぶ。

「格納庫の中央の床下からバイド係数の増大を確認！ 全機、穴から

離れて凄乃皇まで下がれ！」

訓練された衛士達は、何が起こるかわからずとも反射的に命令に従って、大穴から後退する。

次の瞬間、穴の中から湧き出るBETAを消し飛ばしながら凄まじい光が放たれ、格納庫のみならず横浜基地そのものを揺るがした。



当然その振動と轟音は横浜基地司令部でも感知していた。

「一体何が起こったの!?!」

転びそうになって咄嗟に机にしがみついた香月副司令が叫ぶ。

それに対して涼宮遥中尉が、素早く基地のセンサーを確認して返答する。

「地下より、高出力のレーザーが放たれた模様です！ 被害は……っ

！ レーザーの直径200メートル！ 最深部の更に地下から放たれ、メインシャフトを拡大するようにしてそのまま地上まで貫通した模様！ 被害状況は現在確認中ですが、90番格納庫を始めとしていくつかのブロックが巻き込まれて熔解しました！」

その答えは信じがたいものだった。

同時にまだ生きている監視カメラの画像がモニターに出力される。そこには横浜基地を地下から撃ちぬかれ、溶け落ちた各所の画像が鮮明に映し出されていた。

表層部のカメラの画像は天井に空いた大穴から日の光まで差し込んでいるのが確認でき、彼女の言葉に嘘がないことが証明されることになった。

「反応炉は無事!?!」

「レーザーの射線に入っていない為、恐らくは……」

その言葉にほっとしながらも、改めて香月夕呼は基地の被害を見て呻いた。

「それにしても地下から地上へ？ 一体どういう出力してるのよ。そんなものR戦闘機でもないかぎり不可能……」

そこまで言いかけた所で、彼女は気がついた。この地球にはR戦闘機以外にもそれをやってのける存在がいることを。

その彼女の推測を裏付けるようにA-01の戦術機と情報共有していた涼宮中尉が叫んだ。

「XG-70d及びA-01の機体は全機無事です！ 90番格納庫を掠めただけで直撃はしていなかった模様！ それと90番格納庫の不知火改に装着された新型センサーが地下よりバイド係数を探知しました！」

それはつまり。

ついにバイドが『来た』ということの意味する。

「どうとうおいでなすったって訳ね……。A-01全機に到達！ 全兵装の無制限使用を許可！ 基地への被害は度外視していいわ！ ここで負けたら全部おしまいよ！」

「了解！……きやあ!？」

涼宮注意が命令を傳達しようとした所に、再び横浜基地に激震が走る。

座っていたオペレーター達はともかく、立っていた香月夕呼は今度こそ耐え切れずに転んでしまった。

「あー！…もう今度は何よ!？」

やけくそ気味に叫ぶ彼女に対して別のオペレーター達が答える。

「横浜基地周辺に衛星軌道上からの高出力光学兵器の着弾を確認！ 基地を包囲していたBETAの4割が消滅！」

「司令！ シューティングスターから通信が入ってきています！」

そのオペレーターの問いかけに対して、この横浜基地の司令官であるパウル・ラダビノッドは副司令である香月夕呼と一瞬だけ目を合わせた。

彼女は尻もちをついた姿勢のまま無言で頷いてくる。

「……繋げ！」

その言葉に即座にシューティングスターからの通信が繋がった。マルトード。相変わらず音声のみで映像は出ない。

『待たせたな香月博士。ようやくそちらに向かわせる援軍の準備がで

きた。現在大気圏内を降下中。後300秒で横浜基地へ到着する。

それと降下に先立って着地ポイントを確保するために衛星軌道上からの支援砲撃を実行中だ。

そちらに向かった援軍はRが二機。

閉鎖空間での戦闘に特化したRが一機。もう一機は輸送機型のRだ。輸送機型に戦闘力はさほどないが、基地内部に浸透しているであろう小型BETAを片付ける為の機動歩兵中隊を搭載している。ついでには横浜基地内部での戦闘の許可を頂きたい』

「ええ、お好きなように。でも早い内にバイドの殲滅をお願いしますわ。私達が全滅する前に」

『先のレーザーはこちらでも観測している。バイド係数もな。折角突入口を開けてもらったことだし、そこから突入させてもらう。それと機動歩兵の一部は司令部への防衛に回そう。そんな訳で横浜基地の詳細なマップデータを頂きたいがいいかね?』

「……涼宮中尉!」

「了解! マップデータ転送しました!」

『確認した。援軍のコールサインは戦闘用Rがゴリアテ、輸送型Rがタクシーだ。機動歩兵部隊とRへの通信権と指揮権を限定的だがそちらに渡す。うまく使ってくれ』

マルトーの言葉と共に、突入部隊のRの詳細なデータがこちらへと転送された。

モニターに出されたその二つのRを見た香月夕呼は、その形状に形のいい眉を怪訝そうに顰める。

「……随分とまあ、愛嬌のある形状してるのね」

モニターには機首の下部に作業用と思わしき大型のロボットアームを付け、背部に輸送用コンテナを背負ったRと、戦闘機というよりは球体に歩行用の足をつけた作業ロボットのような形状をし、装甲を真っ黒く染めたRが映し出されている。どちらも今まで見たR戦闘機のような兵器としての力強さは感じられない。

特に球状の機体の方は、機体正面の大半を眼球を思わせる真っ赤なキヤノピーに覆われていて、力強さよりも可愛らしさを感じるユーモ

ラスな形をしている。

それでもこの機体の上部及び側面は重装甲に覆われており、股間に当たる部分には電磁投射砲らしき砲もついている為、これが戦闘兵器であることに疑いようはない。

加えて他のR戦闘機と同じく機体の前面にはやはり、フォースを装備している。

全方向に無数の棘のようなパーツを付けたそのフォースは、まるでウニを連想させた。

逆にもう一機の輸送型のRにはフォースはない。あくまでこちらは輸送機ということなのだろう。

球状のR戦闘機の機体側面にはパイロットの趣味なのか、力強い字体で『改』という漢字が書かれていた。

それを見た香月は未来の日本ってどうなっているのだろうか、今更ながらに思いつつ、彼らに現在の基地の状態とバイドの位置を伝える為に通信を繋げた。

十四話 母艦

「現状、反応炉、XG-70dは奇跡的に被害を免れています。ですが、地下からバイドが出てきた以上、もう持ちこたえるのは不可能でしょう。現在A-01が交戦していますが、倒せるかどうかは不明です。それでなくとも各所に空いた穴からBETAの侵入が始まっていますので……。」

できうる限り迅速にバイド及びBETAの殲滅をお願いします」

香月副司令はシューティングスターの援軍であるゴリアテと通信を繋ぎ、現状を報告していた。ある程度の指揮権も譲渡されたのとのだが、敵味方の正確なスペックがわからない以上、状況を伝えてここにいる敵を倒してくれという大雑把な指示しか出せない。

もつとも相手もそれも織り込み済みのようで、気にした様子もなく答えてくる。

『ゴリアテより横浜基地へ。そちらの状況は把握している。先行してタクシーを降下させ、機動歩兵部隊を展開、司令部を始めとした非戦闘員の防衛と基地内に侵入した小型種の掃討を開始させる。バイド及びBETAの主力はこちらで叩こう。ただ……』

そこで、一旦通信の向こうにいる相手は口ごもった。

それに疑問を抱いた香月は聞き返す。

「ただ……なんです？」

『それほど悲観する必要はない。貴女の部下は、我々の予想以上にバイド相手にも健闘しているようだ』

その言葉には心からの感嘆が含まれていた。



「バイド係数上昇中！ 奴が登ってくるぞ！」

宗像中尉の警告と共に、なんとか特大のレーザーから生き残ったヴァルキリーズの隊員達が戦闘準備を取る。

90番格納庫の景色は一変していた。

あれだけ散らかっていたBETAの死骸は殆ど無い。

レーザーの余波で発生したプラズマ爆発による衝撃波によって吹き飛んで、格納庫の隅に追いやられているのだ。お陰で視界は良好になったが、良好になりすぎた。

なぜなら格納庫の前半分が消えてなくなっていたのだから。

それどころか格納庫に続く通路なども消し飛び、格納庫の向こう側にあったメインシャフトを大幅に拡張していた。

穴の向こう側には90番格納庫のように壁が熔解し、丸見えになった別の通路やブロックが幾つもあり、表層部で戦っていたであろう別の戦術機部隊が、溶け落ちた通路の端から唾然とした様子でこちらを見下ろしているのが確認できる。どうやらあのレーザーの一撃はこの格納庫を狙ったものではなく、横浜基地を下から撃ちぬく際、たまたま格納庫を掠めただけのようなだった。

逆に言えば掠めただけでこれだ。

あの時、バイド係数を探知した宗像中尉が咄嗟に全機を下がらせたのは正しい判断だった。

あのまま穴の付近で待機していたら、今頃あの特大のレーザーに巻き込まれてヴァルキリーズの大半が消滅していた筈だ。

そして不知火改に取り付けられたセンサーがそれを成した存在が遥か深深度の地下から浮上してくるのを正確に捉えていた。

「バイド係数、11.56……！ 分類……C級バイド！ シューティングスターからのデータにも適合なし。完全な新種か……！」

全機、投擲誘爆爆弾の準備をしろ！ 斯衛小隊はXG-70dの護衛を！」

「了解！」

「承知！」

彼女が指示を飛ばす間に、横浜基地全体を揺るがすような振動が始まった。

それがレーザーによって開けられた地下の大穴から、巨大な何かが登場ってくる予兆なのは明らかだった。

よって宗像中尉は、相手が姿を見せると同時にありったけの火力――

——即ち例の誘爆爆弾を叩き込むつもりだった。

幸いなことに、今までの戦闘では使う機会がなかったので、残弾はたっぷりはある。

その半分の火力を一斉に叩き込めば、余程の相手だろうと始末できる——出来る筈だ。

頬を流れる汗を無視し、宗像美冴はこみ上げてくる恐怖を抑える。

ここで現場指揮官である自分が取り乱せば、部下達に示しがつかない。ましてこの格納庫にいるヴァルキリーズは全て先日入隊したばかりの新入り達なのだ。

彼女以外の先任達は隊長である速瀬中尉を始めとして、遊撃部隊として基地の各所から出現するBETAを個別に叩き穴を塞ぐ為に別行動を取っていた。

彼女達は無事だろうか？ 速瀬中尉と白銀少尉辺りは殺しても死にそうにないが、自分の相棒である風間禱子や彼女のエレメントである涼宮茜は、あの新旧突撃前衛コンビほど危険回避能力に優れているわけではない。あのレーザーに巻き込まれていなければいいが——

そこまで考えた所で、バイド係数探知機が今までで最大の警告音を出した。

もうこの縦穴を上がってきて姿を見せる寸前だ。……今だ。

「全機、爆弾を投擲！ ありったけの波動粒子をご馳走してやれ！」

その言葉と共に、ヴァルキリーズは一斉に、眼前の大穴に向けて誘爆爆弾を放り込んだ。

戦術機の手から投げられた爆弾が次々と弧を描いて穴の中へ消え、そして立て続けに爆発した。

その爆発音は、先ほどのレーザー攻撃にも勝るとも劣らない。先の一撃でダメージを負った構造体から無数の瓦礫や鉄骨が大穴に落下して闇に消える。そして耳に突き刺さる高音の悲鳴が横浜基地に響き渡った。

たった一発で触れるもの全てを焼き払う、高エネルギー連鎖爆発を起こす爆雷を、同時に6発以上放り込んだのだ。

どんな相手であれ——例えあのR戦闘機といえどこれだけの火力を喰らえばひとたまりもあるまい。

これで倒せなかつたら後は核かG弾でも撃ちこむしかない。

だが、そんな宗像の願ひむなしく事態は更に悪化の一途をたどった。振動は一端は収まったものの更に大きくなったのだ。

バイド体の上昇速度が更に上がった証拠だ。

そしてついに『それ』は自らのレーザーで開けた巨大な大穴からその姿を表した。

余りの大きさに遠近感がおかしくなりかけるほどの巨体。

それは一言で言うなら幅150mを越える、巨大なミミズだった。地下に潜っている部分の長さなど考えたくもないが、間違いなく1kmを越えるはずだ。そしてそれにはミミズにはない巨大な器官が先端部にあつた。

それは巨大な口。

自分の全幅とほぼ同じだけの口がそいつの頭部にはあつたのだ。隔壁じみた無数の歯がガチガチと音を鳴らしている。あの歯を使って地下深くを掘り進んできたのだろう。

ただ、先の爆弾の投擲のせいで巨大な歯には無数の亀裂が入り、欠けている箇所もある。それでもまだ致命傷には程遠いといった程度のダメージのようだ。

その造形からみてこれは純粋なバイドではなく、現地のBETAをベースに改造したものだだろう。

これを目撃したヴァルキリーズのメンバー達、それ以外にもカメラ越しに確認した司令部、別の場所からこの巨大な怪物を目撃した部隊全てが本能的に理解した。

今までの世界中で度々起きたBETAの深深度地下侵攻は、間違いなくこいつの仕業だ。

いくらBETAの身体能力が高いとはいえ、時折戦場ではそれだけでは説明がつかない速度で、BETAが地下を掘り進んで奇襲をかけてくるのが今までの戦場では度々あつた。

恐らくはこの未確認のBETAにして、現在はバイドに汚染された

怪物が地下を掘り進み、後から続くBETA達の道を作っていたのだろう。場合によってはこいつそのものがBETAを格納し、長距離移動していた可能性もある。

それらをいち早く見抜いた香月夕呼が、この目標に対して指示を飛ばす。

「このバイドを汚染母艦級と命名するわ！ 絶対にここで仕留めなさい！」

その言葉を合図にしてA-01が攻撃態勢を取り、電磁投射砲の一斉射撃を開始する。

先の爆撃は無駄ではなかったようで、汚染された母艦級の表皮は焼けただれ、焦げている。そこに秒速20kmの弾幕が秒間100発を越える勢いで突き刺さり、焼けた皮膚を耕し、隔壁のような歯にさらなる亀裂を入れていく。

ダメージは確かに通っている。殺せない相手ではない。

もう一度残った誘爆爆弾をぶつけ、最終的にはあの口腔内部に誘爆爆弾を放り込む。それでも駄目ならS-11だ。

宗像中尉がそう思った次の瞬間、目を疑うことが起きた。

汚染母艦級の焼けただれた巨大な口の周りが再生を始め、そこから無数の触手が生えてきたのだ。

そしてその触手の形状は彼女は——というよりは衛士であるならば、誰もが知っているものだった。

「……気をつけろ！ あれは要塞級の触手だ！」

瞬く間に数十本の触手が生み出されると、それらは高速で手近にいたA-01が駆る不知火改と斯衛小隊の武御雷へと襲っていく。

だが、幸いなことにバイド化していても触手の性能自体は、射程距離が異様に長いこと以外は従来の要塞級のそれと大差なく、通常の部隊でも対応可能な速度だった。

電磁投射砲の弾幕が無数の触手を撃ち抜き、それでも弾幕を掻い潜ってきた触手は斯衛小隊の武御雷の見事な太刀捌きによって、切り落とされて地面を転がることになる。

「月詠中尉！ 奴らの体液に注意を！ 返り血を浴びると汚染される

恐れがあります！」

「……承知した」

バイド体に近接攻撃を挑むという、危険な行為に宗像注意は咄嗟に警告を出した。

だが、武御雷の衛士である月詠中尉は涼しげな表情だ。

「だが、安心めされよ。陛下から賜ったこの機体。下賤の血で汚すのは我らとしても不本意なのでな」

そこでようやく、宗像中尉は斯衛小隊が触手を切り落とした際、返り血を一切浴びないように立ちまわっていたのだと気がついた。

確かにバイドと思わしき敵と遭遇した場合、体液や物理接触から汚染されるかもしれないという情報は、戦闘前のブリーフィングで彼女達にも伝えた。

しかしだからといって、返り血を浴びないような機動をしつつ、敵を長刀で切り裂くという馬鹿げた解決法を出されるとは思っても見なかった。

これが幼いころから鍛錬に鍛錬を繰り返して練り上げた武家の技量というものなのか。

宗像中尉は苦笑しながら、撃ち落とされ、切り落とされ、地面に横たわり自らの消化液で溶け始めている触手のバイド係数をサーチしたがバイド係数は極めて微弱なものだった。

シューティングスターからの説明によるとこの数値なら汚染の心配はほぼないはずだ。要塞級の触手の特徴である消化液を仕込んでいる関係で、汚染レベルが低いのだろうか？ これならば触手の迎撃は彼女達に任せてもいい。

ただし触手の本体である汚染母艦級のバイド係数は10を超えている。

こちらは自分たちが倒すしかない。自分たちしかこの怪物に挑める装備を持ってないのだ。

「全機、電磁投射砲斉射！」

その言葉と共に再度凄まじい勢いで、この場のヴァルキリーズの電磁投射砲が一齐に火を吹いた。

秒速20kmを越える30mm弾が機関銃に匹敵する連射速度で、汚染母艦級に次々と突き刺さり、辺り一体に血の雨を降らす。やはり電磁投射砲は効いている。

だが、倒せない。余りにも敵が大きすぎるのだ。電磁投射砲は間違いないく汚染母艦級の巨大なミミズのような胴体を貫通しているが、それでも殺しきれない。

それどころか――

「全機射撃やめ！」

宗像中尉のその一言で射撃がピタリと止まる。

「宗像中尉、どうして!?!」

「まだ、やれる」

不満気な榊少尉と彩峰少尉が疑問の声を上げる。

それに対して宗像中尉は簡潔に答えた。

「奴の垂れ流した血を見ろ！ あれには触手と違ってバイド係数が確認されている！」

「……っっ！」

その言葉に二人は言葉に詰まった。仮にも味方の基地で汚染された血液をばら撒くのは控えぬに行つて自殺行為だ。

「二度爆弾で焼き払うしかないようだな。各機、もう一度誘爆爆弾の用意。まず波動粒子のシャワーを浴びせて、奴を身奇麗にしてやろう。その後、なんとか口をもう一度開かせてその中にありつたけの誘爆爆弾を放り込む！」

「了解！」

隊員達が返事をした時だった。再び汚染母艦級の口の周りのヒゲならぬ触手が再生し、攻撃準備を取る。

いやそれだけではない。汚染母艦級が開けた大穴を登って、次々と穴の底から湧き出た小型種が横浜基地へと侵入してきたのだ。これらにはバイド係数探知機は反応してないので従来のBETAのようだが、タイミングが悪い。

彼らは散兵として基地内部に浸透することを選んだようで、こちらには見向きもせず横浜基地に開けられた縦穴から這い上がると、次々

と別の通路へと消えていく。

(不味い！ この状況で通常型のBETAに内部で暴れられたら手が付けられなくなる……！ 下手したら司令部まで……！ ここは部隊の一部を司令部に向かわせるか!?)

そう思ったのは彼女だけではなかったようで、大穴に開いた通路等から今までの戦闘を見物していた横浜基地の戦術機部隊が動き始めた。

「ヴァルキリーズ！ 中に入った奴や、今基地に入ろうとしている奴らはこちらで叩く！ お前たちはそのデカブツを殺すことに専念しろ！」

「折角ふざけた性能の不知火に乗ってるんだ。ここでハマしやがったらたじたじやおかねえぞ！」

そう言うのと、彼らはある者は壁が溶解して、吹きさらしになっている通路に侵入したBETAを追いかけて飛び込み、またある者は穴の淵から縦穴を登ってくるBETAの鼻先に劣化ウラン弾を叩き込んで奈落の底へと叩き込んでいく。

だが、その行動が汚染母艦級の注意を引いた。

それは大きく身をくねられるとその身を縦穴の外側へと叩きつける。

再度、大地震にも匹敵する衝撃が基地を揺らし、穴の淵に陣取り登ってくる小型種に対して射撃を続けていた戦術機が一機転落した。

更に間の悪いことに落下した戦術機を汚染母艦級から放たれた触手が絡め取る。

そして『食う』つもりなのか、捕獲した戦術機をゆっくりと口を開いてその中へと近づけていく。

「ジョーカー4!? 不味い、あの触手を撃て！」

そう叫ぶ宗像だったが、それを制したのは当の捕まった戦術機、ジョーカー4だった。

「へへへ……待てよ、これがいいんじゃないか。折角食おうってんなら……飛び切りのご馳走を用意しないと！」

その言葉と共にその場にいた全ての戦術機に警報が流れた。S――

11警報。今回のそれは友軍が——正確に言うなら触手に捉えられた戦術機が発動されたものだ。

汚染母艦級もS—11の効果を知っているのか、反射的に開けかけていた口を閉じた。

「全機、耐ショック姿勢!!」

次の瞬間、もう何度目になるかわからない大爆発が横浜基地を揺るがした。

轟音と振動が収まった時、90番格納庫で立っていたのは、体勢を低くして機体の制御に成功した宗像中尉と、長刀を床に突き立て踏みどまった斯衛小隊の武御雷と御剣機だけだった。

なるほど、長刀というのはああいう使い方もあるのか、と場違いな感心をしつつ彼女は自分の部下たちの状態を確認する。

皆、バイタルに異常なし。長刀を突き立てて踏みどまった御剣冥夜も含めて全員が衝撃のせいで一時的なショック状態になりかけているものの、数秒で意識がはつきりするだろう。機体にもダメージは受けていないが、A—01の隊員達は皆、即座に動ける状態ではなく今この時、即応できるのは自分だけだ。斯衛小隊の方も動けるかもしれないが、彼女たちには有効な武装を所持していない。

やはり指向性を与えられるとはいえ、S—11の衝撃波は効果範囲外にいても強烈だ。

そういう意味でもシューティングスターの誘爆爆弾は実に使いやすかった。

しかし自爆した戦術機、ジョーカー4の犠牲は無駄ではなかった。例の汚染母艦級は鼻面に強烈な一撃を食らったせいで、ただでさえひび割れていた巨大な歯の大半がへし折られ、その巨体を縦穴にぶつけてのたうち回ってる。

歯の大半がない今ならば、口腔内部に誘爆爆弾を放り込める。

そう判断した宗像中尉は、誘爆爆弾を片手に一気に助走をかける。それに反応したのか、汚染母艦級の頭部がこちらへと向き直り、その口腔を大きく開く。

そこにあつたものを見て宗像は、一瞬思考が止まりかけた。

汚染母艦級の口腔の奥にあったもの——それは舌のように取り付けられた光り輝く巨大な眼球だった。よく見るとそれは一つの眼球からできたものではなく、ハニカム構造のように無数の眼球を組み合わせて作った複眼だった。

そして複眼の一つ一つが重光線級の眼球によって構成されていたのだ。

これを作るのに一体どれだけの数の重光線級の眼球が必要になるのか。少なくとも百やそこらでは足りないだろう。

(これがあの異常な出力のレーザーの正体か!?)

同時に機体にレーザー警報が鳴り響く。

眼球からの初期照準用レーザーを機体のセンサーが探知したのだ。

あれを再び撃たれば今度こそ自分たちは凄乃皇と共に消滅する。

それを防ぐにはそれよりも先に爆弾を投擲するしかない。

咄嗟に斯衛小隊の武御雷が120mmを連射して、複眼の幾つかを潰してくれているが、眼球の数が多すぎて、決定打にはならない。

「喰らえっ！」

叫びながらメインアームを使って誘爆爆弾を投擲する。

弧を描いたそれが汚染母艦級の口内に飛び込むと同時に、レーザー警報が更に大きく鳴り響き、宗像中尉の視界を光が塗りつぶして、轟音が鼓膜を麻痺させた。

前後不覚になっていた時間は、ほんの数秒にも満たなかっただろう。

その数秒で汚染母艦級は致命的なまでのダメージを負っていた。

高熱のエネルギーが焼き払ったことにより、汚染母艦級の口腔内部は焼けただれ、巨大眼球は跡形もなく消し飛んでいる。

だがまだ汚染母艦級は辛うじて生きていた。

最早、触手を再生させる力も残っていないのか、汚染母艦級は大きく身をくねらすと一旦その体を仰け反らせた。

(不味いっ！)

それを見た宗像中尉の胸に焦燥が湧き上がる。

敵は仰け反った後、その反動を利用してこの90番格納庫に突っ込

んでくる気だと理解してしまったからである。

この圧倒的な質量の塊をそのまま叩きつけられたら、自分たちも凄乃皇四型もまとめて潰される。

間に合わぬと感じながらも、彼女は部下達に対して、即刻格納庫から退去を命じようとしたその時、

「あら、まだ食べ足りないの？ これは私の奢りよ、しつかり味わいなさいー！」

そんな聞き覚えのある声が、通信機から聞こえてきた。

それと同時に仰け反り、頭部を上へと向けていた汚染母艦級の開きっぱなしの口に何かが放り込まれる。

爆発。

もはや見慣れた濃緑色の光が、再び汚染母艦級の中で炸裂する。

放り込まれた爆弾は一つではなかったようで、数度に渡って汚染母艦級は文字通り口から緑色の火を吹いた後、そのまま崩れ落ち、自ら掘り進んできた底の見えぬ穴へと落下していった。

そして縦穴の上方から2機の不知火改が現れる。

遊撃部隊として別行動していた速瀬中尉と白銀少尉だ。

彼らが汚染母艦級の口に止めの誘爆爆弾を放り込んだのだろう。

「ごめんね。宗像。デートの邪魔しちゃったかしら？」

楽しげに速瀬中尉が軽口を叩いてくる。

このような異常な戦場にあっても、自らのスタンスを崩さない速瀬水月に宗像美冴は感心したが彼女もそれを一切顔に出さず、いつも通りの態度をあえてとる。

「構いませんよ。どうにも女性の事を考えない自分本位な輩だったので、どうやってお断りしようか考えていたのです。それにしてもあのようなケダモノすら守備範囲とは……。まだまだ自分も速瀬中尉には敵いませんね」

「むくなくかくたく？ それってどういう意味なの？？」

ジト目になった速瀬がモニター越しに睨みつけてくる。それに対して彼女は素知らぬ顔して付け加えた。

「と、白銀少尉が言っていました」

「しろがねえ!？」

「いや、言ってますせんよ!? どう見てもこれ冤罪じゃないですか俺!」
突然矛先を向けられた白銀少尉が思わず言い訳をする。

いつものヴアルキリーズの空気になったことよって、気を張り詰めていた新人達もリラックスできたようだ。

それが宗像中尉だけでなく、隊長である速瀬中尉の狙いでもあったのだろう。スケープゴートになってもらった白銀には悪いが、部隊唯一の男性隊員なのだから、これぐらいの割を食うのは我慢してもらえない。

新人達の緊張がほぐれたことを確認した速瀬中尉と宗像中尉は、現在の状況の共有を始める。

「しかし隊長、よく無事でしたね。……風間と茜のほうは？」

「レーザーが撃ち込まれた時、あたし達がいたのはちようど基地の端っこのほうだったから命拾いしたのよ。風間と茜のエレメントもあたし達とは反対方向で穴埋めしてたから多分無事だと思うわ。ところで、こっちの無線の調子悪いんだけど、そっちは司令部と連絡取れる?」

「いえ、格納庫のシステム経由で司令部と連絡を取り合ってたのですが、レーザーとS-11の爆発で基地のシステムが不調になったよう……とは言い、完全に通じてない訳でもないようで、そのうち回復するかと……」

その時、部隊の通信システムに雑音混じりの香月夕呼の声が入る。
『聞こえてる?……こっちからじゃそっちの状況がわからないんだけど、バイド体はどうなったの? 報告を……』

「香月先生? 大丈夫ですよ。例のバイドは俺達だけで倒せました。ありったけの誘爆爆弾を口の中に放り込んでやりましたから……先生?」

どうも向こうからの通信は届いているのだが、こちらの通信は届いていないらしい。

いつその事、こちらから司令部の方に出向いて直接報告するべきかと考えた時、向こう側の無線が聞き捨てならない情報を出した。

『……それよりも現在横浜基地の真下から、新しい振動音を探知したわ！ この通信が聞こえているなら、一刻も早くそこから退避しなさい……！』

「……え？」

新しい振動音？ それは一体どういうことだ？

白銀だけでなく、速瀬や宗像さえ相手に届かぬと知りながらも、香月博士に疑問をぶつけようとしたその時だった。

不知火改のコクピットに再び警告音が鳴り響く。

それはつい先程聞いたばかりの警告音——即ちバイド係数探知機が放つアラーム音だった。

「マジかよ……」

それが何を意味するのか悟った白銀がそう呻くと同時に、『二体目』の汚染母艦級が再び穴から這い上がってきた。

一五話 歩兵

『タクシーより横浜基地司令部へ。横浜基地の表層部の物資集積所へと到着した。現在機動歩兵部隊を展開中。展開後は機動歩兵と共にBETAの掃討にあたる。機動歩兵部隊は10のユニットから構成されている。コールサインはポーン1からポーン10だ。ポーン1とポーン2は横浜基地の司令部への護衛へ回す。そちらの歩兵に撃たれないようにしてやってくれ。ポーン3と4はこちらと共にBETAの掃討にあたる。ポーン5から10まではそちらの自由に使ってくれて構わない。ゴリアテは外部に重光線級が集結しつつあるので、そちらの殲滅の実行中。』

横浜基地内部表層部ではゴリアテより先行して基地内部に突入した汎用工作型R戦闘機コールサイン『タクシー』が、後部の輸送コンテナより機動歩兵部隊を展開していた。

無論、機動歩兵と言ってもこの21世紀で運用されている強化外骨格とは全く違う。

全高2m強の重火器を装備した人型兵器に操縦者が乗り込むというコンセプトは同じだ。しかし外見も性質も根本的に異なっているということ、香月博士を始めとした横浜基地司令部はタクシーより送られてきた彼らが運用する機動歩兵のスペックデータを見て理解せざるを得なかった。

重機動歩兵M-308 ペットネーム『ストームガンナー』
それがタクシーが搭載している機動歩兵の正式な名称だ。

R戦闘機のキャノピーを思わせる頭部にマツシブなボディ。更に空間戦闘に備えて機体の背部に、四方に張り出した羽型の姿勢制御ユニットを持つ大型の推進システムを装備している。

全高3mの巨体だが状況によっては『正座』することによって脚部を折りたたみ、背部のスタスターと搭載した特殊装置で歩行せずに移動することも可能な為、高さ2.4m以下の人間用に作られた施設にも侵入可能。

主武装はパワーブラスタと呼ばれる手に装備したライフル型の波動粒子砲。R戦闘機の波動砲とは比較にもならない低出力だが、代わりに連射が可能で数を撃ちこめば理論上は中型のバイド体すら撃破可能なスペックを有している。

更に防衛兵装として『シールド』と呼ばれる波動粒子によるバリアフィールドを前面に展開可能。

このシールドは燃費の関係で瞬間的にしか展開できないようだが、個人携行レベルの武装は完全にシャットアウト。突破できるのは機動兵器クラスが装備する高出力、高初速の光学兵器や実弾兵器のみということらしい。

だがこの兵器の最大の特徴はこのサイズでありながら、擬似的な重力制御システムを搭載していることだ。

重力反転システムと呼ばれるそれは、ザイオング慣性制御システムの機能を更に限定させ、小型化させたもので、これによって自身に掛かるGの向きを自由に変えることが可能なのだ。

その為、このストームガンナーは天井や壁を『歩く』事も可能だし、上空に向かって『落下』することで飛行することもできる。

更にはコントロールした自由落下速度に自身に搭載されたスラスターによる推力を加え、前述したシールドを利用しての敵に対する『体当たり』がこの機体の最大の攻撃という記述を見た時、香月夕呼はこの兵器の製作者の正気を疑った。

少なくともR戦闘機の開発者達と同じレベルの考え方をしているのは間違いない。

これも22世紀の兵器の例にもれず戦闘能力が異常に高く、過去にエース用のカスタム機が単機で宇宙要塞を奪還した戦歴すらあるらしい。

このデータを証明するかのようには、タクシーの後部コンテナから次々と飛び出したストームガンナー達はBETAの群れに向かって、シールドを展開しつつ突撃。文字通り青い火の玉となった彼らは、進路上にいた小型種を蹴散らし、要撃級や突撃級にも突っ込んで直径3mの風穴を開けて沈黙させた。

そしてその後は、天井にその逞しい脚部で『着地』すると眼下のBETA——彼らからすれば天井に張り付いたBETAに向けて、ひたすら手にしたパワーブラスターを撃ち続ける。

着弾と同時に炸裂し、小爆発を起こすパワーブラスターは連射可能な榴弾砲のようなもので、小型種なら一撃で撃破、大型種でも数発を撃ちこめば着弾時の爆発で組織をズタズタにして機能停止させることができる。

弾数の制限も今のところないようで、彼らは天井からそれを機関銃のように景気良くBETA達に向かって撃ちこんでいる。

この物資集積所で戦闘をしていたBETA群は自らの仲間の死骸を盾にして、巧みに戦術機に近寄り攻撃していたが、その戦術が有効なのはあくまで水平方向から攻撃を仕掛けてくる戦術機相手だけだ。

文字通り自分の頭上から撃たれては、仲間の死骸を盾にしても何の意味もない。それどころかこちらの攻撃も届かない。

戦車級なら壁から登って天井を歩くことも可能だが、あくまで力で壁や天井に張り付いているだけで、その速度は遅く、壁を登っている最中にストームガンナーに感づかれて真っ先に撃ち殺されていた。

壊れたスプリングラーのように天井から亜光速の粒子弾をばら撒き続けるストームガンナー達に、更にタクシーの電磁投射砲の支援射撃まで加わって物資集積所のBETAは瞬く間にその数を減らしていく。

同時に外部からのBETAの流入もいつの間にか止まっていた。

その事に気がついた香月夕呼は外の光景を映すようにオペレーターに命じるが、そこには更に想像を絶した光景が映っていた。



無数のBETAが粒子弾幕の嵐に薙ぎ払われていく。

当初、それを見た香月は、あの旧町田市でBETAの挽き肉の山を作り上げていた緑色のR戦闘機がこちらにも来たのかと思ったが、よく見ると弾幕の質が全く違うことに気がついた。

あのR戦闘機は一度に大量の弾幕を発射していたが、こちらで乱射される弾幕はあれほどの連射力と威力は無い。代わりに間断無く、無尽蔵に、まるで螺旋を描くかのように全周囲に無差別に撒き散らしている。

これの弾幕の一発の威力はさほどでもないようで、頑丈な突撃級や要塞級などは弾幕の斉射を食らっても耐える場合が多い。だが、それはあくまで一斉射や二斉射に限る。尽きることのない弾幕の嵐は確実に甲殻を穿ち、胴体に食い込み、やがて彼らを挽き肉へと変えていくのだ。

そしてその弾幕の発生源はR戦闘機ではない。ウニのように脈動する無数の棘を貼り付け、その棘の僅かな隙間からオレンジ色の光を放つ独特な形状を持つフォースだ。

そのフォースを一目見て、それがこの横浜基地にやってきた2機のRの片割れ、TP-2H ” POW ^{バウ} ARMOR ^{アー} II ” ^改 コールサイン『ゴリアテ』の装備するニードルフォースであると香月夕呼は気がついた。

「フォースの母機がいるはずよ！ ゴリアテを探しなさい！」
彼女の命令にしたがって、オペレーター達が慌てて基地外部の生きているカメラを操作する。

基地外部のカメラにはフォースの弾幕で薙ぎ払われるBETA以外にも、衛星軌道上からの砲撃と思われる光の柱によって旧横浜市ごと消し飛ばされていくBETAの群れも映りこんで、まさしく地上は地獄絵図のような状況になっている。その為目視による搜索は困難を極めたが、シユーティングスターから送られてくるR戦闘機の位置情報を元に一人のオペレーターが目標を発見した。

「見つけました！ メインゲート上です！」

充填処理されたメインゲートを破壊しようと群がっていたBETAはそれに既に掃討された後のようで、いつの間にかメインゲート前は無数のBETAの死骸で埋め尽くされていた。

それはBETAの血と肉の絨毯で舗装されたメインゲートの上に、その特徴的な二本足で立っていた。

重装甲に覆われた黒く丸い機体。赤い眼球じみた巨大な球状キャノピー。そして二本足の間にある電磁投射砲。特に印象に残る球状のキャノピーは、見る者にまるで機械仕掛けの光線級のようなイメージを与える。

そして機体正面には例のごとく青い光が集束し、炸裂する瞬間を待ちわびるかのように大きく輝いている。

TP-2H ” POW ARMOR II ” コールサイン『ゴリアテ』、波動砲発射準備完了。

ゴリアテは脚部の力を用いてメインゲートから大きく空へと跳躍する。生き残った光線級からの無数のレーザーが放たれるが、スラスターを噴射してゴリアテは更に加速し強引に回避。そのままゴリアテは一瞬で上空1000m程の高度に達すると、最後に生き残っているBETAの群れに向けて集束した波動粒子を開放した。

波動粒子による青い光が炸裂し——炸裂と同時にゴリアテの眼前から突如現れた無数の怪物の群れが、雪崩を打って地上のBETAの群れへと躍りかかった。

この余りの異様な光景には、そろそろ異常に慣れつつあった司令部も戸惑いのざわめきに包まれる。

「……なんだ、あれは!?!」

そうパウル・ラダビノツド司令官が叫んでしまうのも無理もない話だった。

彼の狼狽ぶりに副司令である香月は逆に幾らかの冷静さを取り戻した。

そして司令官やほかの人員達に言い聞かせるように、シューティングスターから送られてきたデータにあったTP-2H ” POW ARMOR II ” の波動砲の仕組みを呟く。

「バイド砲。限りなくバイド粒子に近い性質の波動粒子を光学的に集束させて放つ波動砲。砲撃がバイド体の形状をしていることに対するメリットは特に無し。とのことですが……」

そこで改めてモニターを見る。

そこには蒼い光で構成された様々な怪物達——全長十数メートル

ルの大百足、四足歩行する異形の獣、頭頂部が異様に後部に伸びた胎児のような化け物——が、地上のBETA達に襲いかかっている様子が映されている。

青く発光し、体内まで透過しているように見える彼らは、もう怪物というよりは生者を求めて彷徨う悪霊と表現したほうがいい。

「どう見てもあれ、自我を持って敵を襲っていますわね」

「うむ。すごく生き生きとしておる。BETAよりもよほど怪物らしい」

司令官と副司令は揃って感想を述べ、オペレーター達も頷いた。

実際バイド砲によって射出された光学バイド体は喜々としてBETAに襲いかかり、その波動粒子で構成された肉体を接触させることで、標的を消滅させていく。

相手を消滅させることで自身を構成する波動粒子も減衰していくようで、敵を消滅させる度に光学バイド体はその身を小さくしていくが、光学バイド体の群れはお構いなしに次々とBETAの群れに飛び込んでいき、最終的に自分たちの消滅と引き換えに残った全てのBETA達を消滅させることに成功した。

これで地上のBETAの大半はほぼ全滅したことになる。

それを見届けた空中のゴリアテは身を翻すと、汚染母艦級がレーザーによって横浜基地に開けた大穴に向かって落下の軌道を変更する。大きく脚を広げたその姿は、まるで空のダイビングを楽しんでいるのかのような優雅さがあった。

そこで落下中のゴリアテから司令部へと通信が入った。

『ゴリアテより横浜基地へ。これで地上で暴れていた光線級は全て片付けた。これより横浜基地に突入し、残ったバイド体の排除を開始する』



「遠慮すんじゃないわねえ！ たつぷりと食らいやがれ！」

横浜基地の地下では未だ戦闘が続いていた。

力を失い地下へと沈んでいった汚染母艦級と入れ替わるように、新たな汚染母艦級が地下から上昇してきた為だ。

絶望的な状況だが、幸いな事が一つだけあった。90番格納庫でヴァルキリーズの別働隊が一度交戦し、汚染母艦級の性能や戦術をヴァルキリーズのトップエースである、速瀬中尉と白銀少尉に伝えられた事だ。

二人のエースは縦穴で新たな汚染母艦級を迎え撃つ。

迫り来る触手の群れを、縦横無尽の三次元機動で回避。そして白銀少尉に至っては、挑発するように温存していた跳躍ユニットまで使って、汚染母艦級の頭の周りを飛び回る。

まるで自分にたかる蠅のようなその機動に、汚染母艦級の忍耐が切れたのだろう。

白銀機を食い殺そうと——或いはレーザーで焼き殺そうとして大きくその口を開けた。

「皆、今だー！」

その言葉と共に90番格納庫で機を伺っていたA—01隊員達が、手持ちの誘爆爆弾を汚染母艦級の口内に次々と投擲する。

高い出力を出すことが可能になった電磁伸縮炭素帯により、不知火改の腕力もまた引き上げられており、豪速球のような速度で爆弾は汚染母艦級の体内に着弾し、炸裂した。

体内から6発分の爆弾による高熱のエネルギーで焼かれた汚染母艦級は、反射的に口を閉じてしまった。その結果、体内で荒れ狂う爆発に内側から完全にローストされ、最初の個体と同じく力を失い地下へと沈んでいった。

「やったあー！ 流石です、たけるさんー！」

初戦より容易く二体目を撃破できたことに対して珠瀬壬姫が歓声を上げる。

実際、速瀬機と白銀機が敵を攪乱しなければ、こうも簡単に口腔内に誘爆爆弾を投げ込むことはできなかつただろう。

だが。

「気を抜くな珠瀬！ バイド係数はまだ下がってない！」

気を緩めかけた部下に宗像中尉が叱責を行う。

彼女は反射的にひやい！ と小さく返事をし、そして自機のバイド係数測定器を見て再び顔を青ざめた。

「これって……」

「三体目が来るよ！ 珠瀬、誘爆爆弾の準備をして！」

それが何を意味するか完全に理解するより早く、同期である鎧衣が警告を飛ばす。

そして彼女の警告と共に再び地震のような振動が、横浜基地を襲い始めていた。

「畜生！ あいつらは後何体いるんだよ!? 誘爆爆弾が無くなったらもう勝てねえぞ！」

「白銀！ あんた誘爆爆弾は後何発残ってる!?!」

速瀬中尉の問に白銀は自機に残された誘爆爆弾の数を数えようとして——顔を引きつらせた。

「……もう全部使っちゃいました！」

「じゃあ、ここは私が囨になる！ あんたは一旦90番格納庫に降りて、味方から爆弾を受け取って来なさい！」

「了解！ くそっシューティングスターからの援軍はまだなのか!?!」

「現在浸透したBETAに司令部方面が襲われて大混乱よ！ あいつらはそっちのBETAを優先して排除してる！ 向こうが片付いたらこっちに來るからそれまで時間を稼ぐわよ！」

「……了解！」

そうこうしている間にも新たな汚染母艦級が登ってきた。この個体は白銀機と速瀬機を脅威と見たのか、90番格納庫を無視して一気に縦穴を登ってきて、2機に攻撃を仕掛けてきた。

迫り来る無数の触手を電磁投射砲と長刀でなぎ払いながら、白銀機は狭い縦穴を暴れまわる汚染母艦級の巨体の脇を掠めるように降下、半壊した90番格納庫へと飛び込む。

90番格納庫もまた汚染母艦級の開けた穴を通して無数のBETAが侵入しつつあった。

大半が縦穴を登ってきた通常の小型種だが、背後にXG-70dを

抱える彼女達としては放置できるものでもなくヴァルキリーズと斯衛小隊はそちらの始末にかかりきりになっている。

飛び込むと同時に目についた戦車級を電磁投射砲でなぎ払いながら、白銀はその場の指揮官である宗像美冨に通信を繋いだ。

「……宗像中尉！ 例の誘爆爆弾はありますか！ こっちはもう品切れなんです！」

「こちららも小型種の掃討にも使ったからな、こちらの連中のものは全員含めて残りあと6つだ！」

「……たつたそれだけですか!?!」

それだけあれば確かに今暴れている汚染母艦級は倒せるだろう。

だが、汚染母艦級一体を倒すのに最低でもあの誘爆爆弾は6つは必要になる。

もしこれで敵が打ち止めなら後は電磁投射砲だけでどうにかなるが、さらなる敵の増援が来たら――

（いや、今はそんな事を言ってる場合じゃねえ！ まずは今暴れてる汚染母艦級を倒さねえと一人で囷をしている速瀬中尉がやばいんだ！）

「どうもあいつはお前と中尉にお熱なようだ！ 格納庫の掃除は私達に任せてありつたけの誘爆爆弾を持っていけ！」

「ありがとうございます！」

仲間達から次々とグリップ付きの誘爆爆弾が投げられてくる。

それを白銀機は見事にキャッチし、腰や大腿部のグレネード収納用のアタッチメントに取り付けてく。これで準備は万全だ。

「こっちは任せろ！ 速瀬中尉を頼んだぞ！ それと御剣少尉！」

「はっ！」

「白銀の護衛につけ！ この中ではお前が一番白銀の動きについて行ける！」

「了解しました！」

そのやり取りに慌てたのは当の白銀だ。

「え……！ でも宗像中尉」

「反論は無しだ白銀。お前に誘爆爆弾を全て渡すんだ。万が一にもお

前がやられたらそれで終わりになるんだからな」

「安心するがよい。奴の攻撃パターンは下から観察していたから、十全に対応できるつもりだ。それともそなた、私に背中を任せるのは不安か？」

そうとまで言われたら白銀も反論は出来ない。元々条件反射的に言い返していたようなものだからだ。

「……いや。お前が後ろ守ってくれるなら、心強いさ、じゃあ行くぞ冥夜！ 遅れるんじゃないぞ！」

「ふっ、言うな。そちらこそ遅れるでないぞ！」

そして2機の不知火改は格納庫に空いた大穴から跳躍ユニットと強化された脚部のパワーを使って、一気に縦穴を登っていく。

狭い縦穴の中でその巨体をうねらせる汚染母艦級を躲しながらのその作業は難易度の高いものだが、なんとか2機は汚染母艦級の先端部付近まで登ることができた。

先端部の上空では速瀬機が、かろうじて汚染母艦級の触手の群れを捌いていた。

何しろ触手は撃ちぬいても切り落としても、その度に新しく生えてくるのだ。いくら不知火改でもこの縦穴の中でその無限ともいうべき攻撃を捌ききれていたのは驚嘆に値する。

「……っ！ ようやく来たわね、遅いわよ！ 後で……」

「腕立て百回ですね！ やってやりますよ！」

速瀬中尉からの言葉を遮り、白銀は更に機体を加速させる。

「冥夜あ！ 今から突っ込む！ 俺に迫ってくる触手はそちに任せた！」

「任せるがいい！」

白銀は背後の彼女が答えを聞くと同時に汚染母艦級へと突っ込んでいく。

それに気がついたのか、相手も触手の一部をこちらに送り込んできた。

彼の機体は誘爆爆弾の握り棒であるグリップ部分を戦術機の指に挟みこむように持ち、右手に3つ、左手に3つと計6つの誘爆爆弾を

保持している。

その為手が塞がり、電磁投射砲も長刀も使えない。背面の兵装担架に予備兵装の突撃銃があるが、これでは触手を一撃で撃ち落とすことが出来ないため、気休め程度の存在だ。

もし背後の冥夜機が自分に向かってくる触手を仕留め損ねたら、白銀機はあつという間にやられるだろう。

だが冥夜がいる限り、そうならないという確かな信頼が彼にはあつた。

無数の触手が白銀機へと銃弾の如き勢いで撃ち込まれ——そしてその全てが背後の冥夜機と速瀬機の援護射撃が全て叩き落とす。

業を煮やしたのか、汚染母艦級は白銀機に向かって体当たりをするが、白銀機は背後の壁を強化された脚部で蹴って更に跳躍し回避。そのまま汚染母艦級の頭上を取る。

汚染母艦級が白銀機を見上げ、巨大な口を開く。その口腔内部では巨大な複眼がレーザー発射準備を終えて白く発光していた。管制ユニット内部にレーザー警報が鳴り響く。

だがそれは白銀にとつては好都合だった。

「高級品だ！　しっかり味わえー！」

その叫びと共に、彼は全力で誘爆爆弾を汚染母艦級の口腔内部へと投擲した。

砲弾じみた速度で誘爆爆弾が怪物の口の中へ飛び込み、爆発。連続的に重低音が鳴り響き、その都度、濃緑色の閃光が瞬く。

発射寸前のレーザーも暴発したのか、予想以上の大爆発が起こり、汚染母艦級の先端部が丸ごと消し飛んだ。

「やった……！」

その光景を見た白銀は、呟いた。彼は衝撃で機体のバランスを崩しながらも、咄嗟に長刀を壁に打ち込み、なんとか墜落を免れていた。見ると御剣機も同じようにして落下を免れている。速瀬機は、縦穴に開いた通路に退避していた。

汚染母艦級は身悶えして、そのまま先の様に落下していくと思われ

たその時だった。

「こいつ！ まだ生きてるのか!？」

先端部が吹き飛んだ汚染母艦級が再び動き始めたのだ。

発射寸前のレーザーが暴発したせいか、それとも複数の誘爆爆弾のエネルギーの火力が一点に集中しすぎて、体内全てにエネルギーが浸透しなかったのか。

（不味い……い……もう爆弾はねえぞ！ 後はS―11を使うしか……でも機体からS―11を取り外す暇なんてこいつがくれるわけがない！）

頭部を無くした汚染母艦級はもう触手やレーザーによる攻撃を諦めて、別の攻撃方法をすることにしたらしい。

すなわち、その巨体を活かした体当たりだ。この狭い縦穴をでいつまで避けられるか——白銀が冷や汗をたらしながらそう思ったその時だった。

彼の機体の側面を何かが高速で通り過ぎ、先端部が無くなり開きっぱなしの汚染母艦級の体内へと飛び込んでいく。

辛うじてそれを輪郭を捉えた白銀は変なものでも見たような感覚を覚えた。

（なんだありや……？ トゲ付き鉄球？）

だが、実際はそんな生易しいものではなかった。

汚染母艦級の体内に入ったそれが一瞬輝いたかと思うと、凄まじい勢いで光り輝く弾幕を全周囲に撒き散らし始めたのだ。

幸いそれらは、意図してか、それとも偶然か、自分たちには飛んで来なかったが、体内でそんなものを撒き散らされる汚染母艦級としてはたまったものではない。

口が消し飛び、そもそも発声器官もないため、悲鳴すらあげられないそれは、全身をのたうち回らせることで、見事に苦しみを表現していた。

「な、なんだあ!？」

「タケル、あれは……!？」

「白銀、御剣、上!？」

驚愕する白銀と御剣だが、そこに速瀬機からの悲鳴じみた警告が飛び込んでくる。

反射的に頭上を見上げた二人の視界に飛び込んだ物は、青白く輝く無数の異形の群れだった。